

碑文

〔東洋學會雜誌三三〕 權田直助翁の碑文

(井上頼國氏)

惟神の古書道

神道方經驗抄

國事に盡す

語學の研究

源朝臣權田直助大人は、武藏國入間郡毛呂本郷の人也。祖父孫次郎の代より、書を業とす。幼より智深く、書讀むを好み、手能く書れき。十七歳の時、父直助ぬしを喪ひ、慕む事、尋常ならず。十九歳の時、憤を起し、我學未足らず、業も精しからば、其師に就て問はむとて、妻を捨て、母に任しめ、將軍家の侍醫、野間廣春院の許に行て、三年が間勤勉め、採後四方を行廻りて、家歸り、再書を讀み、二十三年の時、思はれけるは、神州の西にして、漢洋の技を假むは快らず。惟神なる古書道を、こゝに興さめとて、平田篤胤翁の弟子となり、神道の道に専ら、其外、此道の精義にせむ爲に、眼科、外治方、産科等も、遠る限なく學究て、其業日に特に進み、其名四方に聞え、病者人等、遠近より集つ、且暮暇無りければ、斯ては書を著し、道を後世に傳ふこと能はずとて、治業を門人に、家事を妻に打委せ、一室に指籠りて、書を著す事に専ら、神道方經驗抄十卷を作り、京に上りて、錦小路頼易君に呈られしに、君甚賞て、序文など賜へり。此外古書道に就て、論注されたる書、三十餘も有べし。大人の家は、富に非られど、門人又は、病者の貧しきには、衣食を授て、教もし、療もせられけり。さる間に、將軍家の政漸衰へ、見聞に堪へぬ事多かりければ、深く憤憤り、人の病は、小く、國の病は大也。若其小を後にし、大なるを先にせむとて、文久三年の春の初、京に上り、錦小路五條の國體を始め、廣くまめ人等と交り、天皇の大徳威を、古に復奉むと、幕相謀られき。慶應三年の秋の末、再、田積徳と名を變て、江戸三田なる島津家の邸に入り、又京に上り、明治元年五月、錦旗奉行、五條爲榮君に従ひ、姫路に抵り、二月には、若介具親君の命に依て、江戸に下らる。是より先、島津邸の風有て、徳川家の派士を追捕る事極て嚴なれば、朋友等深く危み、頗に留けれど、大人は此役こそ、天下の大事なれば、縱、死とも許可らずとて、遂に下りて、其任を盡さる。斯て斯き大御代と成ぬれば、監察司知事、大學中博士、從六位、皇漢書道御用掛など、云官位に召されしに、明治四年の四月、龍巖に依て之を罷られ、前田家の邸に幽閉られぬ。茲に大人、熱世の勢を思ひ、古書道の行難きを知り、又後世に遺べき書も、大抵記了たれば、此の幽閉を好機として、語の學を講明むと、夜露の刺無く勉學び、一年許有て免されし後、益之に心を盡さる。さて明治六年七月より、此間夫利神社に在幸り、又十二年より、十四年の間は、伊豆國三島神社の宮司ともなり、正七位に叙られ、數職は、大教

容貌 敬神 要

著書

正に至り、皇典講究所にては、一等學正たり。十四年十二月、戸籍を此地に移し、二十年一月三日より病て、同六月八日没らる。文化六年十二月十七日に生れ、此時七十九歳也。業を換てより、著されたる書、神道に係るもの凡十種、語法に係る者、凡廿種、孰れも天地の真理に本きて、論議されたり。大人の母刀白は、武藏國高麗郡高萩郷、佐久間氏の長女、名を久夏子と云。大人、年五十を踰らる、迄、恙無りしかば、朝夕の萬の事、人に委せず。皆夫婦にて、悉く仕られき。大人、氣神短く、色氣く、目口小く、鬚髮豐の如く、老て後腰屈まらず。強健にて、眠ること少し。常に曰く、書を讀には、未明と深更とを用ふべし。人の總時に勤ずば、突か人に劣る事を得むと。病に臥して、手には筆を放すして、著述せられき。大人の鼻を鼻ぶ心の厚きは、奉明天皇崩御の新、憂歎て病に罹り、神を敬ぶ心の深きは、此山に登るは更也。有神を拜むには、必沐浴し、病中と雖も、情事無りしにて知るべし。天性斯の如くにて、聊か挽飾るに非ざれば、門人等、其徳に懐きて、敬ぶ事神の如くなりき。大人の妻、幾久子は、武藏國入間郡成瀬村、目崎氏の女、大人に先て亡る。一男二女有り。男は年幼、第一作の父なり。長女毛登は、飯能村早川舟平に嫁ぎ、二女波留は、將軍家の邸、倉谷清四郎の妻となれり。

- 〔慶著〕詞の経緯圖 一 詞の眞澄鏡 一 體用辭圖解
- 語學自在 二 國文句讀考 一 國文學柱
- 文典辨疑 漢文和讀例 七 形狀音入需 三
- 詞の八衛頭注 詞の玉緒頭注 七 語學問答
- 詞の通路頭注 三 てにをは品定め 一 熱海日記
- 轉言分類 助字分類 一 用言分類
- みまたのふゆ 心の種 祭典修禮書
- 葬儀式 醫道百首 醫道百首解

古醫道經驗略
 [編者補] 童蒙語學問答一
 古醫道法則 一
 名越通舎老後集
 古醫道法則略註 一

堀秀成

生 歿
 住 所
 姓 名
 年 譜

生 二四八一、仁孝、文政二年一二六、
 歿 二五四七、今上、明治二〇年一〇三、
 籍地 江戸大名小路、
 内記、八左衛門、
 [帝國文學] 堀秀成翁略譜
 文政二己卯年十二月六日、江戸大名小路、古河の藩邸に生る。一歳。
 全三庚辰年八月四日、母死す。行年十九歳。石河侯の重臣石河大郎女也。二歳。
 壬午全五年、異腹の弟生る。後、己が後を継げる嗣重清也。四歳。
 乙酉全八年、異腹の妹生る。後、古河藩、山下津左衛門の妾となる。七歳。
 丙戌全九年、小山監外を師として習字を始む。八歳。
 丁亥全十年、古河藩、土岐丹次郎を師と爲て、馬術を學び始む。同藩、小松崎七を師と爲て、演義を始む。九歳。
 戊子全十一年、古河藩、鈴木準藏を師と爲て、鎗術の術を學び始む。十歳。
 庚寅天保二年、始て君侯の近習に奉仕す。十二歳。
 甲午全五年、納戸役に進み、公用方見習を兼ねぬ。浪士、谷正太夫を師と爲て、山鹿流の兵學を學上。十

六歳。

乙未全六年、本年より和歌を詠み始む。十七歳。
 丙申全七年、職原抄支流を見て、制度學の志を興す。十八歳。
 丁酉全八年、馬術の師より免許を得る。兵學の師より開傳を得る。十九歳。
 戊戌全九年九月四日、父重遠死、行年三十八歳。十月父の遺跡を襲て、先鋒の隊長に進む。廿歳。
 己亥全十年、古河城に移る。古河藩、池田數馬を師と爲て、弓術の術を學上。廿一歳。
 庚子全十一年、鎗術の師より免許を得る。伯父、小杉教長死。五月十六日。行年五十。廿二歳。
 辛丑全十二年四月致仕、弟重清家を襲ふ。廿三歳。
 壬寅全十三年、皇典學に志して、古河城を退く。廿四歳。
 癸卯全十四年五月一日、祖母死す。行年七十八。廿五歳。
 戊申嘉永元年、天保十三年より、七年間歸家に就て勤學す。廿六歳。
 己酉全二歳、陸奥國涌谷に、二月より十一月まで、書を讀じて滞在す。此時國書、松山寺を遊覽す。音義考の草稿を起す。廿一歳。
 庚戌全三年、駿河國江尻驛に卜居して、近郷の弟子を教示す。勸諭音義考を著す。廿二歳。
 辛亥全卅年、尾崎氏の女を妻とす。甲斐國市川に卜居す。廿三歳。
 壬子全五年、本年より別て苦學す。遺愛を著す。廿四歳。
 癸丑全六年、櫻の板屋、稻種考、萩の上風を著す。廿五歳。
 甲寅安政元年、三種類辭を著す。廿六歳。
 乙卯全二年、衣文千経一絲、古道提綱を著す。廿七歳。
 丙辰全三年、甲斐國御嶽神官數輩の請に依て、其社中に滞在す。茂足を改て秀成とす。時次國書、神名考、音義考を著す。廿八歳。
 丁巳全四年六月、景山源四公の召に應じて出府。古事記、并音義を遺稿し、勸諭音義考二卷を著して奉る。種々の物給りて、八月甲斐國に歸る。音義本末考、假名本末考、異音圖考、勸諭音義考を著す。廿九歳。
 戊午全五年、武藏國入王子駒木野等の弟子の請に依て、四月より入王子に滞在す。本年數々江戸

に通ひて書を購す。訓點考「活語彙」假名比例」を著す。四十歳。
 己未全六年、春相模國大山の社中の請に依て、神事の古式を傳へに行く。此は白川殿に申請ひ、其殿の囑に従ひてなり。弟子落合直亮、同直澄、尾崎行義從へり。「祝詞名義考」「類語彙考」「朝れがみ」「二祝辨」「三禮徑」「詞入節補正」「音圖大全解」を著す。四十一歳。
 庚申萬延元年、富士吉田の社中に、神事の古式を教示に請れて行く。弟子落合直澄、同直育、佐藤正雄從へり。落合直亮が妹を後妻とす。十一月廿九日、藤太郎秀雄生る。「音圖大全」「朝家朝制」「軍勅令圖式」「さき草」「拾格圖彙」を著す。四十二歳。
 辛酉文久元年、職原抄問答「雜語本義考」「陳忠福」名目二百首「武備百首」「いりのみつ」「或問」ひとひのすさび」を著す。四十三歳。
 壬戌全二年夏、上野國草津に湯治す。甲斐國弟子四人從ふ。七月、桐原藩。藤次郎秀雄生る。十月江戸に歸り住む。「制度圖式」「有職圖式」「漢千鳥」を著す。四十四歳。
 癸亥全三年六月、諏訪の藩の請に依て至る。歸途、再草津に湯治す。八月上京、冬まで在京。十二月、奈良の重都を見る。神宮を拜して江戸に歸る。四十五歳。
 甲子元治元年、春、甲府に滞在す。落合氏離別後、声野氏を妾とす。後妻に改む。「音義深録」「古今序新註」を著す。四十六歳。
 乙丑慶應元年六月廿五日、藤三郎秀雄生る。九月、龜山の紅葉を見んと、駿河國に行き、宮門人を訪ふ。弟子一人從ふ。「五氣論」「神龜考」「滝澤考」「かやり草」「六音假字考」「紅葉記」「草津雲山記」「類語彙考」「古傳圖考」「古今序文義考」「古百類類」「大政詞文義考」を著す。四十七歳。
 丙寅全二年四月、甲府を立て、伊豆國熱海に湯治す。冬武藏國赤坂の里に滞在す。「龜山千鳥」を著す。四十八歳。
 丁卯全三年春、脚疾を病む。十年、箱根に湯治す。歸途、江ノ島、鎌倉、金澤等に遊ぶ。藤四郎秀行生る。十一月上野國館林の池庵に滞在す。「古道提綱」「鞍馬百重抄用論」「池庵後集」を著す。四十九歳。
 戊辰明治元年春、脚疾再發。九月、下野國佐野に滞在す。校正「祝詞彙考」「音圖指掌」「書中文義」「漢風」を著す。五十歳。

己巳全二年、諸國皇學校建設の公命に依り、下野國皇教示になりて、赤見の里に寓居す。六月、皇官書を待詔局に出す。「自序文集」「三令圖式」「皇則」「位階沿革論」「時局時議」「民權專議」等を著す。五十一歳。
 庚午明治三年正月、下野國葛飾郡野田町に滞在す。三月廿三日、宣教の大講義生に任ぜらる。五月廿四日、權少博士に遷み。七月廿日、少博士に遷む。十月廿一日、女子米子出生。十二月廿四日、人員減少に付免ぜられ、即日權少博士拜命。神龜演義「神龜語彙考」命を受けて著す。五十二歳。
 辛未全四年、去年十二月より、諸藩宣教係出京を命ぜられ、其係を著む。「明教百首」「爾雅書目撰」命を受けて著す。五十三歳。
 壬申全五年正月三日、於 御前神武記を撰す。權判官小野道道を以て、御前奉を蒙る。三月十四日、廢省。五月四日、相地、並、金四十圓を賜はる。全廿九日、教部省十等出仕、兼補中議。六月廿日、兼補大講義。十一月廿四日、列任官一同免職。即日如故拜命。五十四歳。
 癸酉全六年三月十三日、藤五郎生る。全廿三日、大教院講義員を兼務す。全三十一日、函館出張を命ぜらる。四月十九日、出立。全二十二日、祝詞彙考「山崎の物語」「いめの直書」を著す。五十五歳。
 甲戌全七年四月廿六日、函館出帆。五月一日、歸京。全十四日、宣教として金五十圓給る。十一月二日、出仕免ぜられ、本省履月金五十圓可相被旨辭令書給はる。十一月、宣教として金四十圓給はる。「祝詞彙考」「拾遺」「音義綱領」「教範本義」「三林說教」を著す。五十六歳。
 乙亥全八年十一月十四日、皇大神宮禰宜に任ぜられ、全廿日、辭職奉る。全三十日、願に依て本官を免ぜられ、大講義專補。此年大に學風を改む。「訂入種考」「音圖彙考」「甲斐日記」「學會文集」の著「靈氣考」を著す。五十七歳。
 丙子全九年五月廿二日、太政官より權少教正に補せらる。八月十八日、女子賴子生る。五十歳大意「話學階梯」を著す。五十八歳。
 丁丑全十年一月、初めて朝賀天願を拜す。五月四日、學醫院醫學教示を兼る。同院の時、太府宮の御前に、皇國語法の總論を講す。十月、木務多端を以て、學醫院を辭す。本年公費の困を以て、大に皇語の學を擴張せんとして、所々に之を講す。英國公使附屬の「エルクレスト、ヤトウ」等も、甚だ

音義書

音圖大全

内命ニ依テ、明治十一年七月、宮内省ニ奉ル、一枚
五十音圖の大全なるものにて、各音に意義を具へたるを始め、開合清濁、輕重出入、鼻音、齒音の
六種を分ちてしるせるなり。抑、音圖は人爲に成れるものならず、天神の人類に授けたる所の
聲音の位置を表したるものにて、其位置に天地の眞理を具へて、奇々怪々なるものなれば、
語の原義を究むるは、五十音義に據らざればあるべからず。實に本邦の皇統の不易なる、五
十音の傳來するは、萬國無比の美事といふべし。

音圖大全解

五卷

音圖の解を委曲に辨じ、併せて五十音は、固なり人類の音聲に、自然備りたる固有のものにて、
一説の如く悉曇より出たるものとする説の、僻が言なる由を證明爲たるなり。

音圖略説

一卷

音義本末考

一卷

此書、已に上木すと雖も、脱したること、誤れることなきにあらざれば、逐項改正したるなり、今
は上木の方をば廢したるなり。

語學總論

一卷

語學打聞

一卷

此書は、文部省御屬國選人コルシエルト氏の爲に譯したるを、譯にて門生の筆記したるなり、此
時和田維四郎通譯す。

語學問答

四卷

言靈妙用論

二卷

組音法

一卷

此書は、己が門人に成りし英國書記官、エルネスト、サトリ氏の囑に依りて作れるなり。
五言を聯れて一段となり、五段を重ねて一章となり、九章を合せて一行となり、九行を總て二

靈氣考

二卷

音圖指掌

一卷

音義綱領

一卷

千二百二十五音となる、本邦語の總數を包括する法を書けるなり。
此書は、己れ學習院に於て、音義を日講したる時、先づ大綱領を説む爲め、此書を本文に據て、講
じたるものなり。

音圖餘論

二卷

音圖餘話

一卷

神代のをつゝ

一卷

諸家の五十音説を擧げて、其可否を論じたるなり。
古語の本義を明らかに、古典を見る時は、遠き神代も、今現に比しきものとなる由を書けるな
り。

古言類韻

十二卷

難語本義考

三卷

類語索引

四卷

助辭音義考

内命ニ依リテ、明治十一年七月、宮内省ニ奉出シタル内ノ一部、二卷

五名考

助辭の意を、音義に據りて、其本源より説明したるなり。

言語變遷考

一卷

天神米歌數名の五名の音義を説けるなり。

言語變遷考

一卷

東京大學の應問書なり。明治十四年三月、甲の部に授課、學藝志林中に登載に付、文部省より該書七本、及金拾圓を賜ふ。

源語考 一卷

明治十六年二月、全所の應問として送附す。同志第七十卷に登載。

事物名義考 一卷

全志第七十一卷に登載。

言語正訛傳 一卷

全志第七十二卷に登載。

源語考以下送附に付、該志及、金拾五圓を賜ふ。

詞の運轉 一卷

一音の加り、或は省り、或は全音全韻に轉じて、其語意小さかつ、變りゆくことを、圖になして

百語の妙用を明せるなり。

いつらのこゑのうた 一卷

五十音経緯の意を、三百二十九句の長歌によみて、五十音の最も貴きものなることを、あらは

したるなり。

音義答問 一卷

ある人の許より、問におこせたる、音義のこと々もを答ふるとして、其人にかきておくりたるなり。

音義講録 三卷

全大意講録 一卷

此二部、講席の料なれば、圖外不出とす。

語格書

語格部

語格全圖 一卷

全解 一名日産要 内命ニ依テ、明治十一年七月、宮内省へ送由シタル内ノ一節、二卷

語學階梯 二卷

語學試驗概目 一卷

此書は、神宮育材課の囑に應じて書けるなり。

語法本義論 三卷

世の語學家の語法を解するもの、單に詞の解説をなして、何の詞は何の活用等いふに止まり

て、語法の然る原委に及ばざるは、本を捨て、末を取るの譯を見れず、故に今此書、語法の原委を

明にして、其然る由を詳明したるなり。

朝ねがみ 一卷

詠歌作文に名あるも、語格に熟せざれば、誤ある由を示さむとして、有名の人の歌文の誤を詳

じたるなり。

三集類辭 四卷

三代集の歌を、助辭に類して、漏さず類聚し、其助辭の活動を始め、名詞動詞を受る格、又下へ類

く例等、詳細に分ちて、助辭用法の證とす。

同類言 一卷

助辭分類 二卷

助辭に動辭二十種あるを分ちて、選歌を擧げたるなり。

ことばのりのうた 一卷

ことばの學の山口、ふみそむる人に示さむ爲め、三百十一句の長歌によめるなり。

日本文典辯誤 一卷

- 初學日本文典辯誤 一卷
- 日本辭典辯誤 一卷
- 雅俗文法辯誤 一卷
- 十符の菅廷文詞論 合一卷
- 伊勢の家づとの辯 合一卷
- 語學階梯異見答書 一卷
- 語學階梯異見答書 一卷
- 語學階梯異見答書 一卷
- 詞八衢補正 二卷
- 本書の誤れること、又足ざること、を補ひたるなり。
- 萬葉集類語 三卷
- 祝詞類語 合一卷
- 祝詞類語 合一卷
- 記歌類語 合一卷
- 日本小文典辯誤 一卷
- 此はチナムアレン氏が文部省の囑に依りて書けるものなるが、誤謬甚だ多ければ、それを辯じたるなり。

文法書

文法部

古文語脈考 五卷

我文章に法あることを、未だ先賢云へることなし。國、北畠守部が、撰格の著ありと雖も、單に對句、疊句等を擧るに止りて、段落、枝條等をはじめ、文法の要點に達せるもの夥からず。又、近時諸家、文法の著書ありといへども、未完全なるものにして、文章の模範とするに足らず。故に今、古文中に具備する所の法を悉く輯め、委しく其例格を示して、作文の規範とするなり。

文 範 一卷

文法教授の料に備ふるなり。

同自註 一卷

竹取物語語脈考 一卷

古文私選 二卷

古文中にて、殊に勝れたるものを探りて、古語古文を口習らばしめむ爲め、素讀本に備へたるなり。

伊勢物語章段 一卷

大祓詞文義考 一卷

出雲國造神賀詞文義考 一卷

古今集序文義考 一卷

祝詞異見 一卷

今人の作れる祝詞を見るに、祝詞の體裁を失ひ、或は文格に違ひたるが多かるを慨然して、其由を痛論したるなり。

香川景敏

總 叙

〔大日本人名辭書〕香川景敏は、敏恒の子なり、高崎正風に學び、歌に巧なり、宮内省御歌所に出仕す。明治二十年十月廿四日歿す。

〔柳の一葉〕十月廿六日、香川景敏のなくなりけるをいたみて、

伊東 龍 命

香川景敏

よをおほふ、かげともなれといはひつる、わかきのかつら、かれにけるかな。
數島の、みちのさかえの、見ゆる世に、をしき人をも、なくしつるかな。

矢野玄道

生 歿 二四八三、仁孝、文政六年、

二五四七、今上、明治二〇年、**目六五、**

住 所 生地 伊豫國喜多郡久米村字阿藏、**居** 京都、後東京紀尾井坂、**居** 伊豫國喜多郡久米村阿藏故宅前山、

姓 名 系 圖 藤 茂太郎、鹽谷蟬、天放山人、梅屋、子清、神臣、
○仙左衛門道正 玄道

學 統 (國學) 平田篤胤、
(漢學) 昌平學、**玄道**

總 叙

〔東洋學會雜誌二二〇〕 翁通稱は茂太郎、愛媛縣の人なり。夙に學問を好み、平田篤胤翁の門に入りて、國學を修め、後、昌平學校に入りて、漢學を古賢師に學ぶ。翁、家貧、學費乏ならず、久しく京都、**居** 堂の客となり、伴信友氏に接し、又、精神及び、社寺に就て、古書を講究し、大に得る所あり。嘗て、**居** 寺にありて、一切經の校合を了へたり。翁、博聞強記にして、一たび沙羅せし書は、決して忘るゝと
なかりきといふ。維新前後、玉松操、樹下茂樹等と國事を論じ、**居** 白書數通を上り、爲に近藤勇に論
國事を述白し
て述べらる

客を謝して著述に従事す

終身學ぶ

絶吟

著 書

へられしとあり、明治元年、神祇官に出仕し、同三年、大學中博士に任じ、從六位に叙し、後、宮内省へ召し出され、専ら御系譜編纂に従事し、十七年、國書寮御用掛御付、十九年、奉職となり、
國のため、君のみためと、おもふ身も、おき所なく、なりけるかな。
と一首の歌を詠じて、京を去りぬ。さて、郷里にかへりては、専ら母氏を看養し、其支圖に自ら編纂い、やの數字を著して、著述に従事せられたり。其著す所、神典、皇典、國史、神功皇后御傳記、**居** 應神天皇御傳記、藤王御傳記、しきのくがだち、しひがたり、玉手物語、大道のしるべ、天龍長江、**居** 妖異語、神仙傳、遠記、古文彙、正保野史等あり、又、麻生のした草、さくらふ等の國策あり。天龍長江、**居** いふ詩集あり。平田翁、後、古史傳の補正は、皆翁の筆に成れりといふ。翁、神樂、舞、**居** 藝として、**居** あり。常に云ふ、余性質蒲柳にして、酒を嗜む。若し女色を近ければ、**居** 病を果はすとあるべしと。終身妻を娶らず。其鳩堂居にありし時、主人勸めて婚をなさしむ。翁乃夜遁れ去れりといふ。翁、**居** 人となりの一斑を知るに足るべし。翁、**居** 明治二十年、春、病て歿す。時に年六十五。其遺稿の時、**居** 床の障子に、
富貴何足慕。貧賤何足悲。
我與天地生。春秋各代謝。
方寸容天地。包弘尙有餘。
おしひよる、千々のひとつも、もしは草、かきつくさる、とををしぞおもふ。
この春は、**居** 鷹にもにるか、ふるさとの、はなを見すて、**居** 常世にぞゆく。
と云へる數首の詩歌を書き付けられて、**居** 溘として逝けりといふ。翁、**居** 願死せし時、孔子妻予の嘆あり。蓋其道を共にする者なきを悲むなり。今翁の死する、願國と異なりと云へども、余輩は、**居** 道の爲め、斯る人を喪ふを、**居** 悲まざるを得ざるなり。
〔慶著〕 皇典翼 三 續日本私記 五 文德實錄私記 二
三代實錄私記 二 日本逸史私記 八 釋日本私記 三
神功皇后御傳記 二 護王神御傳記 一 應神天皇御傳記 一

矢野玄道

一五七七

同地通行の節は、何時も訪問し給ふとなるが、一日立寄りせらるべき暇なかりしかば、せめては何ぞ物贈りて過ぎんと思召しか共、生憎、道はさるべき品のなかりしかば、自ら酒しつゝあられし、わた子をぬぎて、それに

横濱の、浪の浪風、寒ければ、このわたこきて、埋火によれ。との一首を添へて遺されしと。後高崎正風氏、この一首を見て、其真摯なるに感じ、上人談話中、稽に見る所の傑作なりといへりしとぞ。

〔高崎正風大人講話筆記〕 行誠上人の歌の事 上人は、近來僧中の歌よみにて、よき歌多し。釋教百首などにも、まことの歌と思はるゝが少からず。上人の親友、僧辨玉、また歌を嗜む。横濱に住めり。ある時、上人の京都へ上らるゝ途次、辨玉を請ひ、綿子を壹領贈るとて、よまれたる歌、

横に吹く浪風いかに、寒からむ、この綿子きて、埋火によれ。此の歌を示されし時、己いはいはく、此の四五の句、真率にして、老友相憐む情愛、自ら溢れて感ずるに堪へたれど、初二句の「横に吹く浪風いかに」とは、いとことやうなり。爾こそは横濱ともいへ。そは爾はまづ、縦に降るが常なればなり。風は縦横定なく吹くものなるに、殊更に横に吹くといふといか

が。上人の心を推測するに、此は只横濱の紛擾の地なるをもて、その名を避けて、横に横へられたるたくみ事にはあらざるか。それかへりて、塵ならず。地名など推測ならずとて、何かあらむ。たぐりてことやうならむより、其まゝいはいはむ方然るべし。自然にそむきて横へ出る時は、そのことわりさへ、斯くたじろぐに至る。恐るべきとならずや。こゝと横濱の浪風いかに、寒からむ」とあらば、誰もきゝ、感ふふしなく、感情言外にあらはれ、めてたき歌なるべし。同じ上人の歌に、

埋火のたえたるをつぐ、炭はあれど、おこしがたしや、すたれたる道。此の歌などは、實に頌徳の歌といふべし。此の第四句、もとは「おこしがたきは」とありしを、聞くは、歌辭のやあらまほしとて、今の如く、己改めつ。これらの外、なほ

いたづらに、枕を照らす、ともし火も、思へば人の、あぶらなりけり。又江島にて、風波あらかりし時、舟中にて、

耳遠くて筆談をなす

法のため、身をすて小舟、同じくは、このあらいそに、朽ちれとぞ思ふ。など、皆かいなでの口つきにはあらじかし。

〔同上〕 (上略) 人情學に就きて一語あり。東京増上守の住職にて、福田行誠上人といへりしは、七十餘歳の老僧にて、耳遠くして、人と對話するに、石盤を備へおき、それに答を書めき。この人かつて、己が門人たらむとを乞はる。己例の如く新道において、師弟などいふ事のあるまじきよしをいひ、且、さきに申し、如きことを、二三語に及びしに、上人いふ。先生は佛道を修業せられたるか。己答へて云ふ。いな、和漢の書は、すこしばかり學びたれど、佛道は露しらす。若き時は、水戸風の學を好みたれば、いはゞ守屋大連の黨にして、經卷などは手にしたるとなしといひしに、上人、さるにても先生の説の、佛道の奥義に異なる事なき、不思議さよといふ。己答ふ。そはさもあらむか。釋迦は、一切衆生を濟度すといひ、孔子は、この民をすくふといふ。兩者ともに人情を本として、人を感化したるなれば、釋迦も孔子も、共に人情の大學者なり。歌即ち人情の學問なる故、爾者と少しも違ふ所ある答なし。上人何ぞ己の門に入ることを須ぬん。佛道即ち歌道なりといひしに、上人も大に悟られたりき。

著書

- 〔行誠上人全集〕
- 雪窓答問 一 いろ日の光 一
- 梅檀瑞像傳 二 大日本國佛法傳 一 法語筆話 一
- 縁山法語挾註 一 傳語 一 をみなへし 一
- 死牛渡 一 寒林集詩文集 一 釋教百首 一
- 於知葉集 一 後於知葉集 一

餘輝道人

生歿

目 二四七〇、光格、文化七年一、

總叙

目 二五四八、今上、明治二十一年一二、目七九、

〔榎三〕 道人、名は俊成、真宗の學師にして、越前國坂井郡春江村、願教寺に住す。家名は、學問道徳のたためにけおされて、知れる人少きが如し。おのれ、道人に親交して、年比きけることあれば、並に筆をとりて、かいしるすになん。

道人九歳の時、隣村なる儒醫が許へ、ものまなびに通ひけるが、道すがら、うららかなる野邊にて、雉の聲をききければ、げんく、となく聲きけば云々。とくちすまみで、さて歸りて、祖母に語りけるに、祖母いさゝか、歌の事を心得たりければ、大によろこびて、これより毎夜、百人一首を解きてきかせけり。

加茂季鷹を訪ふ

十七歳にして、京師に上り、加茂季鷹を、三條木屋町の居におとなひて、和歌のうら、きよき清に、船出して、いさひるは、や、球のかずく。

とよみて、贈りけるに、季鷹かへし、

打よする、老の年波、いとしく、その玉藻は、ひろひかれつ。

佐々木景欽の門に入る

其後、四條高倉に住める、佐々木景欽(かげよし)と云へる人の門に入りて、歌をまなぶこと数年、大にすゝみけり。生れば文化七年一月、歿りしは、明治二十一年十二月なり。享年七十九歳。家集を

〔同上〕 権の舎集

著書

伊東祐命

生歿

目 二四九四、仁孝、天保五年、

總叙

目 二五四九、今上、明治二二年一〇、目五六、

加藤千浜門

御歌所出仕

〔柳の一葉〕 およそ、世の中の人、才ながきものは、跡みじかく、美處に巧なれば、富貴に盡く、二十六なりき。はやくより、菫藩の事に力を盡されて、夙に才名あり、其後、世移りて、時いたらず、盛しく下僚にのみありて、なほられしは、いと口惜しき限りになん。されど、こゝにたれば、ぬは、かれにあまりあらせんとの、あめのなしならんかし。君、わかきより、歌に志ふかく、はじめ、なれと共に、郷戸久敬齋の門に入り、又、前田夏隆にしたがひ、つひに宮内省に召されて、御歌所勤務の首座となり、其名四方にかくれなし。高崎(正風)所長も、二なきものに思はれ、うちく、きさいの宮の、御歌會などにも、とにめされて、身もや、なり出て、ぬべきいさみにいたりて、ゆくりなく、病ひにかかりて、うせられしは、さらになげきても、あまりあり。君、はじめより、終りに至るまで、この道の爲に、心をつくして、おこたらず。又、人を教ふるに、れもごろにして、倦むとなし。やことなきは、夏にもいはず、遠近したがつて、教へを受くるもの、數を知らず。よみ歌も、いとおほかれど、みづから、書をおかれしは、いとわづかのものにして、あかずおほゆるに、こたひ、門人達のいひ合せて、その外のうちより、も、えりそへ、一巻となし、櫻木にえりて、世に公にするとは、なりぬ。いて、や、おのちの、しのびがたみは、さるものにて、世に歌よまん人のためにも、こよなきしをりにこそ。君の歌における、近世風指の上手なりしこと、は、昔ひとの知れる處なれば、更にいはず。おのれ、幼きより、のちなみに、このおくに、一言を添へよと、人々のせらに、いはるしに、いなびがたくて、よしなしこ

雜載

柳の一葉緒言

とを書いたつくるものは君が竹馬の友だちにて、君よりまきにうまれし、一年はやく、君におく
る、今年、七年になりぬる、えせ翁なり。かよるなる、かじくのほかに、なに一つ身にそふ光もな
く、ながらへて、うめきありくを、なきたまも、いかにをこなりと、わらひたまふらんかし。

〔同上〕

おほよそ、初學びのともがらを、教へみちびきて、よき歌とませむとするには、其の教ふ
る人、先づみづから、上手ならざるべからず。世にかれがしは、みづからよむ歌こそよからぬ。ひと
のなほし、つくろふとは、上手なりとて、從ひ學ぶ輩のあるは、心得がたし。さりながら、同じ上手
の中にて、とりわきて、人を導くものすぐれたると、さしもあらぬとのたがひは、おのづから有
るとなりけり。柳園のあるじは、自らもよくよみ、又人を導くわざにも、たけたりき。さるは、うまれ
つき、極めてこの道を好み、れてもさめても、忘るゝと、なかりしかば、いはゆる、すきこそものゝ
かいふ筋にて、しか上手にはなられしなり。又、教へ子らのほ、更にいはず、さらぬ人の誅出たる
も、いみじと愛ゆるがある時は、おのれの誅み得し如く、打喜び、ほめたまへておかせ。又、思ひきふ
し、見出してし時は、さま／＼思ひめぐらして、これをなほしつくるは、るゝによりて、教子等も、皆其
れもころなるに、感じたりき。あはれ、この翁をして、今日まで長らへしめなば、自らの歌は、更なり。
教子等の中にも、勝れたるが、數、さばに出できたらましを、惜きかな。いにし明治二十二年の秋、ま
だ六十にもたらぬ齡にて、身まかられたり。まことに、この道の不幸にこそ。其後、追悼の會など、所
所にて催されしも、またその遺稿の世にあらはれぬを、誰も／＼あかぬとに思ひ居りしに、こた
び、世繼のぬし、教子らとはかりて、あつめ撰び、すり巻にせんとして、おのれに序をこへり。おのれ
さきに、翁を御歌所に推薦せしちなみもあり、かつは、親に師につくさるゝ人々の、まめこゝろを
めて、得もいなく、思ひよれるまゝを、いさゝかしてしつげぬ。あまがほのやの正風

柳の一葉叙文

〔柳の一葉〕 伊東祐命ぬしの、加藤千涯の門にあそびしころ、己もかの閑立ちならしつゝ、あ
りければ、したしうかたらひ、二なき言の葉の友と、むつびかほしたりき。ぬし、世にありしとき、い
ひけらく、わがなき後には、年比、よみおける歌ども、家集めくものにして、といはれしを、花より

歌詠

〔柳の一葉〕

身はなりの出てける頃
浮ぶ瀬も、有りけるものを、涙川、しづむみくづと、思ひけるかな。

うれしさを、つゝむ袂に、おくつゆは、まみこぼれたる、なみだなりけり。

〔編者補〕 柳の一葉 二

澁谷國安

生 歿 二四八五、仁孝、文政八年、

學 統 二五四九、今上、明治二二年、 國六五、

八田知紀 國安

香川景樹 國安

〔補三〕 澁谷國安は、薩藩の士にて、富家の閑えありけるが、いつの頃よりにか、家康漸く衰へし

かども、なほ、西京に上りて、大蓋ヶ原の開拓など金でけるが、是れも敗れしかば、遂に心地狂ひて段りぬ。忍草第五編の草稿、其他知紀、國安の遺稿ども、あまた今大阪西區南關江通り六丁目、通谷國秋が許に残れり。國秋は國安の甥なり。

長谷川保樹

生 歿

生 二四六九、光 格、文化六年、

歿 二五五〇、今 上、明治二三年一、九、 国八二、

周防國岩國、

二條家——保樹

後、縣居、桂園を折衷して、一家をなせり。

樂しきは、まこそとおもへ、後の世も、花と紅葉の、山かげにして。

(以上、忍草、上)

渡邊重春

生 歿

生 二四九一、仁 孝、天保二年三、一〇、

歿 二五五〇、今 上、明治二三年五、九、 国六〇、

總 叙

渡邊重春は、重名の孫、重隆の長子なり。母は竹田津重任の女、加藤、天保二年辛卯三月十日生る。幼名竹之丞、幼時、中津藩の藩士手島某に就きて、漢學を修む。十八歳の時より、豐前京師津波村、定村直孝(重名の教子)に従ひて、國學を修め、通曉最力む。直孝、其才學を愛し、教導する事、極めて懇篤なりき。家業を櫻園と預せられき。また、自ら磨めける名をつけて、鉄英書屋と云ひき。後大に儒とこゝろあり、廣く大家に交らひ、學の淵奥を極めてひとて、あながちに父に請ひて、嘉永三年四月、漢學に起き、萩原廣道、櫻東雄、松浦道輔などの人々に逢ひ、京に上りて野々口隆正にも逢ひて、皇國學のすべをも問ひき。それより伊勢國山田の里なる、足代弘訓の門に遊ぶ。

足代弘訓より
の書信

この時、足代より重春の父重隆への來書に、
御子息上野介殿(重春を云ふ)遠方御來臨、留學の儀御頼、御存持の御儀に御座候。五福學問御出精に御座候。唯今の通、御勉強御座候は、末々は蛇度、其教相見え申すべく候。御者儀、男女の子供を三人失ひ、はかなく存じ候ほどなれば、遺學の御方を、我が子の如く存じ申候。それ故、御子息へも、何事も少しも御遠慮なく、御家内同然になされ候やう、家内の者へもさやう申付候。御者儀、三十頃は、大天狗に御座候。四十頃より、江戸へ参り、柳菴の御學風を、ほゞ承り、なほ芝山老侯を始め、諸大家に交らひ、五十に至り、又京都へ参り、續延の御學風をも、ほゞ承り、其後は、大に先非なくやみ、少しも天狗氣無之、知らざる事は、誰れにも相學び、今年は六十八に相成候へども、白髮の出生の心持に御座候。御一笑下さるべく候。

健亭翁より傳へ申候、鈴屋大人の口授口傳の儀は、世に絶え候事、まことに敬惜致候。何とぞ御子息へ、殘らず御傳申度候。云々。
されど、弘訓の學、專、考証類聚を務む。而して重春のむねとせる所は、古典を究め、皇國の大道を明らかにむるに在り。其説合は、筋あり。ほどなく同じ風なる御風清直の許に行き、極ひ學ぶ。また重春の期する所に協はず。後故ありて郷に歸り、平田篤胤の書を讀むに及びて、大に感ずるところあり。わが道とすへきは、技に在りて、其息、猿胤に請ひて、後後の門弟となる。其學統を重ずること、斯の如く、遂に伊吹屋門の巨擘となれり。

長谷川保樹 渡邊重春

一五八七

平田門に入る

皇國の道を明
にせんとす

古典の研究
其歌詠

著書

とられ、同四年十二月、皇學教授を命ぜらる。學生奮然として集り、藩中敬神尊王の氣、旺に興りき。六年、廣田神社大宮司に任ぜられ、同七年、龍田神社大宮司に轉じ、正七位に叙す。十三年九月、丹生川上神社宮司に任ぜられ、十六年十二月、大島神社宮司に任ぜらる。明治貳拾三年五月九日卒す。享年六十。堺市南區龍田南宗寺に葬る。

重春、性剛毅にして、蘊直徳望高し。古典の研究は、其學生の事業とせしところにして、其著、古典傳拾遺の如き、師範の説を發揚せるものなり。而してまた、一方歌學に於ては、めざましき天才を現せりき。其作、雄渾にして、流麗ならざるは無し。ことに其長歌に至りては、實に近代に於ける魁首とす。其結構雄大、格調高古、詞理に獨歩せりき。重春、又漢學に通じ、其漢詩、また高麗調すべし。別に辭世の歌とてはなけれど、蘊骨傑詞の中に、

瓶にさせる櫻の散るを見て
惜しまれて、今年も散りぬ、世の中に、羨しきは、儂なりけり。

この詠、やがて蘊を爲しぬ。

- 豊前志
- 神異紀聞
- 名二負杜
- 和歌浦日記
- 櫻園集
- 櫻園祝詞集

松岡明義

- 古史傳拾遺
 - 秋義診解
 - 打盤論
 - 龍田考辨
 - 櫻園長歌集
 - 櫻園詩集
 - 古史傳目錄
 - 休暇漫筆
 - 東京日記
 - 參考字佐宮錄記
 - 櫻園文集
- (以上、全篇、津波重兄氏、寄)

生歿

系圖

總叙

生 二四八六、仁孝、文政九年、
歿 二五五〇、今上、明治二三年六、二二、
〇辰方、行義——明義、
目六五、

(以上、國文學、二三)

〔國文學〕 松岡明義君逝く。二十三年六月、與禮故實を以て聞えたる同君には、去る廿二日、然逝去せられたり。同家は祖父傳來の故實家にして、代々幕府に任へ、時に武家故實に至りては、この家の特有物ともいふべき程にて、他に比すべき家もあらざりしなり。君は其業をつぎ、大學に、女子師範學校に、皇典講究所に、教授となりて、學生を薰陶せられしは、世間皆よく知るところならん。君は文化九年に生れ、明治三年、神祇權大夫に任ぜられ、其後、式部寮正院、文部省を経て、同十三年、女子師範學校教授に任ぜられ、十五年、東京大學御用掛となり、幕ら故典科の學生を教授せられ、次ぎて、皇典講究所の教授となり、これはた専ら、學生に家學を教授せられたり。さて先月來、すこしく病に掛られたる趣は、及びたれど、今日その訃音に接したりしは、實に意外の事にて、我學問のため、歎くべきことなり。君は本年六十五、墓は日蓮の臨天寺なり。

生川正香

生歿

總叙

生 二四六四、光格、文化元年一、二、
歿 二五五〇、今上、明治二三年八、七、
目八七、

〔言語學雜誌〕 大人は、三重縣下伊勢の國津市大字岩田町の人也。文化元年十二月に生る。幼名は茂五郎、後熊五郎と改め、十七歳に元服して三郎助といふ。正香は老後の名也。生川、清人の二男たり。(兄は四郎にして夭死せり。大人廿一歳にして妻を娶り、妻十八歳にて嫁せり)廿七歳に

松岡明義 生川正香

其師

蘭學研究

八箇とものひ
いき

普通文

して男を生み、武助と名く。大人廿九歳より家事を幹し、四十二歳にして父を喪ひ、父は七十六歳にして歿し、母は六十歳にして歿せり。五十一歳にして妻死す。妻四十八歳にして死せり。その後再び娶らす。五十二にして隠居し、武助をして世を繼がしむ。武助明治二十年の夏、五十七歳にして先ちて歿す。次男あれども幼年にして死し、一女あれども他に嫁せり。すべて生子は五人なれど、三人は夭逝せり。大人行年八十七歳にして、明治二十三年八月七日歿せり。

大人初め徳川春櫻(伊勢津、伊豫町の)人にて、通稱は材木屋喜右衛門とよべり。の門に入りて、俳諧を學び、次で繪を學び、樋口喜樹(伊勢松坂の)豪商長井氏の門頭にして、長く江戸に詰り、南東の暇に眞淵派の和歌を學びたり。通稱久平、津岩田町に居る。に就き和歌を學び、後足代弘嗣の門に入り、詞の學を修め、和歌をも學べり。大人少くして手細工に巧みなり。左手を以て彫刻するなど、其修の職工も及ばざる處なり。安政六年の頃、大人蘭學を研習し、丸五年間餘もつゞけられけり。又文久二年の頃(美濃國、久也治作といふ寫真師の)門人にて、伊勢松坂の人、小島新藏といふものをかへて、寫真術をも習へり。されども學生の全力を注ぎしわざは、圖書の研究上、語録の著作なりとす。

大人著せる「八箇とものひいき」は、全部百卷、丁数を平均するに毎卷百枚に下らず。その大著述たる事知るべし。此は木居氏の八箇なる詞をあげ、一々歌歌數百を引き、新には文章より引けるもあり。八箇の詞の外に、例證あるものは、増補せる所もあり。たゞに八箇なる作用詞のみならず、八箇にあげざる形状言をも、多く類集し、且例證を引きて、之を示せり。この著述は我皇國の詞の道にいみじきいきなるといはんか。

大人博洽通達にして古文にのみ泥まず、つれに人に語りていへらく、今體普通文の文は、漢文調なりといへど、皇國の語法に則りて、之を述ぶる時は、猶皇國の文章なり。何ぞ今古を論じ、古風のみを賞しとせむや。唯語格てには、などを正しく書き、皇國の語法に背くことなきを要するのみといへり。

大人今體普通文の文に就きて、言ふ勿れ信ずるの教法など、速讀言に「コト」の字を映き、用言の下「ノ」の字を置くことなど、いたく之を禁じ、「以テ」爲ニといふ詞を以て、句を書き起す事などをば、

性行

隱居

かたく戒められたり。大人の著述中に、開化文章論といふ一冊は、此事の爲に著はされたる也。

大人生涯に人と交際する事を好まず。又名譽利達の念、毫頭も心に存せず。こゝを以て著作に絶事を發兌する事を勤め、或は權勢の人に交る事を勤むるも予らば及びなしとて、更に喜ばしき顔色なし。かくばかり無愁なれば、生前にて、世間に名を知らるゝこと、いと少なかりき。

大人八十七歳まで、餘をたもちたれど、少年の頃までは、甚虚弱なりけり。二十一歳の時、妻を喪りたるに、家嚴その虚弱にして、疾を生ぜんことを憂ひ、暫く江戸へ遊學せしむ。大人もとより小親を好むゆゑ、山東京傳、柳亭種彦などを訪ひ、江戸にて半年程すごせりけるに、遂に病を得て歸國せり。

大人少年の頃より、繪を畫くことを好み、土佐狩野などの猫風を慕ひ、繪巻物を多くあつめたり。(俳諧并畫には春明と號し、又黃中とも稱せり)

大人の家は、奉公人を多く召使へる寶藥店なれど、大人は少年の頃より、商法の道を好まず、少く暇あれば書をよみて樂みとなす。時々店頭にて、藥種をきざむ時とて、意見を陳せし事なし。老年の後に至りても、讀書の爲に、著述の爲に、甚だ光陰を惜めり。

幼児の死する時とて、(大人の次男、熊五郎、八歳にて死せり)枕頭に侍して、書見を願する事なし。老後に及びて、家督に先だたるゝ事の不幸に逢へるも、(大人八十四歳の頃、家督の武助五十七歳にて死せり)涙を落すとなし。常にものゝ理をさとり、喜怒哀樂、色に見はるゝ事稀なりき。大人の家は、もと町内にて、富豪の部なるゆゑ、老後は不如意なれども、町内の世話掛年行事などを讀書として、勤めさせらるゝ事多し。大人甚だ之を厭ひ、五十二歳の頃、遂に剃髮して、己れ隱居して十八なる息子に戸主を譲れり。

大人他人に金を貸すことを好まず、強ひて請ふものあるも之を許して、存島には貸すことを爲さず。親戚懇意の者たりとも皆然り。もし又已むことを得ずして、貸すことあれば、もはや、その金をば、我が物と思はず、その具數だけ金が減りたりとす。又期を過ぎて還さぬ者あるときは、直に

紙面を塗抹して、己が所有より除却して、念頭にかげず。その清虚澹泊なること此の如し。

- 著書
- 〔同上〕 八衢柄の響 一〇〇 言葉の二道、ゆるの辨 三 二葉草、金行の四段
 - 八集類言、未定稿也 一〇餘 日本小學文典辨惑、大書 一 開化文章論、大書 一
 - 皇國語學自在上木 二 小倉の山路後の菜 一 日本文典和蘭活字考 一
 - 近世女風俗考 一 俳人大系圖上木 一 祖翁發句係辭一覽上木 一
 - 校正宇治拾遺物語 一五 校正保元平治物語 二

日下田足穂

- 生歿 二四七四、光格、文化十一年八、五、
 因 二五五〇、今上、明治二三年一二、六、 因七七、
 〔續日本歌學全書〕 日下田足穂、通稱を延平といふ。朝倉茂右衛門の五男にて、上野繪林に生る。幼きより足利町なる小佐野清七に養育せられしに、清七(雅號を雲と云)歌を好みしかば、つきて學び、また商用にて、江戸に出る毎に、備守部の門を叩ひて、其教を受けぬ。のち笠野町道藏氏の養子となる。
 〔同上〕 稻舍長歌集 二

落合直澄

- 生歿 二五〇〇、仁孝、天保十一年、
 因 二五五一、今上、明治二四年一、六、 因五二、
 〔生地〕 武藏國多摩郡駒木野村園小石川雜司、谷、
 〔通稱〕 一平、鹽植舍、
 御巫清直、
 富樫廣陰、
 直澄

(以上、國學三遷史)

〔國學三遷史〕 直澄、元より忠君愛國の思想に富み、當時、武家の威權甚盛にして、皇家の式禮なるを慷慨して止まざしりが、明治元年、征東の役起るに際し、官軍の參謀なる川田益久國に從ひ、下野の野に戦ひて戦功あり。平定の後、貧窮を受く。全二年、神祇官宣教權少博士に任ぜられ、又豐受宮禰宜、度津神社宮司、出雲大社少宮司等を経て、大教正に至る。東西の京及び、宇都宮なる神宮教の本部長として、布教に心を砕き、且その暇には、古書を考究して、數多の著述を成せり。全廿二年、皇典講究所の講師となる。

- 著書
- 〔同上〕 太古紀年考 古事記後傳
 - 開闢本紀考 語格大成圖
 - 詞考安說辨 古事記講錄
 - 帝國紀年私案駁論評 知道要言
 - 上古物語 教義要典
 - 汚穢起元考 新三大考
 - 古事記別傳
 - 語格大成圖附錄
 - 帝國紀年私案
 - 古事考證
 - 儒教正見
 - 忠義謹國篇

日下田足穂 落合直澄

- 究理根原 音義研究篇
- 後說辨三元生成圖 訓點問答
- 上古紀年 八書比較
- 假名起元考 上古年代問答
- 武烈天皇聖德考 日本神字考辨妄
- 論語千字文貢進時代考 語學系統問答
- 言語成立轉語規則 要語考證
- 開闢古說辨三大考
- 太古史年曆考
- 古代文字考
- 辨古今集講義
- 日本神字文考
- 詞考筆錄

間宮八十子

生歿 總叙 著書

生 二四八三、仁孝、文政六年、
 歿 二五五一、今上、明治二四年二、一九、（忌辰下） 國六九、
〔慶著〕松のしづえ 二 和歌玉石集

萩原正平

生歿 住所 系圖 經歷

生 二四九八、仁孝、天保九年一二、一一、
 歿 二五五一、今上、明治二四年六、七、（忌辰下） 國五四、
 伊豆國田方郡川西村小坂、
 ○義利——正平——正夫

廣夫石井氏

大人勳王の志願篤く、慶應三年、先帝崩御ましますや、恰も家宅新築の大工事を起し、工將に争な
 らんとす。然るに此計報に接するや、時暮末に當り、尊王の義士、陸續東西に起り、天下亂靡の秋な
 れば、回天の偉業、頓挫を來さんとを恐れ、悲憤慷慨の情、禁する能はず、其工事を止め、材木は積て
 空く、折腐するに至り、終身家宅の工事を果さずして逝く。
 明治四年、足柄縣知事の委託により、伊豆國式内神社調査に従事するや、四月より十二月に至る
 間、伊豆全國、及附屬の七島を巡檢して、探究すると、極て精密にして、千坂埋没の古刹を發見する
 者少からず。尋て五年三月、伊豆國式内神社考證六卷を編纂して上進す。
 大人、子弟を薰陶する事に務め、汲々として倦まず。病を通じ門に入る者、數百人の多きに達す。又
 明治九年、静岡紺屋町に皇學舎を設け、尋て道乎町に皇學所を起し、多くの學生を集めて、皇國學
 を教授する。數年なりき。明治拾七八年中、承久殉難五種の遺骸を尋れて、官祭の典に預らんとす。
 建議する事數回に及びしも、生前其懇命に接するを得ざりき。
 大人、深く近年人情の輕浮に流るゝを慨き、大に地方團結、道徳養成の必用を感じ、明治十九年、廣
 土講社なる者を設け、許可を経て諸村を巡遊し、有志に談じ、里人に説き、遂に伊豆全國及び東駿
 の各地、其の講社の設けあらざるはなきに至る。
 萩原正平氏は、伊豆國田方郡川西村小坂の人にして、天保九年十二月十一日に生れたり。幼なき
 時より書よむことを好み、おこなはざらず。平田篤胤大人、身まかりし後の教子となりて、學の道を
 いそしみつゝ、家の内外をいはずして、唯書をのみ讀みて在りしかば、父、義利前も、其の身に病も

間宮八十子 萩原正平

産土降社

資性

や出こむと思ひあやぶみて、疎められたる事さへ在りきとぞ。家の名うけつぎては、名主といふを勤めてありしも、深く思ひ量る山ありて、家の事は家人に任せおきて、みづからは武藏にいて、権田直助翁の門に入りたち、いよゝ皇國學の道に勞けりき。明治二年官のゆるしを得て、家の祭を神道の式に改む。伊豆田にて神道の葬儀を行ふは、是を初めとす。かくて神祇官宣教師、三輪神社少宮司、足柄縣學校吟味係、静岡縣地誌編纂係、伊豆山神社神官、縣會議員など、年まねくいそしみ勞きつゝありけるも、去し十八年の頃より、家の業を眞子正夫ぬしに譲りて、もはら貴大社教の教へを弘め、また世の人の心を固めて、其むかふ所を知らしむるが、今より後の國の爲には必勤むべきことなるよしを思ひはかりて、産土降社といふものなまだめむと、かなたこなたに在りて、一年のうちも家に在るは稀なりき。教導職は権大教正まで進み、静岡縣大社教分院長ともなりて、勞きたりけるに、去年のくれ病發りて、遂に今年六月七日に、五十四と算ふる齡を一世として失せけるは、國の爲にも、道の爲にも、まことに口をしき事になむありける。大社教管長も、年來の勞きをめで、大教正の職を贈り、祭事をもあつく勤けしめき。あはれ主が年ごろ、學びの業に意を盡し、ことは大かたにあらずして、著せる書もいとさはなる中に、明治四年、山縣知事より伊豆國なる式社をたゞしきだむべき事とさしを授たるをりは、かの國内のかぎり、島々迄も巡りゆきわたりて、一とせばかりの間に、伊豆國式社考證六巻を記し、導へて出しき。又近き年となりては、秋山草といひし人のしるしおける豆州志稿といふものなほ、精しく考へ訂し物せむとせしも、ことをへずしてなればにして失せぬるは、いと口惜といふべし。そも、其性は、直く清く、理にしてよく人に交りて懇切なりしはいふも更なり。神を敬ひ國を思ひ、皇朝廷を尊び奉る眞心の深かりしこと、世にたぐひまれなりき。故、道尾眞心撰著書命とも稱るを、猶のちの世にも示しのことさむとて、服部忠雄ぬし著、おなじことゝるの人々相はかりて、是のいしおみたることゝなりけるは、おのれもよろこばしくおもふがゆゑに、ひとくくの老へるをいなまず、新しく記せるなり。

明治二十四年十月

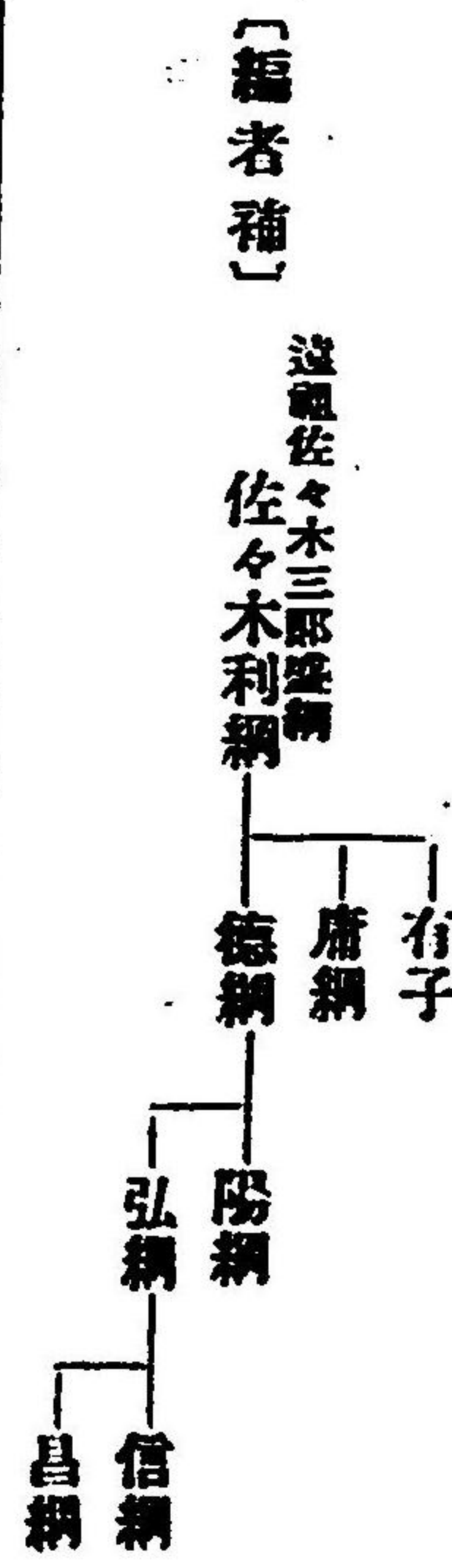
出雲國道從三位男爵 千家重國 撰
大社教副管長大教正 木居豐源 撰

著書	著者
古史言行頌	二
伊豆三島神社考證	一
承久殉難五卿事蹟考	一
神社雜考	一
矢筈ノ山蹟	一
産土歌百首	一
大社教權大教正七位 秋山光徳 著	
伊豆國式社考證	六
伊豆國式社考略	一
火車須比命神社考證	一
増訂豆州志稿	一
山櫻戸歌集	未定
三島大社傳記	一
歸精雜錄	未定稿
盤長姫命神社考證	一
七島日記	一
婚禮式	一

佐々木弘綱

生 二四八八、仁 孝、文政一一年七、一六、
 卒 二五五一、今 上、明治二四年六、二五、 目六四、
 生地 伊勢國鈴鹿郡石薬師驛、
 通稱 習之助、
 時綱、後弘綱、
 竹柏園、
 伊勢、東京、
 下谷區谷中天王寺墓地五重塔邊、

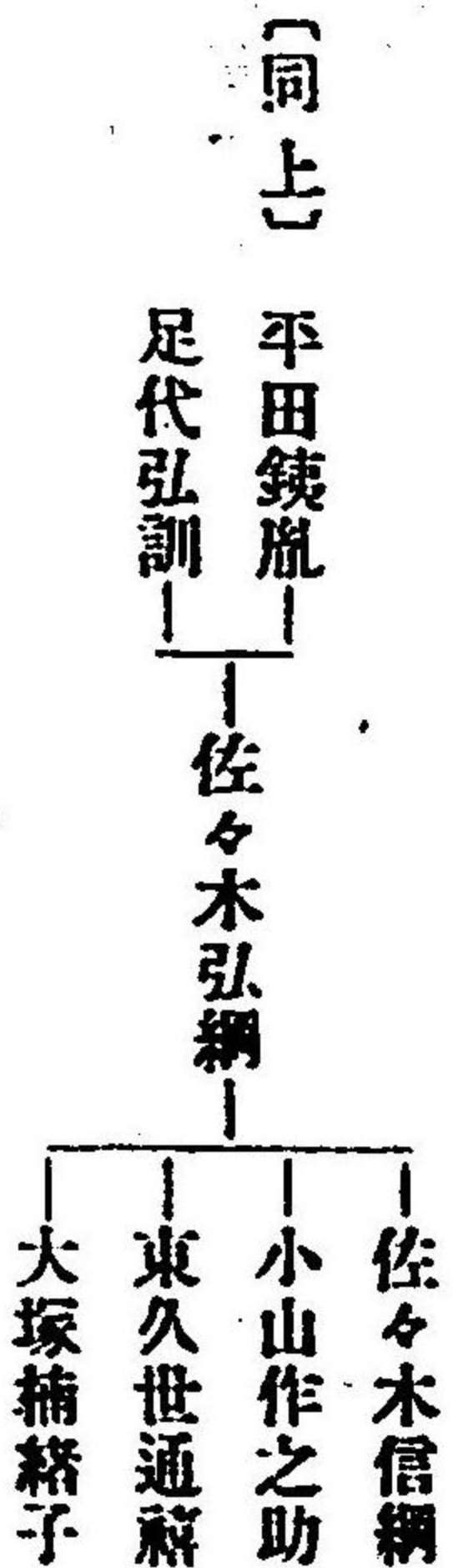
系圖



佐々木弘綱

一五九七

學統



門人

教子は其數いと多し、今、學友録によりて、いさゝか披出さむに、

伊勢石薬師	坂倉有周	同 射和	竹川政恕	近江信樂	多羅尾純門	伊勢小松	中山寺武雄
伊勢龜山	近藤幸殖	同 坂部	館 通因	同 津	藤京高敏	同	神 晴悦
肥後阿蘇	阿蘇惟教	伊勢龜山	橋 幸子	飛騨古川	渡邊幸信	三河四尾	相澤 忠
三河四尾	辻多豆子	同 矢矧	川喜田近直	伊勢玉城	松田久秋	同 松葉	堀内平清
同	大森小野	同 庄野	美濃部貞英	越前大野	布川正沖	武藏曾山	横岸武豊
羽後大館	館 忠資	隨興弘前	大道寺繁頼	伊勢稻木	池部宗民	越前福井	三崎玉雲
東京	西 升子	越前福井	藤井千熊	飛騨三福	早川萬綱	伊勢關	村上清其
同 神森	高田顯允	伊豫松山	内山直枝	信濃野澤	並木信明	信濃諏訪	小松 恒
東京	高木富子	武藏相上	須長 球	東京	橋 米重子	同	島田家子
同	東久世通禎	伊勢松坂	原田嘉朝	東京	竹原雅子	同	小山作之助
同	富田愛子	同	大塚楠緒子	信濃春近	北澤道雄	伊豫松山	四國廣徳

父弘綱、幼名、習之輔、時綱とよびしを、後、師足代翁より名の一字を譲られて、弘綱とよぶ。文政十一年七月十六日、伊勢國鈴鹿郡藥師縣に生る。伊勢の國は、國學者の輩出せし國なれど、多くは南勢より出て、北勢には少なし。唯石薬師縣は、養生山寮とて、三國地誌、伊勢賦等數十卷の書を著し、伊勢伊賀志原三國の地理に精通せし人の生れし地なりき。

遠祖は佐々木三郎盛綱にて、代々備前の國兒島、又上野の國鹽部を領しけるに、南北朝のころ、所

總叙

家系

初めて學に就く

母の訓誨

十七歳千首

所の戦にしろ所たえくになりにしを、近江なる本家六角氏まねきよせて、蒲生郡御所内の城に移されき。さて數代武名をおとさしりしに、永隆十一年、本家義賢、信長公に攻められし時、中並定信、觀音寺の城の搦手の大将なりしに、遂に打取しかば、子定政は信長公の臣となりぬ。天正八年、公の命にて北勢の殘黨を討し時、病を得て療養の爲に陣營の地なる三重郡小杉村を給はりて、全村の郷士となりぬ。かくて數代を経しに、父の祖父利綱(渡邊住)江戸に上りて醫術を學び、又儒學を好みて、京に上り伊藤東所先生の門に入り、伏見宮殿上人菅原登長朝臣の門客となり、學生を教授す。登長朝臣、其才を重んじて、伏見宮の文學に勤めむとす。辭して仕へず、郷に歸りぬ。寶曆十二年、石薬師縣の門人、切に移郷をといひければ、移り住み、醫に習ふをかねてなりはひとせらる。父を徳綱といふ。筆道を好み、京に出て書博士岡本保孝を師とし、學び、又弓術をよくし、火術に長ず。母を鳩子といふ。日本武尊を祭れる武備の神官山上筑前守等安の女なり。徳綱の兄廣綱、書を能くし、名古屋に移り住む。壽命を蒙り、苗字帯刀、儒者齊家兼帯を許さる。徳綱の嫡子、京に上りて香川景柄に學び、歌の名世にきこえたり。寛政十年、彦根侯に擢かれ、大奥の御通となりぬ。兄あり、陽綱といふ。醫を業とせしが、世を早くしたり。

天保四年、六歳にてはじめて、習字及大學の素讀を、父徳綱に習ひ初めしに、同じく五年七歳の夏、父疫病にてみまかりしかば、母の手一つにて成長せり。當時母の歌に、

夏の夜の、短かき夜半も、子の爲に、こがひ糸とり、いとまなの身や。

母常に、我家は世々人に物教へ來つれば、女親の手に育ちて物知らぬよと、人となりてのち、世の人にな侮られそと、諭されたりといふ。十二歳、始めて京に上り、しばし滞在す。天保十二年、十四歳の正月、名古屋にもものし、叔父廣綱の許にありけるに、歌會あり。役送をつとめて、親類など持参ひけるに、叔父の、汝もよみて、さといはれけるに、始めてよみける歌、夏は初開雪。

梅の花、にほひをかいて、鶯の、いま一聲の、はつ音鳴いたり。

點者梶原昭豊、二句を、香をしたひ來て、結句を「初音鳴けり」となほされたり。其後、從弟包綱に誦はれ、こゝかしこの會に出て、は、歌を誦じ梶原氏の添削を乞ひぬ。十七歳のきより春に、かけて、千首の歌をよみて、十七歳千首といふ。又この頃、古き物語書をよみて、わきまき詞をぬきいて

佐々木弘綱

足代弘訓の門に入る

それに解釋を加へて、雅言俗解といふ一巻を著はしぬ。後補正して雅言小解と名づけ出版せり。又庄野村地蔵院専順法師を友として、詞の入道を學びぬ。爾ふかく究めむと思ふに、近きありには、新道にきこえたる人なれば、獨よみいで、詞ひもときつゝ、月日を送りしに、或人山田なる足代弘訓翁は、皇國の學にいみじきすぐれ人におはすと、そのかしければ、二十歳の秋、名譽を捧げ、やがて翁の許に留學す。當時母鳩子は、足袋をつくり、綿をつむぎ、大豆小豆などの穀をおくりて、月謝に代へたりといふ。又香あがなふも、餘財乏しければ、詞の玉の緒をばじめ、手寫せし書少からず。

寛居塾を辭す

足代翁の寛居塾には、いつも數十人の塾生あり。又翁は客を好み愛して、神宮寺にて、學者同人の來るあれば、永く滞在せしめられたりといふ。翁の人に著へたる書蹟に、今年六十八に相成候へども、唯今にては、白髮の老書生にて、是迄不覺悟の業を、黄泉の土産に覚え置き申度少年の衆を學友に致し、かつ學びかつ教へ申候。御一笑被下べく候とある如く、數多の書生と打交りて、常に著書に、編纂に力められたり。隨て其塾に入り、教を受し人の數夥しく、御風清直、見至左太夫、橋村淳風、生川春明など、世に名きこえたる人多し。父が在塾の頃、最親しかりし同塾生は、能甲芳介なり。後近藤芳樹に養はれて、近藤の姓をおかせり。同じ机に書をよみ、一つふしどに書を共にせしこと、蘭化集の芳介氏の序に見ゆ。

再入塾す

在學四年の夏、母の「年老いたり、いかて歸り來れ」と切にいはるゝに、足代翁も、先一とほりは學び終へつればと許し給ひけるによりて、石藥師に歸れり。然るに歸する人ありて、某家に養子にゆけと勤めらる。父は當時、今少し學びたければといひつれど、母刀白の詞歌止しがたくて、其詞にしたがひぬ。されど父は世事に疎きのみならず、夜間いたるまで書を讀むに、心算からぬ。父は、夜更るまで燈火をつくるは無益なりなど、唯しくいはるゝに、遂にえ堪へず其家を出て、又足代翁の許へゆき通ひ、何くれの事を學びけるに、終に師の、われ老いたり、代りとして教へにゆくべしと、こゝかしこに、やり給ふやうになりたり。それが中に、尾張知多郡内海にゆきて、暫し滞

江戸に出づ

在せしことあり。其時得來りし品を山田に歸り、翁にさしげしに、翁は汝が教へ來て得しなればとて、取り給はず。父は否翁の御名代にゆきしなればとかへさしいふ。終に父、さらば御願あり、翁この頃、細字をかき給はれど、いかて我が爲に、楠公の長歌を編にしるさせ給ひてといひて、染筆を得し懸物、今もなほ家に藏せり。

千船集を撰す

安政三年の冬、足代翁みまかり給ひしかば、山田にいたりておもひに歸りぬ。さて翌三十歳の秋、東海道を下り、石川依平をはじめ、沿道の名家を訪ひて江戸に出て、井上文雄翁の許に寄附して、歌を學び、また代積古に川越をはじめ、諸所にゆけり。且、墨川春村、岡宮永好等と交遊やかなり。然るに母のいつしかと待ちおはすと聞きて、翌年の春、國に歸らむとす。支離翁、翁身に與ふべきものなし。わが日頃の歌文に於ける考を、しるして贈とせむと。斯くて翁の著、伊勢の家書成れり。其後京に上りて、河本延之、渡忠秋を友とし、大坂に到りて、萩原廣道、中島廣足と相かたらへり。廣足翁曰く、さきにわれ和歌の撰集をあとらへられて未果さず、御身代りてなしてむやと。その言のまゝに千船集を撰びて上梓しつ。大坂の地、千船の出入るをもて、廣足の名づけしなりといふ。さて石藥師に家居を占めて、妻須磨子を娶りぬ。石藥師は代官多羅尾氏のしる所、多羅尾氏は徳川氏に由緒ある家にて、並山の江川氏などと共に、三代官と稱せられし家なり。其家、藤尾氏は徳あり、歌文を好み、父の學をめて、多羅尾純門氏の師に推薦す。故に屢々近江信樂に往來し、蘭字帶刀御免を許さる。當時に在りては、名譽の事なりしといふ。

藤堂侯に召さる

石藥師は五十三歳の一にて、諸藩侯の來往多く、諸侯諸名士の來訪少なからず。八田知紀翁の訪はれし折の短冊に、
神風に、しらべあぐらむ、百の葉の、たかきふしこそ、きかまほしけれ。
萬延元年、津の藤堂侯より召ありて、蘭學を講じ、客禮もて遇せらる。當時書翰撰集翁、老儒として常に藩侯に召され居り。父は未年若く、拙堂翁は書翰なりしかど、うるはしく讀びたりき。翁いはるゝやう、舌老いて長き夜の寐覺の折などに、詩を致るは物むづかし。歌をよみ出で、御身に示さむといはる。父又おのれ詩を好みて作り試みしかど、未師に就かず、さらば詩歌の添削を交換し侍らむとて、拙堂翁は歌を、父は詩を作りいてぬ。父當時おもへらく、詩の詞は唐土にて音讀し

佐々木弘綱

なき園と號す

てこそ其妙味はあるなれ。我邦の詩人の傑作と稱ふるも、我邦人編しなば、いかにかいふべき。細かず、我國風の一種の詩をつくり出むには、かく考へて、倣然住吉松岡月、淡路嶋山波上明、とやうの作をあまた作り試みたりき。然るに細堂翁として曰く、詩歌其歸する處一なれど、なほ異なれる點なきにあらず。斯る詩を作らむよりは、御身はなほ歌をよみ出るに如かずとて、遂に詩の老樹あり。その若苗一本を乞ひて庭に移し植たり。この樹花の見るべきなく、葉の色あるにあられど、常磐木にして、而も其葉強く、二葉を合して堅に引く時は、益々葉も破ること幾はずといへる由聞きて、父そは面白し、家の號にせむと、榊園と名づけたり。さるを細堂翁は和字なり。唐土にては竹柏の字をあつればとて、自ら竹柏園とかきて附られたり。今も我家に常に掲げたる額は是なり。

妻子を喪ふ

藤堂侯は、文人墨客をいたく愛せられし餘りに、父に津に移住せずや、家士の遊に列せむといはれしに、父、辱き仰なれど、代官多羅尾氏の好意を思へば、石橋師を去ること幾はずとて辭したりき。この頃は門人も多くなりて、龜山にも、四日市にも、關にも、社を結びて、月毎に父の山荘を乞ひたり。當時石橋師の坂倉有周、小松の中山寺真旭等、最すぐれたり。有周は學に、真旭は歌に秀でてを、不幸にして有周は早世し、真旭は心狂ひてみまかりぬ。共に出處の才ありしにと、父新々歌きては、いひ出でたりき。妻須磨子に一女あり。けい子といふ、六歳にして歌をよみ、さかしき性なりしかば、種々に教へ育くみけるに、八歳にして世を早くしぬ。然るに打つべき慶應四年、七十二歳にて母世を去られ、妻須磨子のみまかりぬ。世は維新となりぬ。東京には舊友知人少なからず、青を送りて上京を促がされし事も、しばしばなりき。されど父は昔風なる心に思ふやう、子は直接に幕府の縁をこそ受けぬ、多羅尾代官の厚遇を享け、藤堂侯の恩寵を蒙りし身なり。殊に今の世、人才皆郡に集まりぬ。我如きもの側田會に埋れをらむは、中々に道の爲なるべしと思ひて、遂に東京に出でず。當時の作に、和歌の浦に、われたに一人、残らずば、朽ちはてなまし、玉ひろふ舟。

居を松坂に移す

和歌の浦に、老をやしなふ、声鶴は、雲の上をも、よそに見るかな。かくて、こゝかしこの國々を歴遊せり。さて後、妻を喪りぬ、名を光子といふ、其腹におのれ、長昌會も、妻殺として誓はざりしに、父松坂本居家の監督となりて、鈴屋社の真願を發起したりき。十五年の春、當時十一歳なりし己れに、上野隅田の花を見せやらむ、櫻のままと、東海道を歩みて東京に上りぬ。然るに舊知小中村清矩翁をはじめ、社中の人々、東京に移り住みてはとす。よからむ、例の東京は、己等がすむべき地にあらずといふを、否、若一人のためは何地にありても、よからむ、伴なひし子息の、地方にては教育、覺束なからむといはれて、實にも、父は余等が教育のため、遂に素志を馳して、小川町に住む事となりぬ。物に拘はらざる父は、一封の書も松坂におくりて、斯々にして東京に住む事となれり。書簡器財をまとめ上京すべしと、我母にいひおくられしかば、母はいたく驚きたりしといふ。

東京に移る

門人全國に遍

病歿

當時東京大學文學部に、國語漢文を專修すべき古典科を設くるの舉あり。小中村翁、専ら事に當らる。翁が切なる勤めによりて、其の講師に出て、辭章を講じ、又大學編輯所に出て、國書に従事し、東京師範學校の講師をも兼ね。明治十八年の冬、病を得て、退きて、身を閑散の地におき、著述を事とし、傍ら門弟を教ふ。弟子全國にあまれし。同廿一年四月、社友の人々相ばかりて、還暦の賀宴を、隅田河畔の旗亭に開きし折の如き、地方よりふりはへ上京せし社友、相ばかりて、還暦の賀宴を、隅田河畔の旗亭に開きし折の如き、地方よりふりはへ上京せし社友、相ばかりて、還暦の如き、床上月々筆を執りて、歿する數日前に、裝釘成りたるを見、いたく喜びたりき。遂に六月廿五日みまかりぬ。齡六十四なりき。下谷區谷中天王寺葛城五重塔のほとりに葬りぬ。病中よみし歌の中に、われのみか、人の心も、苦しむる、これ一つこそ、かなしかりけれ。身こそ、あれ、心は世にぞ、とゞまらむ、よみつる歌を、魂にして、病あつしかりける時

著述と教授とを専らす

命あらば、嬉しからまし、もしなくば、それとすべなし、神に任せむ。父は生涯著書と教授にいそしみ、著述少なからず。然れども活版を厭ひて、木版を好む餘り、出版したる多くは、自ら版下を書き、自ら月謝などを集め、苦しき中より自ら出版せし書多し。嘗て詩歌自在四季の部を出版せむとせし折、西肆某、こはあまれく行はるべき書なれば、版権をとりては如何にといひしに、父、否と云、書を著すは、一部も多く世の人に讀まれむこそ望ましけれ。さて我が著書の人のによりて、購刻せられむか、これにまじしたる喜はあらじといひつ。果してこの書は、四五個所に購刻せられたりき。されど斯の如き様なれば、大部の著書、多くは世に出るに五らざりしこと、遺憾の極なり。さて他日數多ある草稿を大成して、出版する期あらばとのみぞ思はる。

俚言解

著書大に世に行はる

長歌改良論

父おもへらく、學の道は、普及せしめざるべからず。その書をあるのみ。その書果してよからむには、そをよみし中に、大なるすぐれ人も出てむ。されば初學の人を導く書つくるとしたや、すからず。一步をあやまれば、後進を惑はす弊ありとて、かの古今集遺稿、萬葉集、萬葉集の類、初學を益すること少なからざるを思ひ、それに就いて、諸種の俚言解をあらはしぬ。出版せしは、僅かに三種に過ぎざれど、萬葉源氏の俚言解をはじめ、草稿のみにて、數十種に及び、版下にせるは少なからず。わが記さむは、わが佛尊しの喩の如けれど、父の著書の中にても、歌歌自在、及、千代田歌集の二書は、普く世に行はれつれば、その感化、益し少なからざるべし。さるは維新の後、たゞ新しきにのみ進みて、歌の道の如き、省る人少なく、東京にても、たゞ雲の上と、民間なる一部の人に行はるのみにて、歌よまむの志はありながら、いかにして歌をよまむかと、思ひたゆたひぬし人の、歌歌自在を編きて、歌に志し、も少なからざるべく、鴨川集、歌王集の編纂以後、諸種の類纂集は出版せれど、千代田集ばかり、全国に行はれたるは少なかるべく、其版十數度を重ねて、紙型遺に磨滅するに至れりといふ。

資性

り。七五、五七ともに發達すべき調なるべく、只難古の長歌は衰へて、七五の今樣調、盛なるに至らむとの意もて書けりしを、當時和歌改良論などいふ書もありしかば、改良といふ字を借り用ひしなりき。さるにたゞ、題目にのみか、つらひ、精神を汲知らざりし一派と、固に古き冬のみ書べる一派などは、いたく諷刺憎むに至り、辨難の論きはめて盛なりしは、明治二十年頃の國文雜誌を見し人の、なほ記憶する所ならむ。

父の性質等に就きては、福羽美靜翁のしるされし、父の小傳の一節を引用すべし。余文は増補歌歌自在卷首にあり。君幼くして父に別れ、母の養育をうけて人となられしかば、常にその惠を思ひ、また是代翁の恩惠に深く感じて、病あつしかりし時も、母の事、師の上にいひ及ばれたりとぞ。翁が著述に教授に、歌道の爲につくされし功は、最も大にして、今更にいふべくもあらず。若平生實直不羈、美衣美食を好まず、人に交はる爲實に、人を導くこと極めて懇切なり。歌を誦する最も速にして、筆をとれば立どころに數首を誦す。古書古歌の暗記、また衆人に越えたり。おのれ、君と交はること久し、既に其交三十年をこえぬ。おのれ、年若くして、京師あり、近江路美濃路と、物しり人を尋ねめぐりける折、よりの友なりけり。交はること久しうして、其交全く御國ぶりの歌文を誦りあふ事なれば、かくの如き友垣多からざりしを、とく世を去られしは、いとともあたらしく、口をしき限になむ。そも、人の生るゝものは、何の道なりとも、世の爲つくすことありて、世に仰がるゝ事、人の道にはありけり。君の世に仰がれしこと、淵源あり。若きより足代翁のをしへ子となり、又天の下の物しり人を訪ひて、すこぶる學徳を養ひ、世に信ぜられて、此東京に終れり。淵源ありて人の師となり、世に仰がるゝこと、これ人の名譽にて、女垣なるおのれも、譽ある事と思へり。病おのれば、おまた年官につかへたり。君は官に仕ふるにあらずして、世に譽を得たり。官にありて譽を得るは、人あるひは易しといはむ。官にのほらすして名譽を高くするは、難きところなるべし。其難きを經て、徳ます、く高し。又君とおのれと身のおきどころかはりながら、學の道につきて、いとむつまじかりき。官途の友垣ならずして、かゝる高徳の友垣ある、おのれこれを榮とす。

佐々木弘綱

嗜好

父の嗜好は多方面に渉り、何事にも趣味をもちたれど、酒は僅に一杯を傾くるに過ぎずして、嗜む方にはあらずりき。第一は書齋を購ふことにて、今家に蔵する数千巻の書は、いづれもその苦心によりて集められしもの、われ等常にその餘瀝を蒙り居れり、父がある時の歌に、

紙筆のほかにほ残るものもなし、書あき人に、あたへ盡して。

藤堂家に出てし頃、見おほえ習ひおぼえて、文人書をかきたり。されどすぐれたるきはにはあらず。弟子の相などもて来て、歌かきてよといふに、こは書齋にせむ、梅の書かよき、竹の書かよきといふに、弟子、そはゆるし給ひてよといふほどなりき。筆跡はすぐれし方にて、秋萩帖、浪花帖、假字巻を好み習ひ、自らも教子のためにかきし三芳野帖、難波津帖の二帖、上本せられたりき。又日本古印を學びて、印材を彫りぬ。又大坂に在りし時、眞鍋豊平に歌を教へしかば、一註等を習ひおぼえぬ。父常に豊平の歌は歌らしくなりたり。わが一註等は、いづれも下手なりといひ、藤の上に琴をのせて、折々かきすさぶことありき。甚は伊勢にありしほど、堀川守禮とて四段の人に、これも歌とよりかへ學びたれど、矢張下手なり。師匠は四段なるが、われはなほ初段に非じなりといへりき。内海に足代翁の代稽古にゆきし時、家刀自、淨瑠璃を好み、舞身も習ひ、試み給はずといひしかば、習ひはじめ、老て後、折々自ら弾き自ら語りぬたりき。されどこれには極めて難なかりき。わが若き時、父の代に書を教へ居るに、障の室にて弾きぬながら、信綱々々、そこは遠へりなどいはれて、困じつる事ありき。氣を轉すること速にして、机のしとに、今まで書をよみぬたりと思へば、やがて人のもとを訪ひなどしたりき。老て後には夜毎散步に出て、道具店をひやかして、何くれの物必ず求め來りぬ。かゝる物、夜毎に求め給はむよりは、折々によき物を求め給ふ方よからむといへば否、これこそ夜毎の樂しびなれといひてやめざりき。又雨ふる夜は寄席などにゆきたりき。されど徒らに時間を費さむは惜しとて、淨瑠璃さしつゝ、快より小きき歌石出して、彫刻用の刀をとぐか、或は紙捻などよるをつねとしければ、傍の人皆驚きながめぬたりき。要するに何にも趣味をもち、様々の技藝を學びしかど、いづれも成功するに至らざりき。人に譲はず、癖びず、遺幅を飾らざりしことは、教を受けし人々の、今もいひ出る所なり。予がしらすをこそ好みくはれ、かの盛親僧都の如く、何事も自由にして、世の常ならぬ様なりしかど、人に譲はれず、よ

筆跡

著書

ろづゆるされたりき。十年祭の折、井上哲二郎博士の追悼の演説にも、その性質の天真爛漫なりし事を稱へられき。故せて心の花第三巻第七號にあり。

著書の出版せられたるもの

(著述) 竹柏園家集	一	長歌改良論	一	詠歌自在	六
新題梯	一	増補詠歌自在	一	活語全圖	一
(註釋) 竹取物語俚言解	二	土佐日記俚言解	二	伊勢物語俚言解	二
標註枕草紙	五				
(撰集) 千船集	六	開化集	二	千代田集	二
寶田集	二	伊勢名所歌集	二	月瀬梅風集	一
古今今様集	一				
(編纂) 日本歌學全書	一二	八衢大略	一	足代翁家集	一
文章作例集	二				
(辭典) 歌詞遠鏡	三	歌詞遠鏡附錄	一	雅言小解	一
歌文用語解	一	假字遺枕詞辭典	一	詠歌辭典	一
(紀行) 位山日記	一	加越日記	一		
(歌合) 月並歌合	二	睦舍歌合	一〇		

(以上、全書佐々木信綱氏寄)

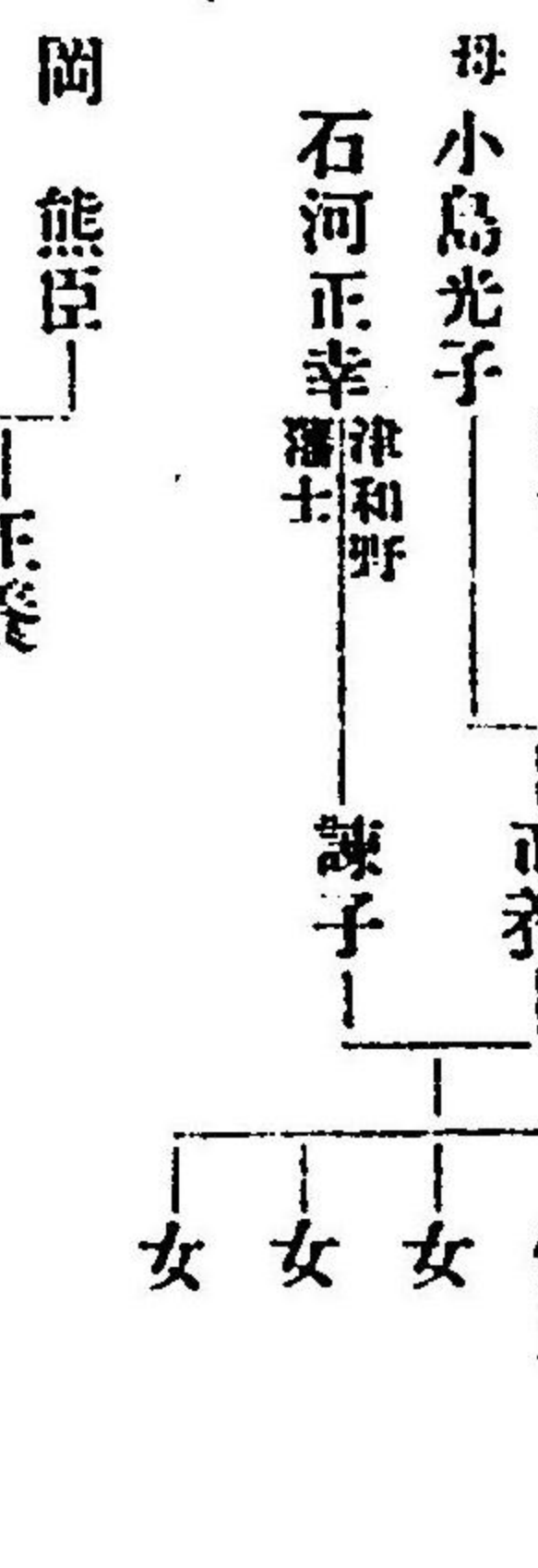
石河正養

生歿 二四八一、仁孝、文政四年八、二、

二五五一、今上、明治二四年一一、一七、
石見國鹿足郡津和野、東京府南豊島郡澁谷村上澁谷、
通稱 金左衛門、正養、多頭の舎、審齋、嚴柱、堅根、産、

父 越智盛宣津和野藩士 正養
母 小島光子津和野藩士
石河正幸津和野藩士 諫子
倭文人天折
年養
女 女 女

系圖



女

學統

岡熊臣 正養
大國隆正

著書

〔慶著〕産土氏神

大祓私釋

多頭舎歌文集

(以上、石河正養略記)

佐久間果園

生歿

二四六三、光格、享和三年一二、二六、

總叙

〔和〕二五五二、今上、明治二五年四、一、
〔和〕九〇、

光彪門

致仕

其妻

清貧を樂む

四男をめぐ

病夢餘談
勤王攘夷を唱

〔和〕三九 果園翁は、通稱種次郎といひ、小倉藩士にして、享和三年十二月二十六日、豊前國小倉に生る。木性松岡なりしが、十一歳にして、祖父の家を繼ぎ、佐久間氏を冒す。幼にして痘に罹り、左眼を失ひ、また早く父母を喪ふ。資性文學を好み、夙に漢書に入り、經史を學び、旁ら和歌を秋山光彪に學ぶ。文詞日に進み、専ら萬葉の古跡を好み、二十餘歳にして、既に一家を成す。また勉めて經學を修め、程朱の説を排し、力行を主とす。その子弟を教育するや、一に經義に則り、志氣を養成するを以て主とし、嚴々書を讀み、上りて、時政を痛論し、諫毎に協はず。因て門戸を閉ぢて、出でず。戚族の一人を養うて、家を譲り、三十七歳にして致仕す。これより天下を周遊する志あり。始めて京都に遊ぶ。既にして、藩の命により、郷に歸りしに、復た他に出づること許されず。初めて、家計大に困む。その妻松琴と號し、亦歌を好み、兼て南畝を能くす。夫妻窮乏の中において、意に介せず。清貧自ら樂み、常に閉居して、著書吟詠に耽る。この時、翁の著すところ、漢語活法、辨仁六卷、梅雨茶談三卷、七可談一卷、夢乎眞一卷、報國不諱論一卷、德行略解一卷等あり。漢語活法は、四書五經を註釋し、一家の說を述べ、辨仁は、四書六經の仁字を解釋し、其著書の中、經義に關する者は、之を以て翁の骨髄とすといふ。梅雨茶談は、隨筆にして、時政を諷刺し、その能みは、これに類し、あるは、忠愛至誠を述べ、あるは、慷慨憤懣を洩す等、みなその人となりを見るべしとぞ。のち四男を擧ぐ。時に幕府漸く衰へて、紳士四方に起る。翁また機に乗じて、爲すところあらんとし、四方に漂遊し、偏く志士を訪ふ。年五十九の秋、妻松琴病て歿し、四子尙幼にして、保育その人なく、また家計を助くるものなくして、遠遊の志を遂ぐるに能はず。止むことなくして、家に籠り、終日、翁も力む。この時、著すところ、病夢餘談二卷ありて、全篇悲哀の情溢れ、讀む者感ぜざるなし。翁を述べて、同志の士に示す。遂て慶應の亂あり。時に年六十餘。尚ほ長刀を横へ、藩兵野陣の間に闘

石川正養 佐久間果園

萬非と號す
天下を漫遊す
遺稿

施し、又密に軍議に參するところあり。既にして維新の改革あり。藩政亦大に更まり、權てられて
史生となり、尋て郡宰に遷る。時に年六十八、勤勉勇壯、老も衰へず。その百ふところ、國議と會はず。
書を上りて職を辭すること十數度、始めてゆるさる。その時、事に惑じて自ら萬非と號し、數年
筆の稿を起す。この後、二男一弟を携へ、東京に遊び、幾もなく、藩議の國に來り、漫遊すること數
年、舜一耶の岡山に住するに及びて、また遷りてこゝに寓す。明治二十二年、舜一耶とも、東京
に移り居ること二年、また信濃に入り、同二十四年初冬、寒を避けて、横濱實に遊び、同二十五年二
月、遠江に移り、病を得、四月一日、長子須田虎三の寓に歿す。享年九十。遺稿のうち、存する者、短歌
文詞の類、併せて五百餘卷、長歌集三十卷、二千零四百餘首、耳聞集百五十三卷あり。この他に、晩年
の著にて、千五百御統といへるが、あり。こは萬葉集以下、二十一代集の中に、千五百首を撰み、分
ちて上中下三卷としたるものにて、その嗜好の存するところを知るに足るべし。その自序の歌
多きも、世に梓行したるはなく、たゞその最も得意なる短歌、一百首を抜き、果國雜咏百首と題し、
木居豐額之が序を作りたるありて、梓に上したれど、これすら五百部を製して、門人知友に頒ち
たるのみなりといへり。その門人、各地に散在し、死に至るまで添削を請へる歌集、詠歌、數十卷、散
逸に堆かく、床に臥しても、又朱筆採りて、改訂することなかりきとぞ。(藤原忠朝)

著書

- 〔慶著〕短歌文詞 五〇〇 千五百御統 三 果國雜咏百首 一
- 病夢餘談 二 德行略解 一 夢平眞 一
- 報國不詳論 一 七可談 一 梅雨茶談 三
- 辨仁 六 講經活眼 一

福住正兄

生歿

目 二四八四、仁孝、文政七年、

因 二五五二、今上、明治二五年五、二〇、目六九、

相州箱根湯本村、湯本村早雲寺、

〔國〕九藏、蛙園、

(以上、歌學、五)

住所
姓名
經歷
著書

- 〔歌學〕 溫泉福住權の主人なり、吉岡信之の門人にして、國學和歌をよくし、後、平川の門人と
なり、又、二宮尊徳の門に入りて、學び、頗る經濟に通じ、金門の高弟なり。性溫厚篤實にして、常に社
會の敗徳に流るゝを慨嘆し、諸國に報徳社を立て、尊徳翁の遺業を弘む。
- 〔慶著〕箱根草 蛙園庭訓抄 一 大道論 一
- 道德格言抄 本教略圖説 一 報徳方法富國捷徑 五
- 報徳學内記 報徳幽顯論 一 報徳應報鑑 一
- 報徳手引草 二宮翁夜話 五 二宮翁略傳 一
- 二宮翁結社問答 一 二宮翁開拓方法 一 設すゝめ 一
- 箱根長歌百首 箱根七湯誌増補湯本部 湯桁物語初編 一
- むかし物語 二 蛙園漫錄 一〇 蛙園歌袋 五

藤原忠朝

目 二四八一、仁孝、文政四年、

福住正兄、藤原忠朝

因 二五五三、今 上、明治二六四、四七二

總叙
酒造家の丁稚
小僧
古今集を讀て
歌に志す

〔榎〕 岡山の片上町に、小原屋三八郎と云へる酒造家あり。この家の丁稚小僧に、名を虎平と稱ぶものあり。資性眞率にしてよく勤め、風に起き、晩く寝れ、日毎に酒樽を肩にして、市中の花主を廻りぬ。或日、古本屋の店頭に立ち、かれこれ見る中、古今集あり。虎平は何とも知られども、購ひて販り、暇あれば、繕きて之を視る。讀んで、花になくうぐひす、水にすむかほつ、聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける」といへるに、玉り、おほるげながら、其意を解し、頗る感ずる所あり。之れより歌に心を寄することとなりぬ。虎平は、即ち忠朝なり。本性、岡田、父を判平といひ、備前國上道郡竹原村に住居し、油を絞るを以て業とす。早前めて十三、出で、小原屋に住へぬ。

その頃、岡山の山野町に、島岡眞心と呼ぶものあり。宗蝶と號し、抹茶の宗匠にして、歌を好み、歌に志しあるものを集めて、百人一首を講義す。虎平、此事を聞き、主家に一日の暇を乞ひ、住て講席に列せん事を請ふ。

眞心、虎平の備人にして、且つ、年幼きを看て許さず。乃ち、一首の歌を止めて、去る。眞心、看て教ふべしとなし、自ら小原屋に虎平を訪ひ、懇ろに前日の疎忽を謝し、且つ將來、歌道に勉勵せんことを奨めて販る。この事、市中に傳播し、虎平の名、漸く高く、虎平、また、益々學に勤む。中區正徳、通稱典膳、は、出雲の國造孫の使者として、をり、岡山に來りけるが、虎平の事を聞きて奇とし、駕を小原屋に枉げ、其年尙幼きに歌に、巧みなるを稱賛しければ、虎平は取敢へず。

あはれ世の、人に一たび、ますらをと、いはれてこそは、死なまほしけれ。

とよみてぞ示しける。これより其才名ますら、高し。年十八にして、小原屋を去り、備前國、上道郡、四大寺村、藥種商舖屋敷平と云へるもの、家に、雇はる。いこと、いなりぬ。四大寺村を離ること、拾參町ばかりの地に、淺越村といへるあり。之れに矢定、英、宗とて歌を好むもの、住居しけるを、虎平、聞きて、いと慕はしく思ひ、住いて教を乞はんと思ひけれど、人に住ふる身の自由ならず。後、一月に五六回、許可を得て、夜業を終へたる後、訪ふこととなり、一夜百首を歌みて、曉に達する。とあり。

志を立て、
伊平の門に
入納

破獄者と見違
へらる

藤原忠朝

り、業、大に進む。虎平の主人は、其實直にして、精勵なるを愛し、吾が有する所の、田畑の新田にあるを、住きて擔保せよと命じぬ。されど虎平は、一意誠心、歌人とならんと思ふより、短しくも思はず。夙に加納、賭平の調を慕ひければ、和歌山に往きて、その門に遊ばんとしけるが、未だ暇を得ず。或日つくつく思ひけらく、何日までも斯くてあらんには、吾が望みを遂げるときはあらじと、乃ち主家を辭して家に販り、父母の許可を得て、紀伊國に旅立ちしは、二十二歳の時にありき。行く行く山陽道の風光に詩才を試みつつ、やがて和歌山に著き、旅裝のまま、諸平の門を叩き、備前より歸せられぬ。虎平は、多年の希望もあだとなりければ、頼む木庵に、雨洩る心地し、せめては吾が心の切なるを告げばやと、長歌を賦して送りぬ。其歌の反歌に、

ますらをの、とらて止むべき、和歌の浦の、ありそにきよまるまづの白雲。

諸平、これを看ていたく感じ、厚く禮を以て返し、其家に留む。居ること三年、母の歸國を促すに、せんかたなく、師の許を辭し、故郷に販らんと、連り、くりて四の宮まで來りぬ。

をりしも、日は西山に没して、廳に照らす月の影、木々の梢に露こめて、得も言はれぬ風光に、宿かることも打忘れ、徐に歩を運びけるに、思ひがけなく御用と呼びかけて、十手提げたる捕手、三名、有無を言はせず、帯びたる刀を奪ひ取り、ひしんと縛めぬ。何故ありて、かゝる難目にかゝるぞ、と問へば、今回京都にて、獄を破りて逃走したるものあり、汝も其一人ならん、とく歩めと急ぎ立てられければ、まばしと制して、

心知る、人なき旅の、そら行けば、まがびやすらん、沖つ白波。

と、口吟みて、わが來歴を述べければ、捕手も疑晴れけ人、縛の繩解きて、刀を返すに、虎平いへるは、古びたれども其刀は、吾が魂なり、故なく之を奪ひて返さるとも、其儘受け取らるべきや、もとの如く腰に差して返せよと、儼然として動かぬに、捕手もせんなく、その旨の如く、腰に差して與へきとぞ。

虎平、家に販りて父母に謁し、亦た和歌山に趣かんとするに、父母は、強て留めて存さず。止むことを得ず、家にありて、學に力めたりしが、後、弊梨郡、沖村の藤原某にぞ養はれける。之れより千餘寶

を業とし、日毎に荷を擔ひて、近村を過り、時ありては因拍地方まで往きけり。
 或るとき、美作國、七曲りと云へる山路を越えけるに、後の方より、鳴道の聲聞えぬ。定めてやんこ
 となき人の、通行ならんと、荷を卸して路の邊に閉り居りけるに、やがて、奥の岡近く來ぬるとき、
 奥の中より、和郎は虎平ならずやと云ふ。何人ぞと願上げて視れば、先づ年、其身を小原屋に請ひ
 來れる、中臣の正隆なり。正隆は國造の代理として、京都に上れる暇途にて、互に其奇遇を語り、其
 夜は旅亭に國造の代理者と、千應賣りの男と、謀交へ、歌語り、夜を明かしぬとぞ。
 後に、虎平千應賣るを止め、専ら耕作を事とし、其業勤儉を守りければ、家道日に豊になれり、今
 は心安しと、世を繼子に譲り、身は歌道に心を委ね、各地を遊歴し、其門に入るもの、數百人に及び
 けるが、ことし四月にみまかりぬ。齡七十三とぞきこえし。(俗家居士)

松野勇雄

生 二五一二、孝 明、嘉永五年三、二九、
 住 二五五三、今 上、明治二六年八、六、
 系 國四二、
 總 備後國御調郡、三原城北、山の手、上多門一番邸、
 叙 東京東京染井墓地、

○松野尚志世々三 壽太
 原藩士 勇雄——二平

皇典講究所及
 立す
 び國學院を創

明治五年、大阪に出て、六年四月、東京に來る、時に年二十二。平川義胤の門に入り、つぶさに學問を
 究めて皇典の學を修む。後、宇佐神宮の禰宜に任じ、九年夏、皇太神宮權主典に拜して伊勢に赴く。
 十年春、同權禰宜に進む。十年七月、本居豐顯氏の女婿となりしが、後、故ありて離縁せり。十五年三
 月、有栖川熾仁親王の命令を奉じて、皇典講究所を創立し、専て幹事兼教授となる。二十三年冬、國

生 發
 住 所
 姓 名
 學 統
 總 叙

生 二四八八、仁 孝、文政一一年、
 住 二五五四、今 上、明治二七年、一一、二〇、
 姓 常陸國水戸、
 學 東京東京染井墓地、
 統 幸三郎、
 總 公斐、
 叙 國水屋、又桑園、
 本居内遠、
 平田篤胤、
 幹文

久米幹文

學院を興して生徒を教養す。皇學の普及せしは、一に君の力に出づ。又、其學門として國體内に
 共立中學を建て、大に系統ある精神教育を樹立せんと企てしも、不幸、中途にして歿す。讀者之を
 惜む。(以上、全篇、編者見聞録)

〔國文學〕 今こゝに、故久米幹文先生を叙し、愛らせむとするに當りて、先づ想ひ出でらるゝ
 は、彼の黒柿の骨に、黄なる紙はりたる扇さしかくして、けしきだち笑ひつゝ、「世はいかに興ある
 ものぞや」と語り出てけむ。雲林院のそのむかしの、世繼の翁が、面影なり。指を屈すれば、はや十年
 の昔となりぬ。向が岡の學寮に、親しく先生の聲容に接することを得て、はじめて、大鏡の講讀に
 侍したりしその時、疎雲の如く、温存柔々として、堪へがたき感興に、折々は、顔を左右にうち振
 り給ひつゝ、「いくつといふこと更に覺えず」など、うち誦じ給ひたる身は、はやく書中の人と成り
 たらむやう覺えて、おはれその世繼の翁こそ、この先生の前身にておはしけむなど、おもしひ浮べ
 たること、そもいく度なりけむ。かくてその面影は、世繼の翁が、始なる筆のあやと共に、拭ひ難き
 印象を、わが幼き、胸裏にきざみて、今もなほ忘れぬ歎懐を、長くこゝにのこしたりき。

松野勇雄 久米幹文

篤胤内達に學ぶ

大八洲學會

意志の人

先生は水戸の人なり。水戸、屋と號す。平田篤胤、本居内達に學びて、最も英文に妙なり。嘗て水戸公の知遇を受け、東京小石川の藩邸にありて、大に國事に盡瘁せられた。明治五年、教諭者に出仕し、後、出でて伊勢の神宮に仕へ、それより専ら身を神職に置き、諸社の宮司に歴任せられ、神道の布教に従事せられた。明治十五年、東京大學の講師となりて、古典科學生の教授を擔當せられた。尋いで第一高等中學の教授に任ぜられた。又明治十九年には、本居内達、小杉相傳の諸氏と共に、大八洲學會といふを設立して、大八洲學會雜誌を發行し、別に大八洲學校をも起して、専ら國文國語の振興をはかられぬ。

先生の文名は、その頃よりして、漸く世に高く、その文章は、まことにわが國文界の珍品として、あまねく世人の感賞を引きぬ。先生はもと、智の人にあらずして、意志の人なり。一面に於いては、又文章の人なりき。ことにその敬神の志にあつく、愛國の念に強かりしは、まことに、以てわが國學者の好模範となすべき人なりしなり。余はこゝに先生の教育者として、世に残された功績と、その巧妙なる文章とにつきて、そのあらましを述べむとす。庶幾くは以て先生の盛衰を、その間に彷彿せしむることを得べしむか。

さて、當時の現状を口撃せられたる人々は、皆知らるゝなるべし。わが國文國語界は、そもいかなる非運の光景を呈したりしぞや。外にしては、泰西の文化急激の勢を以て、わが國中に侵入し來り、内にしては、徳川時代以來、その隆盛を極めたりし漢文の餘勢、なほ依然として、讀書界を支配し、わが國文そのものは、全く教育界の外に棄てられて、たゞ僅に和文國學といふ名の下に、その専門的研究の餘命を保ちたるのみなりき。げに英漢數の三科こそ、われら學生が修學の余料なりしなれ。先生はまさにこの衰退、その極に達せる時に當りて、所謂和文料の教師として、第一高等中學の講堂に立たれたるなり。當時われらは教科書用として、僅々五十冊の徒然草を集めむが爲に、あまねく東京の古木屋をあさりて、空しく數月を費したることありき。又帝國大學國文科出身の學士にして、今は博學の名一世に高き博士の君達も、その卒業の當時に於いては、上二段活と下二段活との區別をすら知らず、おはせしといへり。以てその全座を想見すべきにあらずや。

國語の地位

水戸學派

史論家

古代史の講述

先生がこの間に立ちて、一面には、學校の教師として、一面には大八洲會の設立者として、殊々と和文の名は、いつか國文と改り、國語となり、やがて中學校の正科にも加へられた。はては普通教育の上に於ける最大主要なる科目となりて、多年の風俗を受けたりし國文國語そのものは、まことに享有すべくして、久しく享有することを得ざりし、正當にしてしかも先榮ある地位につくことを得たる、今日の盛況を見るに至りたるなり。勿論これを上にしては、故井上文部大臣の熱心なる翼賛あり。これを内にしては、落合直文、池邊義典、兩先生の深厚なる援助あり。これを外にしては、上田萬年先生の言語學の學理によりて、唱道せられたる新研究の遺跡あり。相俣り、相助け、以てこの機運を熱せしめらるゝによるべけれど、しかも先生が彼の第一高等中學の校長に據り、大八洲學會の要塞に跨りて、その主任として、その設立者として、殊々としてその教を垂れられたる結果によらずんばあらざるなり。

先生はその系統を水戸の學統より引き、更に本居平田兩系統の影響を受けて、まことに意欲家固なる國學者なりき。かくて歴史と國體との關係につきては、ことにその上にその愛國なる信念を有せられたりき。先生の遺稿、水匠集を讀まれたる人々は、彼の史論以下の數篇に、いかにその英風の飄爽たるものあるかを認めらるゝなるべし。又その藤原氏論を讀まれたる人々は、その中に一種銳利なる先生の讀史眼のあとの寓せられたるを知らるゝなるべし。先生はこゝの上に於いて、益かに史論家たる資格を具へられたるものなりといふべし。先生、又わが國の歴史の、皆漢文にのみよれりしを慨して、自ら撰つて、大八洲史の編纂に従事せられた。不幸にして、全部の完結を見ること能はざりきといへども、先生がこの上に費されたる努力は、まことに少々にあらざりしなり。

余はこの大八洲史に關することにして、先生の生涯の歴史中に於いて、最も光榮なる一節と信ずるものにつきて、特にこゝにこれを述べざるべからざるものな有せり。時に明治二十六年、余が高等中學の文科二年生たりし頃なりき。ある日、時の文部大臣河野廣成子は、觀察として學校に臨まれたり。先生、偶、大八洲史の初篇を讀せられたり。余は香取鹿島二神の由來に際り

久米幹文

ます條なり。大臣は校長に導かれて、職員と共に教場に入り來られぬ。かくて校長は先生に向つて、大臣巡視の事を告げられぬ。嗚呼その瞬間なりき。先生のやさしき眼は、見る見る光彩を加へ來りぬ。靜に大臣に向ひて、われは今こゝに古代史を講ぜむとす。事は尊きわが建國のむかし、武絶倫と聞えし、香取鹿島二神降臨の上にかゝれり。願くはこゝに大臣の高潔を煩さむと。やがて期々たる音吐は滿堂に響き渡りぬ。たゞ見る、先生の白髪はこゝに銀の如く、青顔費を加へて、意氣頓に加り英風飄爽として、言々肺腑より出づるを、滿堂寂として聲なく、大臣以下、嗚呼として佇立するの姿。經津主神のみ、ますらをにして、吾はますらをにあらすやのあたり、嗚呼若くは若くは、りて、次々に涙を以てせむとす。恍乎たる先生の風平、まことに人をして齒か神かを疑はしむるものありき。余はわが教育の歴史に於いて、未だ嘗て、かゝる神聖なる思想に打たれたることなかりき。かくてその際に於いて、わが胸裏に印せられたる、わが尊き建國の歴史は、遂に世と共に長く忘るゝこと能はざる記憶をとゞめて、常に新しき思想を引きぬ。おもふにわが國家の諸子、皆余とこの感と同じくしたるならむ。おもふに大臣以下、またこの例にもれざりしならむ。嗚呼かゝる神聖なる教場、かゝる有効なる教育、そもいづくにかその例を尋ねることを得べきぞ。余は現時の教育界の有様を見ることに、深くこの先生の過去を追憶することを欲すること能はざるなり。

先生は又情に厚き學者なりき。かくて一度人の苦難を聞き、接連の窮状を見る毎に、遂にこれをよそに見過すこと能はずして、常に振つて、その救助をつとめられぬ。嗚呼一老先生の野真並に巨萬の餘財ありむや。しかも先生が後進を救はむが爲に、前後惠與せられし金額は、實に少々にあらずりきと聞けり。況んや彼の大入洲學會の如き、全く先生の出世によりて、その一時の文壇の支へたりといふをや。わが執近國學の大家は、特にその品性の上の文章を愛くること多きが中にありて、先生のこの舉動は、まことに空谷の雷音なりといはざるべからず。さて、先生の文章のいかに秀麗なりしぞや。そのなだらかなる句節の調、前に維新文壇の風格を具へ、且つ一種幽麗の節をとゞむ。嘗に以て維新以後の國文學界に於ける、第一流の文章たるのみならず、遂に彼の古學復興の諸學者と相接して、眞淵、春海の諸先輩と、その教を授ふに足れ

その厚情

その文章

り。かくてその文章が、彼の純粋なる擬古の文と異りて、そこに一種真采の風格ありしもの、全く先生の漢文の力ありしに、よれり。まことに先生は、水戸の學統を引ききて、漢文に精しかりき。ことにその作詩の中には、實に東門家の域に入るべきものありき。わが友、元臣金子君がその著「歌がたり」の中に引きたる、澁州明石の詩人、梁田殿が、百二十五年忌に、頼山陽の詩歌を次して作られきといふ、

映日文波海旬風。 光炎百丈誓晴虹。 須磨松嶺明蟾月。 寶得仙魂在此中。

その歌

の一篇の如き、以てその風格を窺ふべきなり。先生の和歌は、その短歌に於いて、その長歌に於いて、共にまたその堂に上りて、僅に一方に傾倒するに足るものありき。まかして、それは先生の叔母にして、近代の有名歌人にておはせし、岡宮八十子刀自の蒨陽に、負ふところ、少からざりしなりといふ。今左に先生の、平生好んで自ら題せられたる短歌二三をあげて、以て先生の風格の一斑を示さむ。

- 夕立は、筑波あしほの、やまづたび、けふも常陸の、國めぐりする。
- 川暮秋
- しづく川、ちるや尾花の、一ふりき、雁の羽かぜも、秋ふけにけり。
- 從軍行
- 負征矢を、たげさみもちて、みさくれば、弓はり月に、雁鳴き渡る。
- 彌中夢
- くさまくら、いく夜の夢か、こえわびぬ。あらしの末の、古里の山。
- 牛夢花
- われこそは、おほしたてし、か朝露の、おくつまにする、夢夢の花。

白川に、黒川の水を、せきかけぬ、いづれのせより、かち渡らまし。先生は、又、甚の妙手にして、初段以上の技倆を有せられきとぞ。その餘、常に巧にして、筆端に妙に、

頗る多藝の人なりき。しかもそれらの技巧、皆一に仙風を帯ぶるものあるに在りては、まことにそこに首尾貫通せるものありて、適以て先生の風采を想見するに足るものあり。先生、晩年眼を憂へ、身體またその健康を欠きて、病床の上、靜に詩文を研讀して、その辭をやられたりしが、遂に明治二十七年十一月十一日、年六十七にして歸幽せられたぬ。船井の舊地に葬る。嗚呼、こゝに既に十年、暮年草荒れて、蘇苔はやく碑面を封せむとす。聊かこゝに先生の風采を寫して、遙にありし昔のその時を想へば、恍としてまことに孔懷の念に打たれずんばあらざるなり。(内海弘藏氏)

著書 「編者補」大八洲史

五

日本文の榮

二

水屋集

一

大鏡校訂

三

小中村清矩

生歿 二四八一、仁孝、文政四年、一二、晦
 二五五五、今上、明治二八年一〇、一一、日七四

住所 江戶麹町五丁目、國東京、國下谷谷中、
 姓名 紀氏、國榮之助、金四郎、金右衛門、將曹、國陽春、
 總叙 「高等國文」三、先生、姓は紀、陽春、國と號す。もと、原田氏なり。文政四年十二月晦日、江戶麹町五丁目に生る。幼名を榮之助といひ、更に金四郎と改め、又金右衛門と呼び、將曹と稱す。母、原田次郎八兵衛は、三河國、碧海郡、四端村の産。妣は白倉氏名は美代、三歳の時、父没し、六歳の夏、母また、身うせられた。傍にはかゝく、しき親族もなかりければ、勇たる白倉久次郎氏のはからひにて、乳母を添へて、養

小中村を關ぐ

己亥遊紳

古代法制研究の念を起す

海上日記、公卿備考

鹿島の菴

止才類纂

母の家、小中村氏に預けらる。さるに、其家、實子なかりければ、翌くる年の冬、遂に養子となる。小中村氏は、もと山城國、男山神社の神官、小中村某の次男、勤兵衛定捨といひし人、元禄年間、江戸に下りて新に家を起す。これ其始祖にして、養父を金右衛門春矩といひ、養母は白倉氏常子、年々先達の妹にて、先生母方の從母なり。此冬、佐々木某の妻に就きて、書を讀み、字を習ひ、翌くる年、國山に從ひて、算術を學ぶ。天保五年、名を清矩と定め、國陽春に就きて、詩を作り、又、國島國に從ひて、漢語を學ぶ。同じき九年、養父、春矩氏没せられければ、家を繼ぎて、商業に從ふ。これより、年々繁くして、終學心に任せず、唯、いさゝかなる國を讀みて、和漢の書籍を讀するのみ。翌くる年の四月、古島氏に隨ひて、江島鐵倉より、箱根の温泉に遊ぶ。紀行あり、己亥遊紳といふ。同じき十一年、家業の法を改めて、稻間を得るに至りしかば、伊藤常形と、共に歌よみはじめむ。されど、定まれる師あるにもあらず。只、月花の折ふしにつけて、わづかに、心をやるのみ。又、高松藩士、中村六右衛門を師として、漢千家の茶道を學ぶ。

弘化元年、始めて、令義解、制度、通、公事根源等の書を讀み、深く、心をこれに傾く。是、後年、古代法制を以て、專修の業と立てらる。はじめなり。此頃より、時ら俳諧に遊び、彼を東洲といふ。同じき四年、國日本紀、三代實錄、周禮、江次第、類聚雜要抄等を繕寫して、いさゝく、國史傳令の學に専す。

嘉永四年、龜田雲谷に從ひて、漢文かく業を學び、また、伊藤常形の門に入りて、専ら、國史傳令の學を修め、はじめ、令義解の註釋かゝむことを思ひおこさる。同じき五年、家業を、次男、文次郎氏に譲り、猶幼弱なれば、年來親しく使ひたる、源助といふを、後見として、之に委れ、専ら、國史傳令の學に専る。

安政元年四月、伊藤常形を下總の佐原に訪ひ、其家に留りて、修學すると數月、歸歸、鏡子に遊ぶ。海上日記は、此時の紀行なり。ことし、公卿備考成る。同じき二年、木居内造の門に入る。五月、伊藤常形ととも、鹿島神宮に詣づ。此時の紀行を、鹿島の菴といふ。翌くる年、肥後博士曾考成る。同じき四年、紀伊家に召され、古學館類聚國史、國編纂に預り、教授の業に從ひ、また、水野士監守が、丹波書院に入りて、六國史、及び、令格式の中より、武備に預る事を、國編纂し、これを、止才類纂と名く。

文久元年、或同制定成る。同じき二年、始めて、令義解疏證の草を起す。四等官制考、律儀品類考、中古

小中村清矩

古學館頭取

田制考

病人を棄つる弊風等成る。九月、改めて紀藩の列に加へられ、古學館頭取を命ぜられ、教授に異たり。同じき三年、林大學頭はじめ、四名より幕府の命を紀藩に傳へ、和泉所へ出動して、授課すべき旨を命ぜらる。

神葬祭式を略定す

大學講師

歌舞音楽略史

大學教授

古事類苑の編纂

慶應元年、田制考成る。此、前年より諸侯旗本の家に迎へられて、職員令、職掌抄等を撰定せらる。こと多し。さるは、幕府より高家の向へ、律令有職の學心を懇くべき命ありしに依れるなりとぞ。同じき二年、曲水考成る。

學位を授けらる

貴族院議員

廣島日録

卒去

廿一年五月、文部大臣より、文學博士の學位授與あり。六月、宮内省より、帝室制度取調の事を業り、十月、奏任官二等に陞叙せらる。廿二年六月、勳六等に叙せられ、瑞寶章を賜はる。廿五年九月、貴族院議員に勅撰せられ、十一月、正六位に叙せらる。廿四年三月、由ありて本官を辭し、更に、文部大學講師の職託を受けられし、四月、特旨をもて、從五位に叙せらる。こは、年來の勤勞を以ての事つるなりとぞ聞に。先生、ことし古稱の辭に違せらるゝを以て、五月廿七日を以て、府下、上野公園内、櫻雲齋に於て、冥宴を開かる。來會する者、およそ、三百名。和漢洋の博士、學士は、眞にもいはず、詩歌、番書、連俳の諸文人より、雜技、俳優に至るまで、當時、大家名流と稱せらるゝ人々にて、從來未曾有の盛會なりき。廿六年七月、法典調査會査定委員の稱を蒙る。廿七年十月、臨時議會の召集に依り、廣島に赴かる。紀行、廣島日録あり。廿八年十月十日、更に、特旨をもて、正五位に叙せらる。さるに、この七日、俄に病に罹かり、八日の夜より、殊に重られけるが、醫藥効なく、十一日、終に、卒去せられぬ。享年七十四。去ぬる明治七年中、府下谷中、天王寺に墓塚を卜定し、その塚木にありて、のぼるは、わが身を、おくつきの、ところとしめし、墓の玉床といふ歌を、かき記しおかれければ、同じき十六日、神葬をもて、やがて、そこに葬りまつる。會する者、無慮、貳千人。會葬のため、地方より、ひとのものを併せて、總て、十三篇、追悼の詠歌、數十首、葬送、及び、式儀のさまは、美術學校卒業生、有志

小中村清矩

玉床

徹三郎氏の筆になれる。給巻物あり。落合直文氏と、余と、これに繪詞をかきしるして玉床と名く。先生の跡みおかれし歌の詞に、木つけるなり。

先生、人となり、温厚篤實、學びて厭かず。博覽強記にして、處々時世に通ず。一々もて、幕府の時に於て、夙くすてに名を世に知られ、市井よりたちて、肥前に列り、更に、藩府に聘され、和學所に授講たり。維新の初め、制度取調の職に就かれ、尋きて神祇教部の一官二省を兼て、内務、文部に奉職せられ、獻替辨稱する所、頗る多かりしも、其職の主とする所、寧ろ考證典故の事にありて、畢竟、先生餘業の學に通ざりしを、文運の授達に從ひ、典義漸く本邦古代の法、及び、其沿革の必要を認むるに至り、始めて職足を伸さるゝを得て、大學に入りては、主として古今法制度の授講を擔當し、參事院、宮内省、及び、制度取調局の御用掛を兼務しては、寧ろ、本邦法制度の沿革に應じ、傍ら、中學校用、和文教科書編纂委員として、古事類苑編輯委員として、其事務に盡力せられ、しかも、帝室制度取調掛として、貴族院議員として、法典調査會查定委員として、寧ろ、國家の法令制度を贊襄せられしもの、前後、一として新道に由らざるはなし。寧ろ、かの古典類聚料の編纂、其創始に於ては、もとより、加藤綜理に成るものなりといへども、之に依りて、許多の人材を養成し、遂に、今日の如き、國文の隆盛を見るに至らしめたるものは、主として、先生の力に實らずんばならず。先生の斯道の爲に、盡されしもの、實に至れりとこそいふべけれ。(中村秋香氏)

著書

〔編者補〕令義解註疏

公麻備考

類聚國史續編

陽春廬雜攷

國史學の礎

日本官制沿革史

歌舞音樂略史

飯田守年

生歿

四二四七五、光格、文化一二年五、一、

住所

因二五五六、今上、明治二九年四、一五、因八二、

伊豆國田方郡上狩野村月ヶ瀬、同郡北狩野村牧之郷、

月出長左衛門

男守年

女

廣雄 充雄

飯田蕃恭

女

恭雄

廣雄 充雄

系圖

總叙

勳儀著

歌も作れ田も

作れ

雜載

竹村茂雄門

翁、性剛毅、然れども、外に對しては實に温和にして、老君子の風あり。少時より勤學、一代にして指の素封家となれり。かゝる場合には、一般に世の譽れを受くる習ひなるも、翁は夙に謙遜の心厚く、而も陰徳を積めること甚多し。又世には文學に心を奪はれて、家産を傾くる輩少からず。翁に詩を作るより田を作れとの諺ありしむるに至る。翁之を敬き、常に曰く、「歌も作れ、田も作れ」と。これ翁の本領にして、やがて、其一方には歌人として知られ、一方には實業家として成せし所以ならむ。其子孫また國典を修め、且つ翁の遺訓を守りて、徳業を高くしといふ。

守年老翁は、月出長左衛門の二男にて、文化十二年五月一日、伊豆國田方郡上狩野村の守年なる月が瀬といふ處にて生れし。後に同郡北狩野村牧之郷なる飯田蕃恭に養はれ、長女登子とて、妻として、其家の名を繼ぎ、男女の子ども七人ありけれど、家は二女貞子うけつげり。そのかき、主松下氏に從ひて、給人席といふ列なりしが、明治のはじめに、松下氏の三崎藩邸などにて、神社の主典となりて、推少講義をかけ、又遠みて關東中講義になりけれど、故ありて其職を離れたり。その性剛く直くして、事を定むると違ひ、いへば必その言にたがはず。學のわざは、一わたりの漢文はさるものにて、はやくより俳諧歌をこのみ、俳諧起光論といふ書をものしたれど、竹村茂雄にしたがひて、歌よむことを學びしより、寧ろ、つとめて、いとよく其の道を得、みづから、こよなき樂としてありければ、近きとし頃、伊豆國にて歌よむといふ人のおほかたは、老翁の陸によらざるはなきさまなりき。されど、歌は詠みても、書は讀みても、家業はな怠り、と平生に人々を教へ、自らもよく戒めつゝありつとさく。翁の床に臥してのちも、

小田の落穂序

香と歌とはよまざる時なく、つひに「まかり路に、いざいてたしむ、ゆく／＼も、花の木おけに、やどりとひつし」と謳ひをへて、れぶりばてぬるは、いにし明治二十九年四月十五日にて、餘は八十二にてなむありける。此事どもを碑にふりしるして、後の代までも、とゞめむとする、深、廣、維、新、が本をめて、

明治三十一年三月、正五位本居豊順、相模國葉山の海邊の旅舎より、伊豆の越山途に、まゝ見やりつゝ、しるす。

〔小田の落穂序〕 己が祖父、守年の翁は、若き頃より歌よむをたしなみ、文かくとを好みて、香きのこされし詠草ども、あまたあれば、本居豊順大人、鈴木入東ぬしに、こひ、翁が七十の頃、みづから、かきおかれし家集の中より、聊か、えりわけさせて、小田の落穂と名づけける。そは、こたび翁の三年の祭に、手向歌よみて、おこせられし四方のみやびをたち、わかたむとてなり。翁は、早くより歌よむことに、いそしまれし故にや、年経しまゝに、其業の進みしと見えて、晩年の頃、よみいでられし言の葉は、やゝ見るべきものなきにしもあらねど、こたびもゆるは、わかき頃の歌ども多くして、お田のむづち、みるめなけれど、かくすり巻となしつるなり。見む人、つたなしとながめたまひそ。

孫 飯田廣維しるす
(以上、全篇讀者見聞録)

著書

萬葉集類語

俳句集

小田の落穂

竹村茂正

生歿

生 二四九六、仁 孝、天保七年八、一、

歿 二五五七、今 上、明治三〇年四、三〇、 國六二、

住所 伊豆田方郡修善寺村熊坂

姓名

茂正、其徳、園、山外、高樹樓

系圖

竹村茂雄(一一九五頁)を見よ。

學統

皇學を父茂枝に受け、漢籍を井阪適翁の門人 齋に學ぶ。業成りて子弟甚だ多く、縣下國學の牛耳を執る。

性行

奮發骨董を好み、鑿高し。母に仕へて孝養厚く、又、教師の本深し。たゞ理財に短なりと雖も、これ却りて翁の特色なるべし。

雜載

維新の際、脚疾を患ふと雖も、常に心を國事に傾け、明治二年、飯田守平、小川信邦等と語りて皇學舎を開く。學制頒布前、學舎を伊豆に設立せるは之を嚆矢とす。三島神社に仕へ又、正となる。晩年、上京して周宮内親王に奉侍せしも、病を以て辭して郷に歸れり。本居豊順、權田直助、小中村清矩の諸翁と親交ありきといふ。(以上、全篇讀者見聞録)

丸岡莞爾

生歿

生 二四九六、孝 明、天保七年四、二八、

歿 二五五八、今 上、明治三一年三、六、 國六三、

住所 土佐、國、東京

始め鹿持雅澄に從ひ、後松本弘廬に就きて和歌を學ぶ。官歴の傍、佳詠少からず。

御 題
四方の海、にこらぬ水の、みなかみは、大内山の、葉なりけり。
春 月

竹村茂正 丸岡莞爾

經歷

末きえし花のしらくも、また見えて、塵夜になる、山の嶺の月。
故郷
ふるさとの、かきほのすゝき、招けども、いよ／＼遠くなる音。
其創設にかゝる歌會の現存せるもの、千代の友(土佐)、其心會(京都)、則風社(東京)等にして、男、維兵、維派の和歌に名あり。
内務大書記官、社寺局長、神戶縣知事、高知縣知事等に歴任す。
(以上、全書、編者見附録)

吉岡徳明

生歿

生 二四八九、仁孝、文政一二年、

總叙

二五五八、今上、明治三一年六、一〇、
國七〇、

著書

吉岡徳明は、江戸の人、もと天台宗の僧にして、向島牛御前町の別荘となり、又、川越客多院に住し、常に國典を尾高嘉雅に學びしが、後、平田篤の著書を讀みて、慨然として書齋を設け、書齋にゆきて、國學の一家をなしぬ。
明治六年、大教院の考試に登第し、少講義に補せられ、同院編輯課に出仕し、丹波靈神社、中山神社等の権宮司、備後淳名前神社の宮司等を歴て、神道事務局の教授となり、權少教正に補せらる。
明治十五年の頃、丸山作樂の創設せる明治日報社受託の會計役となる。
次て太政官御用掛と爲り、修史館に出仕す。後、同館掌記に任じ、又社寺局屬に遷る。
古事記傳略
開化本論
(以上、全書、井上頼國氏談、編者見附録)

近藤芳介

生歿

生 二四八二、仁孝、文政五年、

總叙

二五五八、今上、明治三一年一、二、二九、
國七七、

近藤芳介は、佐甲但馬守久棟と稱す。周防國山口の人なり。足代弘興に從ひて、國學和歌を學び、一家をなす。其性温厚にして、しかも氣概あり。七福長門に下るや、京師より之に歸りて、萩に到るといふ。後、毛利公の謀介により、近藤芳樹の養子となり、その家名を嗣ぐ。明治の初年、宣教少博士となり、名を芳介と改め、松尾大宮司より、稻荷宮司となり、正七位より正六位に遷む。尤、宣教に長じ、宣教使中、風指の名あり。嘗て京都皇典講究分所に、源氏物語を講ずるや、辨說流るゝが如く、聞く者皆感ぜざるはなかりきとぞ。明治三十一年十二月廿九日、七十七歳を以て卒しぬ。
(以上、井上頼國氏談、編者見附録)

栗田寛

生歿

生 二四九五、仁孝、天保六年九、一四、

住所

二五五九、今上、明治三二年一、三一、
國六五、

姓名

常陸國水戸^居常陸、東京、^國常陸國東茨城郡稻荷村六段田、六地藏寺、
通稱 八十吉利三郎、^國寛、^國叔栗、^國栗里、^國蕉窓、銀卷、

吉岡徳明 近藤芳介 栗田寛

系圖

〔栗里先生雜著〕 先生諱は寛、字は叔栗、通稱は利三郎、栗田氏、栗里と號し、又燕窩、銀老等の號あり、その先は清和源氏、鎮守府將軍、攝津守、多田滿仲六世孫、栗田寛覺禪師より出づ、累世信濃國戸隠神社に奉仕し、其栗田の里を領せしにより、栗田を以て氏とす、其氏人の中に、諏訪の御子神なる、水内郡健御名方富命彦別神社に仕奉りし者ありしが、先生常に見えたり、我栗田氏は、信濃源氏の裔にて、戸隠神社の別當寛覺の孫と、尊卑するものあり、又永祿の頃、氏人に神五郎の名あるに、足利氏の末の亂れに逢ひ、常陸國茨城郡六段田村に徙りて、農を業とせり、されども、尙一郷の豪族にて、永正に栗田の又次郎、新四郎あり、天文に右京亮、永祿に新九郎、元龜に伊賀守又三郎、神五郎、周防など云ふ人々もありて、以上の人名は、詳書編に載せたり、代々村民の長たり、先生五世の祖勝重君に至りて、元祿の頃、初て水戸の城下に移りて、商業を營めり、六段田村にありて、其遺し置きたる田園を、村人今先生祖を惟尙、考を雅文と云ひ、姓は中村氏、尙傳へて栗田山、栗田屋敷と稱せり、先生、祖を惟尙、考を雅文と云ひ、姓は中村氏、茂四郎、中村登三郎、先生は其第三子なり、仲は孝二郎君直出て、茨城郡並同邑、栗田氏を嗣ぎ、孝は貞四郎君、貞、雅文君、性嚴格にして、寡黙家を治むる法あり、常に古學を好み、歌詠を善くし、中村氏、亦、貞正温雅、最も讀書を嗜み、賢婦を以て稱せらる、先生の文學を以て天下に著はれたるもの、實に父母教養の功に頼るもの多しと云ふ、先生の事蹟は、先傳の碑文、及び小傳に詳かなり。

年譜

〔同上〕 ○天保六年乙未。九月十四日庚子、先生水戸下町木六町目に生れ、八十歳と稱す。

小道鏡を著へて、給草紙を購ふ

○十年己亥、先生五歳。毎日母君より興へらるゝ小道鏡、八文を貯へ置き、二日口毎に、木五町目なる草紙屋に行き、一冊十六文の給草紙を購ひ來りて愛看し、他の給草紙等に賣せしことなし、草紙屋の老婆、之を奇として、其新版物出るときは、必ず先づ之を先生に寄贈するに返りしと云ふ。

眼光凡ならず

○十一年庚子、先生六歳。上大人丘の帖に就て手習を始め。

父の訓育

○十二年辛丑、先生七歳。北河原守景(通稱甚五右門、青畫彫刻を善くし、頗る豐饒あり)翁を師として、讀書習字を學ぶ。翁、常に談話の時、毎に先生を指目して、此兒眼光凡ならず、他日必ず世に傑出すべしと、語られしとぞ。

著書の始

○十三年壬寅、先生八歳。或時、父雅文君の篋竹を把りて、占考するを見て、之を問ひしに曰く、是漢土聖人の始めし占法なり。我國則に神代より太占の法あり、世之を知るもの稀なり。他日汝に傳ふべしと。又晩酌の時、種々神代の故事を説き、三種の神器の、益童の大寶なる事より、廣遠鳴尊の神劍を得たる所以に及び、絶々止まず。時に其事何書にありやと問ひしに、曰く、古事記、日本紀にあり。早く素讀を卒へて讀み見よと、先生之を心に記して、念々忘るゝこと無かりき。

強記師を驚かす

○弘化元年甲辰、先生十歳。孟子二の卷より以下、及、中庸まで、一日に卒業す。又玉篇より、古字を悉く抄録して、古字集一卷を作り、爾後頗る古字を記讀す。之を先生著書の始と爲す。

古事記を愛讀す

○二年乙巳、先生十一歳。始て作詩の法を仲兄に受く。又仁上純に就て、讀書習字を學ぶ。此時師命を受けて、禮記の三より兩讀みを爲す。

古事記を愛讀す

○三年丙午、先生十二歳。仁上氏、教ふる所、意に滿たざるを以て、更に石河明善(神樂)に就て學ぶ。此時、杜府の諸葛亮を誦する詩を書して、習字帳とし、其讀を受くること一冊にして丁す。明善大に嗟賞して惜かず。

古事記を愛讀す

○四年丁未、先生十三歳。伯兄、仲兄、共に江戸に遊ぶ。時に先生、其家老として、古事記一冊を購ひ、來らんことを請ふ。後、其書を得るや、愛讀惜かず。先生終身座右に置きて、展閱に供せらるゝもの、即是なり。此頃より日本紀をも併せ讀み、又始めて歌を誦す(白妙と降り歌く聲の、寒き明け、古事記を、讀みに吾は行く)例え、雜錄篇を讀て感ずる所あり。始て漢文神書一冊を作る。世人歌

水戸親公に知らるる
藤田東湖に謁す
圖らざるの譽あり

「撰定史料」

六丁目の公道館
二階屋
元服
國史の補修

貧して之を傳寫する者多し。

○ 嘉永元年戊申、先生十四歳。海防一在民心と題せる漢文一篇を作る。或人一本を寫して、讀みに之を烈公に呈せしに、町人の子にして此の如きは奇特なりと賞給ひしとぞ。

○ 二年己酉、先生十五歳。始めて藤田東湖に謁して、論語爲政以徳の事を請ふ。又友人神永直之允等と射術を習ふ。是歳五月廿五日、徳公忌辰、諸友と同く詩を賦し、南木歌と題して、石河明善の正を乞ふ。時に會澤正志より、明善の門人の詩文を見んことを求む。明善乃ち其詩稿を呈す。正志、明善に謂て曰、詩稿中、南木歌、字句未だ整はずと雖も、氣概見るべきものあり。是て亦らずんば、終に成ることあらん。子善く之を見よ。と云へり。明善、先生を呼んで曰、會澤翁の言、此の如し。古人云く、圖らざるの譽ありと、汝の謂乎といふ。

○ 三年庚戌、先生十六歳。會澤正志に就きて、論語書經の釋義を讀く。兼論五經を著はして、正を豐田松岡に乞ふ。又國友善庵に從て、漢學を習ひ、字根考、原仲家、諸氏に往來す。會澤文館にて來り見る。先生此頃、専ら春秋の經義を研究するに志あり。又詩は論語、文は經傳之を好み、南詩集、昌黎文集の如き、皆自ら讀寫して、批點を施せり。

○ 四年辛亥、先生十七歳。渡邊清左衛門を師として、學問を學ぶ。此頃、撰定史料數十冊を撰定す。豐田松岡來り訪ふ。先生此時、始めて松岡に謁す。松岡、撰定史料を見る所ありと云ひ、又、撰定史料を見て、其有用の書なるを賞せり。是より先生大に古典を研究して、國史の撰定を請ふに志あり。毎夜諸友生を會して、日本紀を讀せり。當時、烈公、撰定史料を讀り、其に私道館を興して、文書を勵ませり。先生町家に在りて、日夕諸友を會し、讀書止むことなきを以て、人皆先生を目して、六丁目の弘道館と稱するに至れり。又先生、常に樓上に在りて、讀書にのみ耽るを以て、史書撰定、誠れに先生を呼んで、二階屋と稱し、其所用ありて之を召すに、高梁二階屋と呼ぶとせば、先生毎に唯々として樓を下る(この書樓を先生自ら命じて、輔仁樓といへり)。

○ 五年壬子、先生十八歳。正月元日、元服して利三郎と稱す。此日、豐田松岡を訪ひしに、松岡曰く、今日、今日學ぶ所何事ぞと。先生古典を研究して、國史を撰定するに志ありと答ふ。松岡曰く、其は善き志なり。古典簡なりと雖も、皆實値を考ふべし。撰定史料の史の如きに非ず。撰定史料

彰考館に召さる

「渉史漫録」

味あり。又舊事紀は、偽託に出づと雖も、其國道本紀、天孫本紀の類、往々古書と符合す。是れ最も譯せざる可からず。余嘗て國道紀を作る。今其稿を失せり。他日能めて以て示さんとす。且、紀して辭し去り、歸途夜に及ぶ。青野東壁樓に過く、舊事紀五巻を借り來り、時時觀に就て、國道本紀、天孫本紀を寫し、一夜にして了る。是より國道本紀を撰明せり。又姓氏の明ならざるを憂ひて、更に姓氏録を購ひて熟讀せしかど、猶明瞭なること能はず。是に於て國史撰定する所、事有る姓氏に關する者は、悉く抄録し、之を姓氏録に比較して、頗る其要領を得。是れ姓氏録撰定する所、事有るはせり。爾後、研究三年、第一日の如くなりしと云ふ。夏六月十四日、友人中野清等と鹿島に遊び、十五日神社を拜し、延方校に至り、其明日香取の神社を拜す。

○ 二年乙卯、先生二十一歳。正月五日、國道本紀撰定成り、十一月十日、天孫本紀撰定成る。

○ 五年戊午、先生二十四歳。六月二十四日、水戸藩邸より召されて、彰考館に奉仕し、先皇萬壽の使令に供すべき由を命せらる。當時之を御用部屋小僧と云ふ。是れ先生仕官の始なり。是より前數日、彰考館より人を以て、先生の父兄に問ふに、先生をして仕官せしむるや否やを以てせしが、未だ確答せざるに、再び人を以て其答を促ししに、父兄其世事に慣れざるを以て、如何あらんと躊躇せり。其人直に、先生に面會を求め、又仕官の意ありや否やを問ふ。先生曰く、仕へざるは義なきなり。余の學問する他にあらず。此土に生れて、威公以來の恩徳に報い奉らんことを願ふにあり。況んや、彰考館は、徳公大日本史編修の爲に創むる處、出でて此に仕ふるは、最も余の願なるに於てをやと。其人欣然として去る。先生の始めて彰考館に出づるや、豐田松岡、故に先生に向ひ、後來史館の事を繼續すべき人に、語り置く事ありとて、志を撰定する所、事有るを委曲に説きされしと云ふ。其後先生、總裁を其家に訪ひしに、種々歴史に關する談話あり、辭し去りし後、總裁、傍人を顧みて、頗る先生の萬學を賞し、彼れは他日必ず、史館の總裁たらんと語られしとぞ。

○ 六年己亥、先生二十五歳。大日本史神祇志を修むるの志あり。即ち撰定史料下雜史を檢討し、其神祇の事に關するものを悉く抄録し、繩頭細字、積んで十二巻、名けて渉史漫録と云ふ。

○ 萬延元年庚申、先生二十六歳。八月十五日、烈公薨去、順公嗣立。

父の喪に服す

○文久元年辛酉、先生二十七歳。六月、館務勉勵により、増修せらる。十月、國造本紀考四巻成る。此後、國造族類考二巻、漢文、國造世表、國造禮記等亦成り。

○二年壬戌、先生二十八歳。正月元日、國造本紀考別記一巻成る。三月、波矢理和射考二巻成る。六月廿三日、父雅文君、病を以て家に歿す。其喪祭の式、皆古禮を用ひ、國制に依りて、一年の間、喪を著て喪に居る。是より先き、先生自ら大日本史一百巻の體寫に從事せられしが、是に至て全く其功を竣はる。閏八月、留付格に遷めらる。

○三年癸亥、先生二十九歳。この夏、標注撰磨風土記、尾張氏墓記各一巻成る。

○元治元年甲子、先生三十歳。正月廿五日、物部氏墓記三巻成る。又、考古餘録二巻成る。

○二年丙寅、先生三十二歳。九月廿六日、葬禮私考二巻、稿を脱せり。十二月、先帝の崩御を聞き、其葬禮私考を淨寫し、之を朝廷へ奉呈せんとを、喜人某に托せり。

○三年丁卯、先生三十三歳。十月十日、先生小澤氏を娶る。久慈郡太田、東の上、小澤藩市有門益廣君の二女繁子、此月廿五日、影考館物書役と爲り、傳給を加増せらる。三轉年表一巻成る。

○明治元年戊辰、先生三十四歳。この年春、順公致仕、鹽山公嗣立、この頃迄に、先史の手自ら、體寫せられたる古今の典籍、殆んど七百餘巻に及ぶ。

○二年己巳、先生三十五歳。二月家を別て、六町目南側に賃居す。三月、藩命を以て、封書撰錄の判書を論陳するの書を献せり。後に聞く、これを藩の意見として、朝廷に奉れり。六月、續編府縣三治一致の制を立て、各藩をして其藩誌を奉還せしむ。八月、大日本史志願を上木して、大進を明にせん事を請ふの書を藩公に呈す。九月五日、水戸家の家快と爲り、日本史編纂の事を掌る。此時、史館の人員を定めて、志願の上木に従事せんことを請ひ、又志願に姓戸を被すべしを請を呈せり。十月、史館に總監の職を置き、勤惰を察せられんことを請ふの書を呈す。事少な請の如く行はる。

○三年庚午、先生三十六歳。四月、下町白銀町に轉居す。銀巻は此時の體なり。藩命を以て、水戸藩神社録二巻、同後附三巻を著はし、十月脱稿。十二月十四日に之を呈し、廿八日、其實として、藩

要を要る

體寫の書七百

より烈公親筆一軸を賜はる。東照宮の奉祠職を改め、及、喪所を致くべきの體を呈す。十二月、太田村なる寺院に在りし、義公の像を史館に遷し、朱丹水の像を遷記せんことを請ふ。一日を經て、議の如く行はる。事は常務物語に詳なり。

○四年辛未、先生三十七歳。二月、大日本史刑法志二巻、兵志三巻、校訂成りて、上木に附す。六月、神祇志料十七巻脱稿せり。藩命により、伊勢太神宮神領考を著はす。七月、朝廷藩を遷して、書を呈す。此水戸縣廳より、弘道館訓導に補せらる。八月、廢藩後、置すべき方角を論陳して、藩主に呈す。史館の藏本を東京なる菫藩邸に移すの不可を論じ、また大日本史紀傳を悉く國文に譯し、活刷して其頒布を廣くせんことを請ふ。九月廿五日、影考館編纂主任の命を蒙る。十月廿三日、學規稿成る。十一月、千波村四小路に家地を賜はる。戸籍考一巻、吉田神社事考一巻成る。

○五年壬申、先生三十八歳。四月、是より先き、菫藩邸より、水府系書九十巻を、茨城縣廳に引續ぐ。是に至て、先生書を呈して、其誤を辨じ、更に之を影考館に返戻せんことを請ふ。今館庫に存するもの、即是なり。十月十五日、茨城縣十五條出仕、學制撰拜命、兼ならずして之を辭す。此時、先史、義烈二公の爲に、神社を建設して、官祭あらんことを請ふの書を作りて、之を呈す。此時、先史、其事遂に行はる。事亦常務物語にみえたり。また、故鹽田總裁の功勞を陳べて、其冥神の匾字を賜はらんことを菫君に請ふ。高山藩生事考一巻成る。

○六年癸酉、先生三十九歳。六月、常務神社選宮記。菫君、先生の功を賞して、條奏の明諭、及、給子を賜はる。七月、朝命を蒙りて、東京に上れり。是より先き、藩命ありしが、故ありて辭退す。八月五日、平野神社少宮司、兼、大講義に補せられ、同十五日、大教院編輯事務を命ぜられ、教育の撰集に預る。この時、芝山内、山下谷、林松院地内に賃居せり。十月、神祭に立拜を用ひるべからざるの體を、教部省に上る。十一月、都々古別神社所在の誤を正さんことを請ふ。是月、皇子薨去により、俄に葬式を撰ぶべき命を蒙る。因て葬祭式、及、考證二巻を終めて奉呈す。十二月二日、教部省九等出仕考證掛に任ぜらる。此月上書して、鹽齋神社を國府社に列せられんことを請ひ、同時に小中村清矩の之に關する議案を辨駁す。

○七年甲戌、先生四十歳。一月十三日、日吉神社考證成る。十九日、水川神社考證成る。此月、門人

栗田寛

理信正をして、北野神社に詣らしむ。初め先生の幼なるや、母中村氏、北野神に先生の學問を以て世に立たんことを祈り、爲めに其身、每朝、食糧を絶つ。此に至りて母氏の宿願を遂げしなり。三月二十五日、郡農神社考證成る。五月廿日、左院に遷自して、神祇官の典儀を請ふ。七月十日、特撰神名彙編纂掛を命ぜらる。十月四日、教部權大條に任ぜらる。十二月十三日、石上神社考證成る。官國幣社祭神考證、忌部神社所在考案、宇都宮神社の争を判するの案、靜岡縣駿河國遠敷郡四方村、豐氣神社を式内豐後神社と云ふは非なるの考證等、亦成る。是後、香取町玉皇寺に轉居す。

○八年乙亥、先生四十一歳。一月、島津左大臣(久光)の使托を受け、長慶院天皇考證一卷を著す。四月二日、熊野坐神社、並相殿祭神考證成る。五月八日、大物忌神社、月山神社考證成る。三島神社祭神考證、伊豫神社考證成る。六月廿九日、日前國懸神社、關宮考案成る。七月二十一日、祭神私考一卷成る。十二月、特撰神名彙編十三卷成る。

○九年丙子、先生四十二歳。三月十五日、寓居を麻布、北日ヶ窪町に移す。七月、神祇官考案上木成る。北野神社宮司、田中尙房の請を容れて、神社の版圖となす。望し木社の祭神は、歴世神像を奉りし、土師宿禰の裔神に坐はすが上に、母氏昔日の新嘗など、思ひ合はすればなるべし。十一月十八日、故ありて辭表を呈せしに許されず。十二月廿五日、特撰神名彙編纂掛、格別勅諭の由を以て、金若干を賞與せらる。出羽國湯殿山神社考證、大塚比古神社御靈代議案、關社末社考證、豐受太神宮相殿神考證、同附考、米餅掛及聖若等調製考成る。

○十月丁丑、先生四十三歳。一月十一日、教部省遷せられしにより、解官。二月一日、大政官兼史館四等掌記に任じ、十二月廿二日、三等掌記に任ぜらる。此時、川田剛等と、加賀前田家藏の圖書三代格を校訂せり。今世に傳ふる所の、亨條木類聚三代格是なり。是後、香取町三丁目に遷居す。○十一年戊寅、先生四十四歳。四月、風土記逸文考證を起稿せり。五月八日、母氏の病を以て、一ヶ月間歸省せり。九月廿六日、伯兄恭徳君、俄に病死せるを以て、暇を請ひて水戸に下りしが、十月十八日、母中村氏も亦逝去せられたり。此時、経信成願寺伯兄の嗣子も、病に罹り、家事煩る多量なるを以て、遂に宗家の爲に職を辭して歸郷せり。

三代格校訂
歸郷

輔仁學會
大學講師に聘
せらる

○十二年己卯、先生四十五歳。一月三日、古史二卷脱稿。香取主徳川侯より、大日本史志案を宛てすべき命を受け、少年子弟三五輩を集めて、其事に従事し、佛事志を上木に附し、職官志を校訂し終はり、樂志を修む。是後より、経信成願寺、家事を執るべくなれるを以て、更に居宅を上市大坂町に求め、十月仲兄直君の三男、即ち不肖、勤を養て嗣子と定む。關國漢一巻、學之書草五卷成る。祝詞集釋、起稿。

○十三年庚辰、先生四十六歳。一月十五日、大阪町の家に移り、家塾を開きて輔仁學會と稱し、大日本史編修の餘暇を以て、子弟を教育す。是後、氏族志の校訂を終はり、食貨志を補修す。○十四年辛巳、先生四十七歳。四月八日、大學總理加藤弘之より、町田久成を介して、法學部講師、兼文學部講師の任を囑托せんと云はれたれど、大日本史編修中なるを以て之を辭す。是後、樂志を補修し、職官志を上木に附す。また、禮樂志中の山陵の部を起草し、水滸大事記起稿。十月、仙歌童考成る。

○十五年壬午、先生四十八歳。初春より、神祇志二十三卷を編し、九月に至りて其稿を終はる。是頃、八幡神考一卷成る。是後五月、佛事志六卷上木、十月職官志五卷も亦上木す。

○十六年癸未、先生四十九歳。四月二十五日、大日本史國郡志材料輯録の爲め上京し、五月朔旬に歸郷す。是月、香取主徳川鑿山公致任、邦山公嗣立、此時某々等相謀り、俄て先生を某省に奉任せしめんと勸めたるも、日本史編修未だ其功を終はらざるを以て辭す。八月下旬、特撰神名彙編考證起稿。十月に至りて畿内の部成り、其月の三日より、十二月十一日に至りて、東海道十三國の部成れり。

○十七年甲申、先生五十歳。元老院、先生の戸籍考を上木して、其の版圖と爲す。四月、一代一度華幣社附縣路給考、樂器考成る。五月、大日本史氏族志十三卷上木す。八月、逸年考一卷成る。是より先き、二月五日、和名鈔郡考證下總常陸成り、其月十九日、近江美濃系縣信濃編成る。是より奥を稿して、白河郡に至る。九月八日、朝命あり上京す。十二日、元老院准委任官御用掛調査職務を命ぜられ、神田駿樂町五番地に留居す。特に家にありて編纂に従事し、公務の傍ら、大日本史志案を編修することをも許さる。命を受くるの後、一月にして、氏族考三卷を終め、之を編纂

元老院に出仕

佐野常民に呈せり。此頃、舊藩主徳川侯の依頼により、毎月巻郎、同侯の爲に、大日本史の撰述を爲す。十一月、版木、國の實一巻成る。

○十八年乙酉、先生五十一歳。二月五日、風土記逸文考証八巻脱稿。八月、大日本史續編第六巻上木成る。九月、國造本紀考六巻刊刻成る。上古職官考三巻成る。尋て中古職官考を編纂せり。事蹟池田輝徳氏、毎月數次、來て大日本史志類の撰述を懇く。此頃、元老院に於て、職官の爲に、令儀考を講ぜり。十月、神田駿河臺袋町十五番地へ轉居す。

○十九年丙戌、先生五十二歳。一月二十二日、官制改正の事あり。依頼御用書を見せられ、更に國院の編を命ぜらる。中古職官考十七巻脱稿。貞觀儀式考成る。四月二十三日、元老院第三課附屬を命ぜらる。七月、暑休にて歸郷中、北河原守景、寫す所の、烈公竹俣敷牧を獲たり。先生嘗て、世に烈公の眞影なきを憂へ、捜索すること年久し。是に至りて、偶々、之を購得せり。後、友人青山眞、畫工を傭ひて、公の肖像を作る。亦之を以て其粉本と爲せり。此頃、國造本紀考を撰し、こと考、其要帝議原由記、上古兵制考、軍團の制、附、健兒の制考、並、片岡經春考等成る。

○二十年丁亥、先生五十三歳。二月廿八日、莊園考三巻脱稿。此頃、伊勢二所、大神宮役夫工米、及、大伴合米の考案成る。三月二十七日、和名抄郡縣考、東山道の部脱稿。五月廿六日、北關山陰二道終業。九月十一日、山陽道成る。十月一日、南海道成り。明年一月五日に至りて、四海道脱稿。八月、常體物語一巻脱稿。一部を淨寫して、常體神社に奉納す。また、常體官田神社事蹟考を上木して、同神社に若干部を奉納す。十二月、鎌倉職官考六巻成る。石上宅嗣補傳成る。是頃、先生、水戸上野大隈町の自宅に書樓を建築す。

○二十一年戊子、先生五十四歳。三月、藤原保則傳の逸文を發見して、世に公にす。七月、大日本史食貨志十三巻上木す。莊園考活刷成る。國縣里村の制一編成る。十二月、守護地類考三巻成稿。華族譜稿叙論成る。此頃、永祿元龜天正年間常體設假考成る。

○二十二年己丑、先生五十五歳。一月六日、畿内沿革考成る。二十五日、御邑御領沿革考一巻成る。是元老院議長の命による。其命を受けしより、七日にして脱稿せり。二月廿五日、古人考考成る。三月十四日、水戸に於て、藤田東湖の贈位祭あり。先生、水戸有志者に代りて、其祭文を作る。十

我國固有の大

「勅語述義」

六日、友人青山眞、藤田健長、谷川清等と共に、烈公肖像の大額を常體神社に奉納す。先生、其旨文を作る(事、青山眞の仰景志に詳なり)。二十八日、解職、事務勸勵の原を以て賞賜あり。國造町職官考編纂の事を囑托せらる。幾くもなくして稿成る。初十七年拜命の際、舊藩主の囑托を受け、大日本史志表編修に預るを以て、三年を限り、奉職の事を約し置きしが、是に至りて、殆ど四年半に及ぶを以て、歲月過去り、或は志衰の功を終へざらんことを恐れ、情を陳て解任を請ひしなり。凡拜命以來、古今の制度沿革を取調ぶべきの命を受け、氏族考三巻、上古職官考三巻、中古職官考十七巻、鎌倉職官考六巻、室町職官考七巻を編纂して之を進め、四月十八日、編輯、考證勸勵書藁の如し。是より専ら、大日本史國郡志の編に從事せり。此頃、高天原黃泉の說を作り、また、制度の學を興すべし論、一篇を著はし、五月、兄弟姉妹人名考成り、鎌倉郡補考成る。

○二十三年庚寅、先生五十六歳。二月五日、是より先き、侍講元田永季、私かに書樓宮司兼津島、安房宮司磯積精雲の二人を介して、先生に問ふに、國家固有の大道を以てす。是に至りて、先生神聖寶訓廣義一巻を著はし、一々古今の史乘に證して、我が神聖の大道は、忠孝兼論に外ならず。所以を發揮し、以て侍講に呈せり。十月廿三日、是より先き、天皇皇后陛下、陸軍大演習天覽の爲め、水戸へ行幸啓ありせらる。由を仄聞し、先生自ら願書を草し、此日、同志の士數名と共に、之を土方宮内大臣に呈し、臨幸の際、藤田、齋谷、會澤正志に贈位の恩典あらんとを請ふ。廿六日、兩陛下水戸に行幸啓ありせらる。廿七日、山口主殿願の傳狀を以て、神武志料二部、別に上表一篇を添ふ。兩陛下に進獻し、御宮納の榮を蒙る。十一月十六日、水戸有志の士相謀り、弘道學會を起し、毎月一回、弘道館に於て其會を開く。是より先き、十月三十日、以て、教育に關せる勅語の發布あり。先生深く感ずる所あり、直に筆を執り、勅語述義一巻を著はし、大に教育の存する所を發揚するに務めたり。是に至りて、先生其會に臨む毎に、必ず勅語の誦誦を爲す。

○二十四年辛卯、先生五十七歳。是歲、家藏の圖書を保存する爲め、土藏一棟を建築す。十月、本編知事石井省一郎の依頼を受け、新編常陸國誌を補正せり。原稿六十餘巻、頗る圖説ありて、未定の書なりしを、先生、更に訂正補修して、百四十餘巻となし、數月にして其功を竣はる。後數年を経て、上下二巻と爲し、活刷して世に公けにせり。

文科大學教授

○二十五年壬辰、先生五十八歳。一月、勅撰遺稿一卷、印刷成を告ぐ。二月、弘道學會に於ける勅撰の購置全く終れり。三月、小松内大臣平重盛墓所考成る。四月、丹生神社考成る。八月、大介考補遺成る。十月、勅撰遺稿印刷成り、世に行はる。此は曩に學會に於て購置せるを、遺記者の筆記せしものなり。大日本史國郡志總論より、畿内諸道、及、諸藩に至る迄悉く脱稿す。此月廿八日、文科大學教授に任じ、五級俸下賜せらる。十一月十五日、上京、小石川區、及、町五十四番地に寓居せり。廿日、高等官四等に叙せらる。十二月十二日、正六位に叙せらる。是より先き、石井知事、大木文部大臣の内命を以て、屢々先生に大學へ出仕せんことを請へり。先生、大日本史編纂の事、未だ全功を收めざるを以て、固辭して應ぜず。大臣より又これを對藩主、德川侯に懇請せり。侯は、て家令川邊善國を以て、大學へ出づるも、十分勤務の時間を省減し、敢て日本史編纂の事を請げざるの内約あるを以て、出仕せられよとの内意を傳へらる。是に於て、已むを得ず、又出て、大學教授の任に當ること、はなりしなり。

○二十六年癸巳、先生五十九歳。四月十八日、大臣官房圖書課兼勸業司を命ぜらる。圖書課一巻成る。六月、備前國高藏神社新嘗祭遺風、附、信濃普光寺神堂考一巻成る。八月廿八日、教諭用圖書檢定の勞を獲して、賞賜あり。九月十一日、國語學、國文學、國史第一講座擔任を命ぜられ、本俸二級俸を下賜せらる。此日、帝國大學令の改正あり。十一月、大日本史神祇志二十三巻上木せり。十二月、大日本史外國傳の名稱は、當時史臣の假に命じたるものにして、殊に其當を得ざるものなる由、烈公の遺意により、其名稱、順序、及、序文等、改訂の議を對藩主に呈せり。

○二十七年甲午、先生六十歳。一月、小石川區同心町十六番地に寓居を移せり。國學院の囑托により、毎月數次、同院に於て國史の講義を爲せり。二月、德川侯爵より、外國傳改訂の事に付、漢を上て内旨を候せんことを、土方宮内大臣に請へり。是れ日本史の書たる、と、勸撰に准ずべきものなれば、敢て私に改訂し難きを以てなり。其表文は、即先生の起草に依れり。五月、編纂國語考一巻成る。八月廿四日、新撰姓氏錄考證廿一巻脱稿。これ五月頃より起草、此に至りて成れるなり。此月、金百圓を陸軍、陸軍部に献納せり。十月、神の使者と云ふ事考成る。

○二十八年乙未、先生六十一歳。一月、祭禮私考一巻、活刷成る。三月、大學に於て、史料編纂の事を

擔當すべき由、井上文部大臣より内命ありしも、教授の傍に、大日本史編纂の事ありて、其暇なきを以て辭せり。四月、文明夫人(烈公の夫人にして、登美宮と稱せり)の碑文を草せり。遺稿の内命によれるなり。六月、大日本史陽志五巻、上木を告ぐ。九月十二日、本俸一級俸下賜せらる。尤仁紀童謡辭案成る。十一月、白竹齋方二氏の考證、又、遺稿明神の辨成る。十二月、國語學會の圖を編て所感を述ぶの一編、及、答問五則成る。

○二十九年丙申、先生六十二歳。一月、肺炎症に罹り、羸中に在ること三十餘日にして、全快せり。金千圓を宗家に贈り、以て祖先の祭祀料に充つ。廿一日、高等官三等に叙せらる。四月、神祇志、一名、古語拾遺、諸雜四巻脱稿。本朝通鑑辨を讀むの一巻成る。廿八日、暑休を得て歸郷。八月二日より、十二日迄、大洗に游浴し、小梅侯別荘に寓す。時に音學餘響五巻脱稿。十九日、小澤氏及、仲兄と共に、松島に遊び、跡途日光に詣り、廿八日、歸京せり。九月、大日本史外國傳を、諸藩傳と改め、其前後の順序、及、序文等を訂正して、更に新版を改刻す。事亦前に見えたり。十一月廿三日、平込區矢來町三番地山里に轉居せり。此轉居の爲め、前日より書院を悉く荷造せるを以て、先生一時展閣の便を欠しが、偶々、座右にありし姓氏錄抄と、拾芥抄、姓氏部とを比較し、之に色筆字類抄なる姓氏をも合せて、姓氏分類考を起稿せり。十二月、天朝正學一巻、活刷成る。

○三十年丁酉、先生六十三歳。一月、皇太后崩御に付、私かに感ずる所あり、神機校實一巻を著せり。二月、氏族考二巻、活刷成る。三月、迦多理許登入巻(未完)成る。四月廿七日、俸給令改正により、三級俸。六月一日、漢に恤兵部へ献金したる貨として、木正一組下賜せらる。廿一日、帝國大學を、東京帝國大學と改稱せり。此月先生、水戸弘道館なる、孔子廟の廢敗せるを慨して、一箇の意見を草し、之を水戸市の有志者に示し、其修繕を謀りしが、幾何ならずして事遂に成る。七月、常盤物語一巻、活刷成る。八月廿八日、高等官二等に叙せられ、十月三十日、正五位に遷じ。十二月、常盤尊號考一巻脱稿す。

○三十一年戊戌、先生六十四歳。二月、高良玉垂神社考證一巻成る。四月、大日本史公補遺七巻上木せり。住吉神社神代記考證一巻成る。六月廿八日、本俸二級俸下賜。七月十一日、神祇志拾遺成るを以て、天皇皇后兩陛下へ進献す。十二月、對藩主、德川侯(定公)漢書に付、其書誌、及、跋詞、撰

胃痛に罹る

「修史物語」

臨終

遺言

等を撰びて、世子に呈す、内命に因るなり。十七日、國造族類考二冊脱稿。三十一日、暑休を得て歸郷す。八月、幕訂古風土記逸文二巻上木、また、兩陛下へ進獻す。六日、那珂郡平磯町藩府の大旗一對を揮毫す。十一日、水戸を發し、勿來關平沼等の跡を探り、歸途、泉ヶ森、石名坂、太田町等を過りて、亞日家に還る。十八日より、平磯なる墨澤氏別荘に於て、十數日間、海浴を試む。其時、繪更機録三巻成り、九月五日、家に還る。七日、繪更に罹り、食氣減し、腹内不安の感あるにより、直に醫藥を服すること數日、十七日、歸京、更に長谷川醫學士(順次郎)の治療により、初めて快復せるを以て、常の如く、日々登校、教授に従事せしが、十一月六日より、右背部、腰部、右腕關節に痠痛ありて、上半身を直立し難く、晝夜二三回づゝ、膝部痠痛を起し、十二月七日、府上右側に海濱大の醫院結物現はる。此の前後、佐々木政吉、青山風通、及、ベルツ等諸博士の診察を受けしが、皆醫藥なきりと診斷せらる。是歲十月、租稅略一卷成り、更に調度略起稿二巻の半に至りて病に罹る。

○三十二年己亥、先生六十五歳。一月一日、先生快く床上に危坐し、居寐を酌み、元旦の歌を詠して、短冊に書せり。此日より勤に口授して、大日本史編修に關せる、先生事歴の請求を蒙りて、めしが、爾後二十日にして成る。名づけて修史物語と云ふ。二日、勤をして、小幡侯邸に歸り、日本史志表校訂上木等の事に關し、請ふ所あらしむ。九日に返りて、悉く其請を應じたり。之を今日より回想するに、先生謀め死後の方法を計畫せられしもの、如し。二十四日晝十二時頃、先生俄に勤を召し、勤の膝に依り、勤の手を取り、沈吟之を久ふし、時に永訣を告ぐるもの、如く、更に命じて曰く、病狀甚だ悪し、使を馳せて醫を招くべし。又、各寮に燈火を點せよと。然れども先生の狀貌、百病悉く平生に異ならず。又、苦悶の狀を見ず。勤等、尙に何の故たるを怪めり。既にして長谷川醫學士來り、直に一診、勤を別室に呼んで曰く、既に大故に迫れり。殊狀甚だ難なり。是に於て、愕然驚悚、爲ん所を知らず。先生、徐に勤に告げて曰く、余や今夜を以て永訣すべし。汝等多年奉養の勞を謝す。また、余が門人知友にも、其平素の好誼を謝せよ。大日本史志表の事は、余が宿志の存する所なり。今や悉く其上木を見ざるは、遺憾なれども、爾て命じ置きたる方法に依りて、廻地情るとなくば、必ず上木完成すべし。汝にして能く此事を成さば、余が遺言二公に報ずる所以の微衷も、初て達するを得ん。次に余の著述と遺書とは、多年の苦心に成り

文學博士の學位を受く
勅使臨邸

著書

しものなれば、決して紛亂するを勿れ。他は余が平生の庭訓に存せり。今復何をか言はん。其言辭々、今猶耳に在り。此日、文學博士の學位を受け、廿六日、高等官一等に階級、水俣一統傳下賜。從四位勳四等に叙せられ、瑞寶章を授けらる。此日、終に卒去せり。廿七日、河濱主徳川侯より幣帛料を賜はり、廿八日、午前七時、勅使侍從北條氏恭、邸に臨みて紅白の幣帛二匹を賜はる。先生の榮も亦大なりと云ふべし。此日、勤等、幣を奉じて水戸に歸り、廿一日午後二時、東京城野村六段田なる、先塋六地藏寺の境内(本堂の東地蔵堂の北)に葬る。其葬祭の式、一に昔古禮に則とる。先生、歿するの七日、若瀨主徳川侯使を以て物を贈り、病を問はしむ。先生起坐して其思を拜し、歌一章を詠じ、自ら短冊に書して、之を豐山老公に呈せり。其歌に云く、斯文の爲にと盡す、我身等は、如何て空しく、朽ち果つるべきと、嗚呼、先生の力を斯文に用ゐる、所謂鞠躬盡力、死而後已む者、豈天下後世に裨補するを無しと謂はんや。(男、勤氏)

〔栗里先生雜著〕古史六
 標註古風土記既刻合本 一
 纂訂古風土記逸文既刻二
 風土記逸文考證 八
 和名鈔郡郷考證 一八
 國造本紀考既刻 六
 封建考 一
 國造表 一
 臣連伴遺表 一
 鎌倉將軍時代の守護地頭表 一
 室町將軍時代の守護地頭表 一
 地震氣象考 一
 神祇志料既刻 一七
 神祇志料附考 一六
 神器考證既刻 一
 學之言章 四
 加多理基登 八
 新撰姓氏錄考證既刻 二二
 姓氏分類考 一
 氏族考既刻合本 二
 上古職官考 三
 中古職官考 一七
 鎌倉職官考 六
 室町職官考 七
 修史物語 二
 水府碑誌纂 四
 日本史例始考 一
 祭禮私攷既刻 二

栗田寛

神葬略説既刻	一	波夫理和附考	二	葬祭式	一
葬祭式考證	二	常陸式社考附式外社	二	水戸藩神社録	二
水戸藩神社録附録三	三	考古餘録	二	皇國乃手夫理	一
常磐物語既刻	一	音樂餘響	五	古語集	一八
神聖寶訓廣義	一	勅語述義既刻	一	勅語講義既刻	一
天朝正學既刻合本	一	文學史贅言	二	守護地頭考	二
皇統世代の數を一定すべきの議	一	古器鑑纂料	二	租稅界	一
足利時代守護地頭考	二	調府界	一	二所皇太神宮神徳考	一
禮樂畧考	一	特撰神明帳	一六	史論餘纂	八
稜威男健一名古語拾遺既刻四	四	伊勢大神宮神領考	八	修辭庵遺稿拾遺既刻	一
校補新編常陸國誌既刻合本	二	文籍考畧	一	藝文考	一
水戸人物傳	二	祝詞集釋	三	水戸藩大事記	一
大勢畧論	一	合講義抄	一	常陸番事考	一
神祇典禮考	一	雜文稿	二	栗里雜稿	一四
異教の害	一	牛欄手記	五	磯川手記	二
東京手記	六			沙史漫録	一
祝文纂	一				

春山弟彦

生歿 二四九一、仁孝、天保二年、
 二五五九、今上、明治三二年四、
 目六九

○弟彦——某
 作樹文學士

先生は、姫路の藩士なり。博覽にして強記、幼にして前田夏陸の門に入りて、國學を受け、又、時安房の塾に就いて、兵學を修む。明治の初年、藩の國學教授に擧げられ、後、大坂御成學校教師となる。後、姫路に歸り、職を姫路中學に奉ずること二十餘年、常に我が國文の口語と一致せず、國民教育に大なる障害を興ふるを憂へ、務めて官文を近づかしめんことを圖り、國語國文の改良を以て、己れが任とせり。

播磨地誌略

弟彦詠草

(以上、全書、福井久藏氏寄)

學規稿	一	大日本史音訓便箋既刻	一	詩集	二
文集	一	歌文集	二	栗里先生雜著	一五

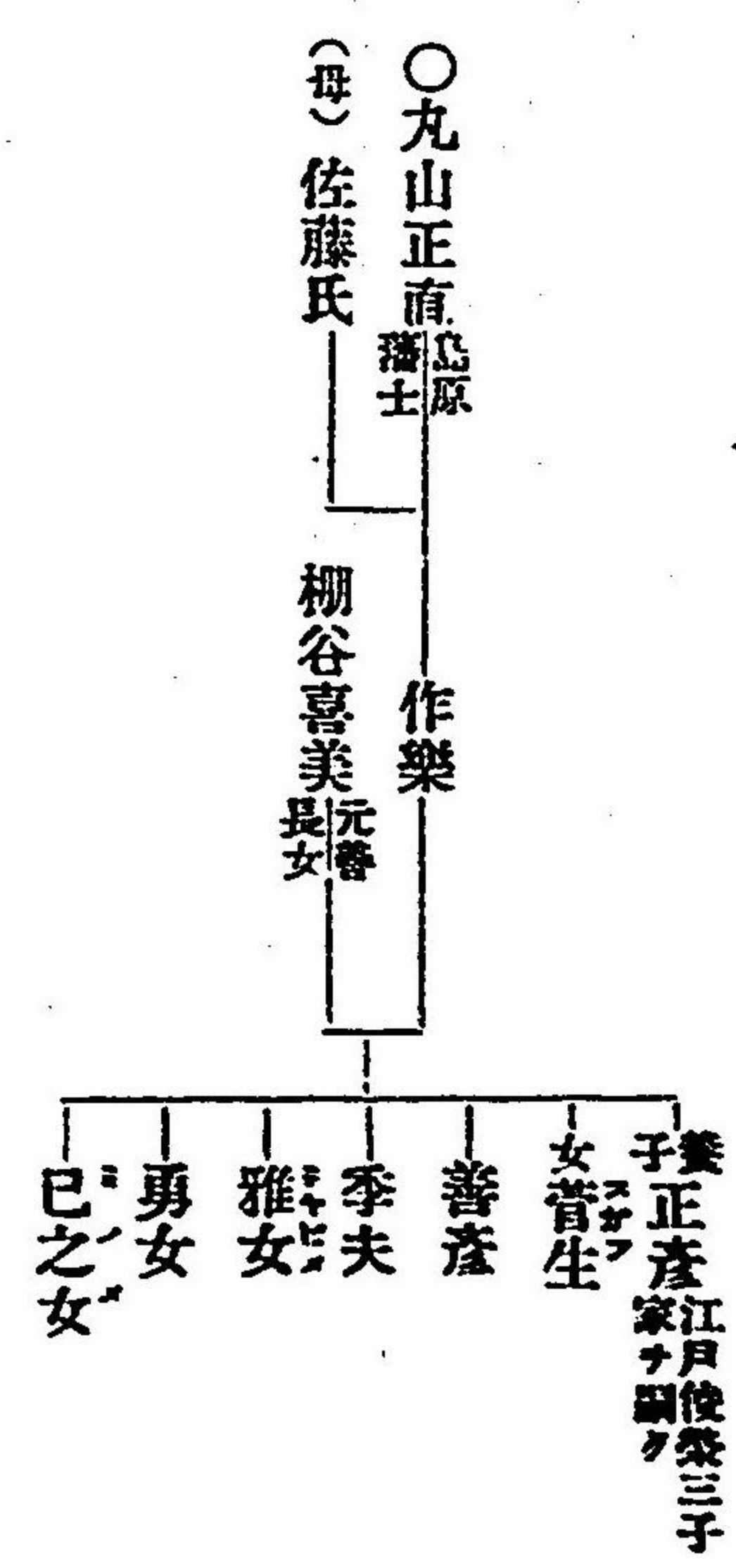
以上通計八十五部

系圖
 總叙
 著書

丸山作樂

生 歿 二五〇〇、仁 考、天保一一年一〇、三、
 二五五九、今 上、明治三二年七、一九、
 住 所 江戶芝三田四國町二丁目、
 姓 名 正虎、正路、作樂、
 安宅園素行、東華、神習處、
 之屋、清水居、

系 圖



〔祖國一〕父は肥前高來郡、若島原藩の士族にして、天保十一年庚子十月三日、武藏荏原郡江戶芝三田四國町二丁目、若島原藩の別邸に生る。祖父曾右衛門正直の第一子なり。母は佐藤氏、幼名勇太郎は、藩儒岩瀬行言先生の命ずる所なり。後、麻呂古、又は、一郡、太郎等と稱せしが、維新前の名にして、維新後、作樂と稱す。初諱は正虎、後、柳澤先生の命名にて、正路と改む。字は安宅、號は素行、

其父正直
 その幼時

平田篤胤に私淑す

洋學研究

鼓舞の志氣を鼓舞す

後、東華とも號せり。神習處は維新前、野之屋は維新後、清水居は代々木に遷居しての屋敷なり。父の父、正直は、剛勇の士なりしかど、其志を伸べ、其才を試みるべき所なかりければ、常に飲れ、酒にみひ、左に朱槍の太刀を横へ、右に酒壺を携へ、三田の藩邸を横行せり。且つ、父が二歳のとき、其母病歿し、酒と棋との外、家事を省みず。丸山の家は清貧洗ふが如くなりしかば、友人等其窮道を憐み、藩主に申すものありて、父が八九歳のとき、若御に召し出だされ、別給を賜ひしに、性敏達にして、記憶強く、一度び目を過ぎ、耳に入るものは、誦記せざることなかりければ、大に人々に賞せられぬ。されど父は聊誇る色なく、能く父と祖母とに仕へ、孝子順孫の譽、藩中に高く、慶賞を蒙れり。恩賜の米拾五俵を、授き家居に積み重ねたるとき、老いたる祖母の喜ばれし顔は、今も猶見ゆるこゝろすとは、父の昔語なり。十五歳にして、奇侠の父を失ひ、十八歳にして、また慈愛なる祖母に別れ、是れより家累なき獨立歩の身となれり。

安政元年、十五にして、漢書を若山形藩儒、岩陰連谷甲蔵に學び、同じき五年、高秋田藩士、平田篤胤の門に入りて、國書を學べり。殊に平田篤胤詩を慕ひ、詩がなせばなり、の詠を膚守とし、維新前後、勤王の事に奔走並策する所ありき。

萬延元年、櫻田事變の嫌疑を忌避せむ爲め、洋學修業として、牛田清直を作ひ、長崎に赴き、前佐賀藩士、後藤亦三郎につきて、専ら蘭書を學び、文久二年に至れり。

是より先き、藩明親館の教授たりしも、朝廷の式儀を歎き、幕府の控横を憤り、且つは、外交の弊糾、益々甚しく、遂に國家の興亡に關するを觀て、歎するも能はず、藩藩の志士と交通し、勤王の大義を唱へ、天下の士氣を鼓舞激勵する目的を以て、江戸在邸の同藩士、千賀春光等十人、及び、平田の門人數人と、京攝の間に相會せんと約し、文久三年春、九州中國を遊歴し、遂に京師に遊遊せり。會々、足利果代の木像を梟首し、若くは、高臺寺を燒燬し、其他、斬奸等、同志の行爲、其炬を燃えさせ、はいへど、其激甚なる動作は、大に幕府の威嚴を挫きしを以て、幕府の追捕嚴しかりしかば、當時、列藩中、尊攘の主動者たりし京都、木屋町なる藩邸に潜居せり。

同じき年の五月、同志を率ゐて山口に入り、馬關に於て、外敵を禦ぎ、大に勇むる所あり。毛利元龜公に謁せしに、金若干を賜はり、且つ命じ賜ふ所あり。依て全藩士、梅村守と鎮西の諸藩を遊説

丸山作樂

江戸城に放火せしむ
 義兵を大和にあげしむ
 藩に歸りて君臣の大義を説く
 殿議を案る
 新義状を復にすして五刑に罰す
 禁獄

し、勤王の氣勢を振起せり。同じき年六月、再び上京し、八月、同藩士梅村慎守、伊藤益元(益元)をして、大船渡太郎等と共に東下し、江戸木城に放火し、去りて水戸に赴き、武田精雲等の軍に、筑波山に據らしめしが翌年に五ヶ所を起したれども、利あらずして、遂に戦役せり。又七月、同藩士石川真経(真経)保母(保母)辰時(辰時)等(等)を以て、松本衛、藤木真金等と共に、中山侍従を奉じて、義兵を大和の五條に擧げしめたり。されど、これも終に事敗れて、十津川の泡ときえしは、口惜しかりき。父は甚く五士の死を悲み、九段招魂社合祭の事に力を盡し、近比菴藩地の招魂社にも、合祭の事あるを聞き、勤王の靈を慰むるに足れりとして、喜ばれき。

同じき年八月、御親征の途次、神武天皇の御陵を参拜あらせらるゝ旨を仰出され、藩主松平忠和、供奉の内命を蒙れり。依りて父は藩に歸り、君臣の大義を以てし、種々苦心策謀の末、遂に藩議を決して、藩主も旅裝を理めて、將に途に上らむとす。然るに十八日に至り、藩議一變し、毛利公勅諭を得、三條實美公等、七刑を奉じて木藩に奔ると報ずるに會ふ。是に於て父の正議を以て、任妄に涉ると爲し、遂に旅行差留の藩命あり。翌元治元年、京師に於て、長兵衛の前後、藩士と密に交通したりしかば、重ねて里外禁足の藩命ありき。

慶應元年、藩主、幕府の命に従ひ、長藩征伐の爲め、兵を費後に出さんとす。未學を、藩議を議せしかば、忽ち忌諱に觸れ、家居謹慎の殿議を受けぬ。翌二年八月、長藩の家老、松坂玄左衛門が藩議の魁首にして、専ら佐幕を主とし、幕王の正議行はれ難きを以て、遂に入藩祭の夜、之を殺害せしものあり。事情切迫するを見、謹慎の身を顧みるに暇あらず、新義書を撰へ、密に脱藩し、里見二郎と共に、筑前太宰府に到り、三條公等五刑に罰し、狀を具陳せり。三條公、其志を感賞し、新義書を賜ふ。蓋し此行、五刑の危きを以て、之を救ひまゐらせんとの心なりしも、事露はれ果さざりし。川に歸れるに、忽ち藩吏に知られ、十一月、藩獄に下さる。時に年二十七。嗚呼、藩主は實に藩の諸代たり。其藩議を動かし、勤王たらしめんとす。雖いかに、然れども、藩議のときに當り、吾が爲厚藩をして、大義分名を誤らしめざりしは、父等の風を正議を唱へ、一藩を鼓舞激勵したるもの、興かりて力なからんやば。

王政維新の際
 職
 官制改革の功
 死を誓ひて樺太に赴く
 詠詩

慶應三年、獄中にありて、先帝の崩御を傳聞し幸り、感概に堪へず。國家の危急を救はむとの念、敢し難ければ、門下中村眞金、池田正香等に書を遺りて脱藩し、藩主の親見、池田義政公に哀訴、解獄を謀らしむ。然るに天運漸く循環し、今上天皇陛下御即位あらせられ、幕府政權を率還し、王政維新の聖世となり、明治元年、七刑の一なる、澤宜嘉公は長崎藩士となりて赴任せられ、島原藩に父の解獄を命じ、且つ長崎に召され、やがて御召藩士を仰付けられ、尋て長崎の廣運館木島藩に兼教授を仰付けられぬ。是れ父が明治の御代に仕へまつれる始めにて、時に廿九歳なりき。

明治二年正月、西京に召され、岩倉公(具親)に屬し、制度取調御付けられ、五月、東京に召され、藩士を以て、神祇官兼列事を仰付けられ、六月、當官を以て、制度取調御用掛、大學校教授局兼務を仰付けられ、尋て、公議所副議長心得を仰付けられ、七月、衆議院下局次官の宣下ありき。抑々維新の創議は、曠古の大事にして、此七月にぞ官制位階を改定し、又元年に改められし行政官以下の五官を廢し、神祇、太政の二官、民部、大藏、兵部、刑部、宮内、外務の六省、待選集議の二院、大學校、理正等々を廢し、神の令制を參酌し、明治維新の制度を一定せられしに就きては、父が制度取調御用掛として、多少献替したる微功なきにあらず。猶知る人ぞおぼすらむ。同年八月、外務大丞從五位に宣下あり。官錄四百二十石を下賜せられ、本官を以て樺太出張を仰せ付けらる。此月、實を改めて北海道とし、十一ヶ國に分たれ、北方の鎮とせられ、且樺太は、露國との境界、未だ定まらず、事重大にして、その任に堪へざるを以て、辭表を捧げしかど、懸さざりしかば、即ち死を誓ひて任に赴きぬ。出發に臨み、天顏を拜し、絹一疋、綿十把、及酒肴を賜はれり。此の時、天杯は、猶今も家の寶と傳へたり。さて同行の人々は、岡本開拓列官、谷元外務權大丞、田邊外務小丞、藤大郎官、大權中郎官、兼官齋藤、上田、尼子、須賀、吉増、外務大録、大竹、川島、伊東、宮本、權大録、木多、田中、副田、少録、廣田、中村、權少録等の外、有志富永冬樹、小山進、色川團士、豊原清、高麗權之助、坂口區、川野某等四十餘人なりき。當時父の詩あり。以て其赤心を表彰せむ。

丸山作樂

瓜韶聖來向「北陳」 又 鉤陳星下使星浮。 尋摩何論經界事。 櫻花發處是神州。

幽風能開事開拓。 万里山河突顯。 尋路軍食送又迎。 青生始獲天恩。

榎太より還る

要を娶る

十年蹤跡風如風。 牛在冢中牛獄中。 最憶颯風雷雨夜。 一封奏請成功。 父は榎太にありて、經營畫策の末、華族を長官とし、宅田の法を敷き、以て皇威を輝きむと考へ、之を奏請せり。然るに東京に於て、千島榎太、交換少議起れり、濱海寺の會議に、露國公使は代價を以て購はむといひ、英國公使は露國に與ふべしと説き、西郷隆盛、及、副島種臣伯は、露國を割くを欲せず。岩倉具視公等は外難を緩くし、以て内治を先きにせむとの意ありしより、延謀遂に交換に傾く。是に於て明治三年三月、東京に召し還され、七月榎太出張を免され、出張中艱苦難動したる原を以て、金三百兩を賞賜せられたり、依て貧賤及職務を辭すること再三なりしかど、終に還されず、強ひて一級を下り、樞大丞に退せしは、一は柳原樞大丞に譲り、一は身を輕くして歸るところあらんとせしなり。

親の年の内に、とつぎわざせよと、せまれるを、いかて香まらと誓へつ、日々音にのみ、聞きし國生の、櫻花、ばるまらてこそ、われはかざいぬ。

と辭はれしかど、三輪田氏急がしつれば、國十月に結婚の式を行はれり。時に母、人、有俊雄、樹有櫻。 神州靈氣鍾結英。 梅乎幸作華王配。 幼頃江南第一名。

母嫁して後、喜美とは、兩音君と同じければ、探りありとて、宇米古と改む。其時の父が歌は、きみといへば、なめしかしこし、はしき子を、うめと名けて、さかえみましな。 然るに翌四年は、父、重讎にかゝりしを以て、母は家を修め、入獄後生れし女兒、哲生を娶ひ、艱辛苦の間、節を守り、父を追ひて、長崎に至り、遂に待救の時を待ち得て、再び梅園歌香ふ春は來れり。是も亦 天恩なりけり。

終身禁獄を申渡さる

征韓論

明治四年三月、御不審の節有之、福井藩に預られ、四日本官を免ぜられ、位記をも廢上せしめられ、翌五年四月、其方第一職掌柄と申し、精々脱離申聞等可仕答の處、不擇、朝憲、諸藩士、及び、草莽書生輩と共に、御交際差遣候事ども協議し、不存易の義全候段、重々不届に付き、除旅の上、終身禁獄申付ると、殿しき仰を蒙りぬ。 嗚呼是れ、父が第二の災厄にして、實に征韓の事を企てたるが爲め、遂に國事の重責に關れしなり。抑々、征韓の議は、曩に宗義述をして、朝鮮に大政復古を告げしめし、朝鮮は舊式に違へりとして受けず。よりて外務省より、森山茂、佐田伯牙、少録を遣し、重ねて吉岡敬殿、樞少丞を遣はされしも、要領を得ずして、還り、征韓の論漸く起れり。當時外務省は、津外務卿、寺島大輔、町田大丞、中津藩原、楠木樞大丞等は、征韓論に、森、駿島樞大丞、吉岡樞少丞、芳川、渡邊、樞少録等は、非征韓論に分れしかど、西郷隆盛以下の諸老臣も、征韓を主としたれば、廟議もや、征韓に傾き附りしなり。又、民間には諸藩の不平あり、幕政の復舊を冀ふものあり。遠都を喜ばざるものあり、薩長の隆盛を懐むものあり。火を東京に放ち、暗殺を企てむとするものあり。強ひて津外務卿を擁せむとする。父は是等の内亂を未然に征韓論に移し、鎮撫の事に力めたりしは、實に國家に盡さむとする誠意に出でたるにて、必ずしも榎太に對する意見、行はれざりし不平等より起れるにあらざるなり。しかれども、顯官の身を以て、廟議の決定をも俟たず、輕々しく浮浪の徒と取議したる原は、免れざるべし。こゝろならむ、同時に罪を犯して、事を異にするが爲め、外山光輔、愛宕通雄等は、死を賭し、而して父が死一等を減ぜられしは、状況を酌量せられたるものならむ。爾後征韓の爲め、罪を得しもの多し。父は實に其嚆矢たりき。父が當時の歌に、

八十船の、棹楫乾さず、負ぎ來し、神の御代こそ、かしこくありけれ。 古も、かゝる例は、阿利那禮の、川さかしまに、流れやはする。 思ふ事、成しもをへずば、からくにの、虎らふ神に、骨かませまし。

以て征韓の舉は、皇威を宣揚せむとの外、他志なきを知るに足らむ。さて、朝め福井藩に預けられし後、傳馬町の獄に移り判決ありて、長崎高島に移され、八年の月日を、高島の中に送りぬ。十一年十二月、特に本罪に一等を減ぜられ、十三年一月、特典を以て、放免せられ、再び世に出づるを

丸山作樂

憲法發布に際し大赦の恩命を拜す

得たるのみならず憲法發布のとき重れて大赦の恩命を拜し、復讐し、青天白日の身となり、特赦の當時如何に嬉しかりけむ。古詩一篇、以て感喜の情を述べしものあり。

紀元二千五百四十年一月七日、以待命、蒙恩赦、感喜之餘賦此。

欲、格、韓、城、虎。 欲、獻、蝦、洲、熊。 元、無、驍、臣、勇。 豈、有、阿、魯、雄。 韓、征、南、軍、一、白、馬、國、中、一、孤、島、甘、老、死。 十年、天、日、曠。 鐵、網、成、鏡、指。 韓、報、附、一、空。 豈、料、文、符、命。 今、朝、及、後、朝。 靈、喜、疑、是、夢。 若、鶴、出、樊、籠。 枯、苗、露、沛、雨。 梓、柯、仰、嘉、風。 何、以、開、報、地。 所、餘、只、丹、衷。

願、將、犬、馬、力。 要、効、螻、蟻、忠。 非、才、素、有、限。 忠、恩、浩、無、窮。 只、揮、忠、激、淚。 兼、度、律、書、章。

嗚呼、三十二歳の春より、四十一歳まで、最も有為の日月を賦中に送ることなしをば、誰か口惜しく思はざらむ。若し順道に進まば、顯要の地位に立ちて、國家の經綸をせらるべかりしを、親しく父に聞えしことありしに、父はさな言ひそ。若し賦中におらすれば、必ずや己れの首はいづれの時かとびつらむ。生命を全くせしは、實に牢獄の賜物なりと笑はれき。

明治十三年、神宮祭主宮より、神宮教務管理を依頼せらる。當時、神道事務局の祭神論につき、全國の神宮教導職中議論二派に分れて、大に紛争せしかば、父は之を慨歎し、其間に奔走盡力して、遂に調停和解せしめ、十四年、神道事務局より顧問を囑せらる。爾來、神宮の復興を期したりしも、遂に逸せざりき。

忠愛社を設け明治日報を發刊す 帝政黨を組織す

同十四年、忠愛社を創立し、之が社長となり、明治日報を發刊し、忠愛の精神を興起し、滿洲の主義を唱導せり。蓋し當時の民心荒蕪に流れ、動もすれば民主主義を唱ふるものあるを以て、同志を糾合し、此舉に出でしなり。十五年、公道會を設置し、帝政黨を組織し、欽定憲法、兩院制度、有権者等の綱領を定め、之を世に公衆宣言せり。當時世流に逆ひしを以て、世の嘲罵を買ひしも、民間の横義を抑制し、遂に憲法發布の盛典に會せしは、深く父が喜びたるころなりき。

渡米 帝室制度の制定に盡す

同十九年三月、國香助に任ぜられ、翌二十年四月、在官のまゝ、私費を以て歐米を遊歴し、二十一年六月、歸朝。七月、帝室制度取調掛を仰付けられぬ。此間、伊藤侯爵(博文)并上子爵(毅)等の諮詢に應じ、皇室典範等の制定に就きて、獻啓するところありしかと、愛ゆれど、私家公事を語らざれば、其詳しき事を知るに由なし。

貴族院議員

位階

軍事教育につくす

病歿

同二十二年四月、宮内次官吉井伯爵(友實)愛知縣に遣はされ、候に付き、履行を命ぜられき。是は皇田神宮御造營に關する要件ありしによる。皇田御改造に就ては、當時の宮内大臣伊藤侯等の熱誠なる上奏によりて成れり。父は三種の神器の一なる、御劍を祭れる所なれば、其壯觀ならむ、ことを願ひ、大に其間に立ちて盡し、は、大御神も知ろしめすらむ。

同二十三年四月、元老院議員に任ぜられ、同年十月、同院の廢止と共に、前官の葬儀となり、九月、貴族院令第一條第四項により、貴族院議員に勅任せらる。元老院議員は日淺かりしも、貴族院議員として、凡そ十年間、國家の爲め微力を盡したり。二十七年、戦役中、廣島に於て聞かれしときは、職務の廉を以て、銀杯一組を下賜はる。

位階は明治三年九月、從五位に叙せられしも、壬申の國事記にて、遷上を命ぜられ、十九年、再び正六位に叙せられ、二十三年六月、從四位に、今三十二年八月、正四位勳四等に叙せられ、旭日小綬章を賜はりき。

又、民間公共の事につきては、京城學校の創成に盡力し、學監として數年間、川上校長を輔け、總長の必要を唱導せし結果は、二十七八年の戦役に於て、やゝ之を見るを得たり。亦、體育の教はざるを憂ひ、日本體育會の副會長となり、體育の普及を獎勵し、遂に政府の補助を受くるに至りしは、父も與かりて力なきにあらずりし。惟々其完成を見る能はざりしは、遺憾なりしなるべし。且つ、道徳宗教の事は、常に心を用ひ、自ら會を興せしは、道徳會、信神學會、同進會等あり。他人の創立にかゝるものを賛成し、或は顧問となりし類は、枚舉に遑あらず。又、會社は、製糖の輸入のみに待つは、國家の利にあらずるを見、小澤男爵等と、中小坂製糖會社を起し、製糖の輸入のみに待つは、歸せり。亦た生命保險の必要を感じ、高島嘉右衛門、廣田千秋等と、淺田生命保險會社を創立し、其取締役となり居たり。

昨三十一年の冬より、腦神經衰弱症に罹られしも、床に就かぬ程なられば、今年七月末、己れは肥前平戸なる老母を歸省せしに、十五日夕より、心臓病發、肺水腫併發して、病勢一變し、十六日朝は危篤に陥り、十九日遂に死せられぬ。おのれが家に歸りしときは、早や言葉を交はるること能は

丸山作樂

一六五三

子女

ず。やがて歸幽せられしは、其に學生の遺體なり。あなめはれ、鬼神は父を奪ひて、時難き足らぬにや。九月二日に己が一人のまなごなる、松枝を請ひ去りぬ。あなめはれ、誰に向ひてか此遺骸を訴へむ。

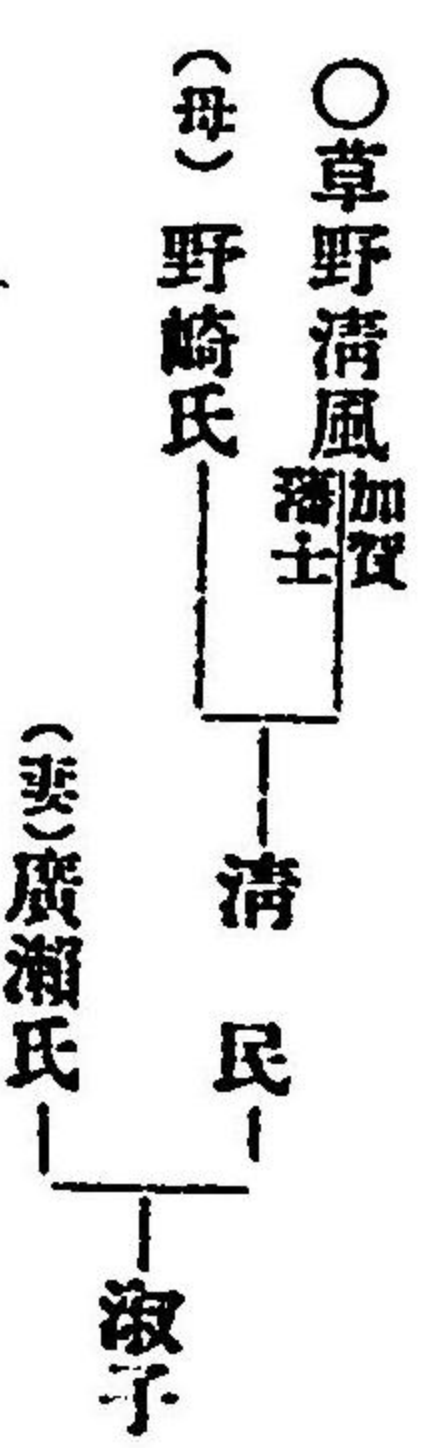
長女菅生は夭折し、今は次男善彦(十歳)三男季夫(二歳)二女雅女(十四歳)四女巳之女(七歳)あり。三女男女十三歳は、柳谷家を繼げり。正彦は若平戸藩士、江戸後榮の第三子、十九年丸山家に養はれ、嗣子となれり。

父が生存中、おのれ傳記をかゝむと思ひ立ち、梅櫻物語と題して、筆執りはじめしを、父は喜ばずして曰はく、おのれが事業中、國家を益する程の事跡なし。なまじひに世に傳へむは心苦し。やめよ。と訓せられしかば、一時中止せしを、今おもへば口惜しかりき。此巻尾に付する履歷のみは、父が自ら筆を加へ、位底深く藏め居給へり。それに、父が祖先の禮祭には、必ず参詣せられしを、書き付け置きたるものから、書き綴りて、父が友人及び、門下の人々に囁かんとす。嗚呼天下の憂に先ちて憂へ、天下の樂に後れて樂むは、父の素願なりき。然るに、先憂の極は、或は災厄に罹り、或は失敗に歸し、或は逆流に陥り、蓋棺の時まで、國家の前途を憂へ、更に後樂の期あらざりしは、遺族の残り惜しく思ふところにて、涙に筆も滞りの、莫くは、雅彦季夫は幼、論雅女男女、巳之女を養育し、諸共に父の志を繼ぎ、國家に益して、神靈を慰めつらむのみ。(以上、丸山正彦氏)

草野清民

生 二五二九、今 上、明治二年四、六、
 住 二五五九、全 上、全三二年九、一〇、三三〇。
 姓 名 金澤古寺町、**居**金澤、東京、**國**金澤市ノ南郊野田山、
 初銀太郎、後清民。

系圖



總叙

〔草野氏日本文法〕 草野文學士、名は清民、初め銀太郎と稱す。明治二年四月六日、金澤古寺町に生る。父は清風、母は野崎氏、家世々加州藩士たり。學士、性溫厚著實にして、夙に學を好み、稍長じて學を石川縣專門學校に修めしが、後發を買うて東都に出て、第一高等中學校に入り、英學の功を積みて、大學に進み、國文學科を修む。明治二十七年春、偶助腹疾を患へ、病臥數月、學を廢せしも、君既に館を捐て、慈萱園門に倚りて待つあるを以て、勉強して試問に應じ、同年七月、業を了して文學士となり、翌年三月、福岡縣立尋常中學校明善堂の聘に應じ、往いて教授を執る。教授懇到、時々として倦まず。子弟皆業を樂む。然るに往年の病根遺毒をなし、終に肺を侵し、病漸劇に堪へざるを以て、二十九年七月、職を辭して郷に歸り、靜に病を養ふ。北夜、日夜君の病を患へ、寢食俱に安からざりしが、此年冬、終に遠逝せらる。君卒業の年の一月、家難を失ひ、今亦病床悲母に對する。胸中の憂苦思ふべきなり。桑梓の地不祥にして、且、氣候陰濕、寒暖常なく、風土病氣に違せざるを以て、三十年八月、去りて播州須磨に赴き、居を二の谷の翠巖に卜し、白沙青松の間、海風松韻に心身を療養せしも、疾既に膏肓に入り、血を嘔くこと頻にして、殆ど夢を離るゝ日なく、肉落り、骨出て、神經いよゝ、敏にして、精力日に衰へ、三十二年九月十日、秋風漸く帆上におとつれんとする比、瀕焉として歿す。享年三十。室廣瀬氏、遺骨を奉じて、金澤に販り、市の南郊野田山に葬る。君一女一弟あり。女名は淑、家を嗣ぐ。尙幼なり。弟名は繁、陸軍歩兵少尉たり。

君の大學にあるや、心を木邦の語法に潛め、日夜研讀怠らず。同人目するに文法狂を以てす。君もまた私に文法學者を以て、自ら任じたりき。然るに卒業の時、一度疾を獲てより、靈湯藥に觀み遊りに不歸の重患に陥り、勤學意の加くなり。されど一日も醫典を編むの念を絶たず、病間業をとりて記する處、哀然として篋に滿つ。或は一々古書に徴して、互爾波の用例を類射し、或は勤辭の

文法狂

病歿

肺患に罹る

病を勉めて筆を執る

用法を統計して、其遷變を考察し、或は官報の布令、時流名家の文に照るまで、筆を加へ來を盡して、其誤りを指摘したるが如き、用意の周密にして、氣根の精緻なる、強辯のもの、尙ほ之を見て惶惚たりざるを得ず。しかも君、餘命の久しからずして、到底大著述を成すべしと道なきを慮り、力めて簡略に従ひ、再三稿を改めて、其完成を期せんとす。君が既するの前一月、遺稿の寫を請ふ。其寫に陥り、肋膜變え、聲嘎れ、息急にして、殆どこの世の人にあらず。仰臥したるまゝ、少しく腹を屈らし、余を顧みて曰く、今や此の如し。一日僅かに、二時間の執筆に堪へ得るのみ。此を以て文典の編述に充つ。この二時間は余の生命なり。千金も替ふる能はず。夙願以來、兄弟等に消息を遣はさるは、只此の二時間を徒消せざらんが爲のみ。請ふ恕せよと。而も天無情にして、長く此二時間をすらし、君に假さず、刪定尙半ばにして、遂に白玉樓中の人となる。歎ずるに堪ふべけんや。君や吾が遺稿を校するに方り、糊塗滿紙、雌黃縱橫の跡を見て、轉た其苦心を想ひ、悲到底効を興する能はず等の文字を、屢餘白に見る毎に、恨を吞て腹せし君が音聲、嗚咽として前に在るが如きを覺ゆ。此の小冊、もとより君が遺著として、其遺著の十一を盡すに足らず。しかも今や是を以て、君が唯一の記念として、満足せざるを得ず。吁嘆。

明治三十三年七月

井川 藤井乙男

著書

〔編者補〕 草野氏日本文法

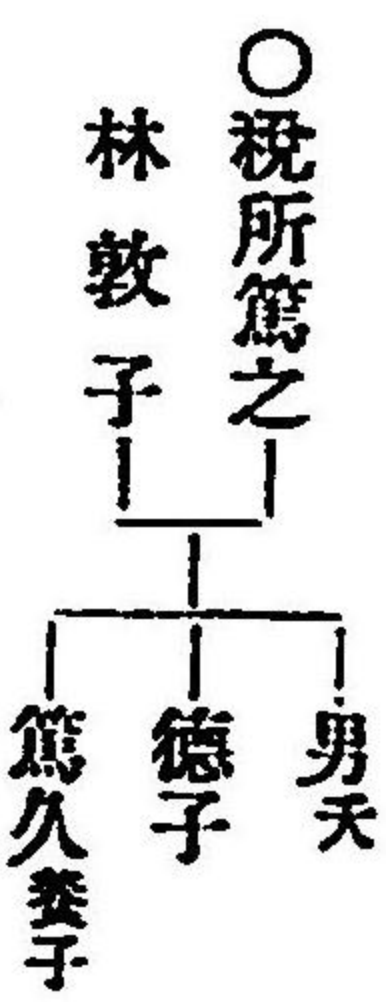
日本辭書藤井乙男共著

税所敦子

生歿 住所

生 二四八五、仁孝、文政八年三、
歿 二五六〇、今上、明治三三年二、一四、
住 京都鴨河、東錦織村、
所 九州鹿見島、東京麻生龍土、牛込砂土原町二丁目、
國 青山共

系圖



同墓地

總叙 韻語文

歌道の名人たらんとす

〔女學講義〕 夫、道の本は無始無終にして、言語心量を超し、教の源は無造無作にして、文字を編を得たり。然れども因縁感應して法界の森羅萬象となり、性氣發動して十界の言語文字と顯はる。茲に於てか無法に法を認めて、性法に背き、迷ひに墮り、無我に我を起して、其理を忘れ、情に隨ふ。遂使して十惡心に快くして日夜に造り、六度耳に造り、利那に墮り、煩惱業苦の三道は、情の端なきが如く、死生彼の輪廻の車留まることなし。茲に大達了の人あり、此輪廻の端なきを悟り、法性の源に達して、救療の法を示す。蓋し惑病千差なれば、法藥隨て万種あり。故に達人縁に從て、各々の邪土に顯れ種々の法藥を施し玉ふ。所謂神と云ひ、聖と云ひ、梵と云ひ、龍と云ひ、鬼と云ひ、佛と云ひ、菩薩と云ひ、日月星宿山神海神等の五阿僧祇の身を現し、各々の機宜に隨て無盡の法教を説けり。所謂經律、伽陀、詩歌、文章、禮樂、技藝、百技濟世利民の行業、悉く皆法性の源より流出し來れる。法界受茶の法門にあらざるはなし。故に本を擧ぎ流に執するものは、自ら是し能く非し、因果を撥無し、道徳を破壞せんと欲するに至る。若し能く本に歸り源に溯るものは、如上万種の法藥、皆是れ法界受茶所具、所流所目攝方便にあらざるはなしと述す。

茲に偉人あり。形は婦の姿にして心は大丈夫なり。人の身にして菩薩の心なり。文政八年、京都鴨川の畔り錦織の里に生れ、名を敦子と稱す。人と爲り菩薩にして、良體内に備はり、幼より特に和歌を好み、友に誘はれて近郊に遊び、遂に伴と別る。伴其去る所を知らず、父母大に驚き、之を四方に尋れ、漸く嵯峨の虚空藏尊に參詣せらる。伴を採り得て、直に携へ歸らんとせしに、肯んぜずして曰、虚空藏には能滿諸願の御誓願ありて、衆生の願ふ所、悉く成就せしめ玉ふと得く、今我身は歌道の名人たらんとすことを立願せんが爲め、父母の目を忍びて此に集る。宜しく一夜參詣して、我所

税所敦子

一六五七

千種有功に學ぶ
税所爲之に嫁す

權掌侍

願を新請することを得せしめ給へと、類りに請うて止まず。父母其志の勤かし難きを察し、遂に之を許し、傍らの民家に食事等のことを辨せしめて家に歸る。刀白時に年僅に十一なりき。茲に歌道の名家千種有功稱傳聞して大に之れを感じ、召して侍女となす。是より嗣に於て歌道を學び、漸然頭角を顯はせり。然れども猶其道に迷せざるを歎くこと深し。時に入田知紀著あり、刀白の師友たり。猶慰めて曰く、貴女の如きは實に新道の達人たりと。刀白愈々精進し、遂に曰く、遠く古の紫式部等に及ばざるを耻づと、以て其志の高尙非凡なるを知るべし。曾幾にして薩藩の土族税所爲之氏に嫁す。爲之氏特に丹精の典儀を極む。彼ら其人神坐に禱る。刀白日夕嘗て謙の誠を盡し、神佛に祈請すること切なりしと雖も、終に永別の悲みに遇へり。大て薩藩に下り、恭しく姑に事へ、沐浴着衣の事に至るまで、自ら給仕して他の手を借らず。至心に奉養すること一日の如きなり。殊に貞節の正しく操守の嚴なりしは、世上また其比を見ず。後、島津、近衛兩家の奥務となるや、常に男子に對面する、必ず少女を伴ひ、固り見ゆるを爲さず。其室の戸を開けし、震座して對面するを例とす。藩主島津齊彬公其淑徳を愛し、幼君の傳たらしむ。幾何もなくして幼君夭す。刀白慟哭殆んど死に至らんとす。久光公の息女貞子の方、左大臣近衛忠房邸に入侍するに及び、刀白、其傳女となる。五十一歳、即ち明治八年三月、宮中出仕の命降るや、刀白固く辭して受けず。然れども人皆其賢徳を惜み、主上も亦出て、任へんことを勸む。俟て遂に全六月廿三日、權掌侍に任ぜらる。長くも、兩陛下常に和歌を好ませ給ひ、日々、の御詠、刀白その御詠の榮を擔ひ、珠籠を蒙る。而して篤く三寶を信じ、故福田行波師に就て法を問ひ、後、自ら自費に佛經を誦し、十番會、婦人正法會、及び彰善會等に加入して、物品、金錢等を寄附すること、無上の樂みと爲せり。其修身、多く佛敎より來れるものにして、柔順貞操、一世に秀絶せしは、又偶然にあらざるなり。況んや男子に對するに、必ず其室を開放せしが如きは、宛然佛戒に冥合す。是れ豈俗志并難行の餘習にあらざらんや。

刀白毎朝神佛に禮拜誦經し、上は至尊を始め奉り、下は一家及び國民の幸福を祈ること、凡二時間、而して後觀音普門品を淨寫するを以て日課とせり。

雜載
さだめなき世の歌

嗚呼、生者必滅、無常誰か免るゝを得ん。本月一日、刀白例の如く疊内するや、俄に感志を感じ、病を退て醫藥を施す。然れども温度、氣脈等致て異狀なかりき。次て四日午後四時に至り、忽然として眠るが如く逝す。享年七十有六。嗚呼、悲哉、刀白一男一女あり。一男早く逝き、一女雖子雖く幼少を守り、而して曾孫萬久、其跡を繼ぐ。刀白恪勤公に奉じ、諱々として勉めて給はず。廿一年二月廿三日、從六位に叙せられ、廿六年一月、正六位に、三十年十二月廿八日、從五位に、三十三年二月四日、侍に任じ、特旨を以て位一級を進め、正五位に叙せらる。其著書若干部ありと雖も、特に上せるもの僅に二三。人の揮毫を求め、及び和歌の斧正を求むるものあれば、遂に之に應じて時を遷す。自餘種々の技藝等、達せざるもの鮮なし。刀白、毎月初め七日間、精進潔齋するを例とし、其宮中にありても、殊に精進を賜りしと云ふ。嗚呼、刀白は實に篤戒、忍等の六度波羅密精進修行の菩薩なりといふべし。

明治三十三年二月八日

〔同上〕 遺稿「さだめなき世」の末に

曾國清衆教て白す
女税所總子

母君、無下に幼きをりより、世を去り給ふまで月花をこよなうあはれがかり、はたけの葉の道は、日白のをしものより深くたしみ給へりき。さるる今年二月五日、ゆくり無くも歸らぬ道に旅立ち給ひければ、同じ道ふむ雲の上人をはじめ、知る知らぬ人々より、いたみおこせ給へる言のほの、數々、いとさばにつもれるを、同じくは、すり巻にして御靈を慰め、且つは後の世までも實としはた在りし世に親しかりし人々にも分たんに、如何に亡き魂もはえあらんと思ふを、今の世のならばし、斯かるものには、必ず名ある方々の序跋など乞ひ得て、文の光を添ふるめど、こはなき人の心おきてにもたがふわざなれば、さること、しき事はおきて、世におはしける程、斯道のみ親とたのみ聞えし高崎御歌所長の贈らせ給へる詠辭の、よく母君が経歴を述べて盡して、あますところ無く、其の人となりを世に公にせんに便りよければ、是を乞ひて序文にかへ、母が二なき友と交りし下田歌子ゆしの、手向給へる言の葉を歌にかへ、又是の名をさだめなき世とおほせつるは、登首にものしたる歌の、四の句を取りてなりけり。

池袋清風

生 歿 二五一七、孝 明、安政四年、

二五六〇、今 上、明治三三年七、二〇、四四

總 叙 清風、園案山子廼舍、松風窟、夢山、(以上、大阪朝日新聞)

京都同志社の
教授

〔大阪朝日新聞〕 桂園のかけを慕ひて、別に一家の風を興し、清新の調、雅澁の趣を、園風壇上に接にしたる。歌人池袋清風大人は、故郷なる日向國都之城の清室に高臥して、自然の興ふる美を友とし居られつるに、この月の二十日といふに、病みて逝逝られしぞ、いと惜し。享年四十四。大人は、庵を案山子廼舍といひ、松風窟てふ漢稱の下には、夢山てふ號を用ひき。京都同志社に聘せられて、専ら和歌の道を講じ、洋學書生をして、御園風に指を導かるとを得しめつるは、大人が善導、蕭陶の功績に由るもの多し。門生、天下に遍く、其數、千を以て數へつべく、文學博士大西鏡、神學博士湯淺吉郎、及び故磯貝雲峰ゆしの如きは、其俊秀とぞ傳へられぬ。大人は、自ら信じ、自ら傳ふ、行ふ所、いと篤くして、今の代の歌人の黨を組み、異を立て、異の同じきは、固執、道らざるなく、好み異れば、難許、嘲罵、悉しも假さざるが常なる、同黨、同黨の中間にたちて、超然として、時流の外にあり、唯僅かに、御歌所出仕、鎌田正夫ぬしと、金蘭の交、淡からず、互に相賞する常としたりき。大人が歌は、美を本として、情を交へ、其調の雅澁ならんには、詞の雅澁と、漢洋とを同はらず、唱和するを以て、明治の歌調とするを主張せり。外山、山、井上、巽野、二博士が、新詩を批評し、歌作したるもの、國民の友に現るゝや、大に詩界を驚かしたる事ありき。大人が見地は、ほゞこれにて窮ひ知るべし。大人また、同志社圖書館長として、書籍の檢索を謀じ、傳説引例、網羅したれば、諸君もまた、いやが上にゆたけかりしに、遊焉として遊くかへすも、惜しむべきかな。大人は、常に事を長るゝ事甚だしく、九夏三伏、なほ、衣を重ねたりしぞ、やがて短命の歿せしなりけむ。(明治三五

其歌風

年七月廿七日の同紙所載)

飯田武郷

生 歿 二四八八、仁 孝、文政一一年、

二五六一、今 上、明治三四年八、二六、四七

住 所 信濃國高島、園京、都又東京、

姓 名 守人、園武郷、

系 圖 ○武郷、永夫

學 統 元彦、服部氏

平田鏡胤、武郷

海野游翁

〔氣吹屋門人錄〕 役後門人錄

〔國文學〕 安政元年五月十九日、信州高島藩飯田守人、武郷(廿八歳)

勤王の事に盡す

讀て深く心に感ずる所があつて、それより平田萬里等が門に入つて、幕意古學を修め、又、海野游翁に就いて、和歌を學ばれたといふとてある。先生、夙に勤王の志を抱かれてあつたが、幕末安政已來、幕政紊亂し、天下何となく騒がしくなつて來た頃、先生、大に奮慨する所があつて、家を異子に譲つて、慶應三年に、京都に上られた。程なく形勢一變し、幕府倒れて、王政復古となつたから、先

池袋清風 飯田武郷

新政に献替す

文科大學講師

其散文

著書

生歿

生は、その儘、京都に止り、榎田直助、落合直亮等と、東西に奔走して、新政につきて、献替されたことが少くはなかつた。後、南都の神官の聘に應じて、古典の撰述を關かれ、ついで京都大學學務所の御用係となられたが、郷里なる高島藩、學校を設けたに就て、先生召されて、其教授となられた。後、氣比、實前、諏訪、淺間の諸社に奉仕せられ、明治九年、大教院の講師に召され、同十年、大政官、修史館に出仕せられ、同十四年八月、東京大學助教に任ぜられ、兼て修史館に編輯の事を執られ、同廿四年、慶應義塾大學教部の講師となり、同廿九年一月、帝國文藝大學講師を囑託された。その間に、皇典、譯究所、國學院、國語傳習所等の講師となり、又、大八洲學會を起し、斯道のために盡されたこと甚だ大なるものがある。明治三十三年、神宮皇學館の聘に應じて、伊勢に赴かれて、其一月、病に罹られ、二月、歸京せられたが、爾來、病勢漸く進み、惜しい哉、病に罹り、遂に不歸の客となられた。是れ實に明治三十四年八月廿六日のことである。享年七十四。

右は親しく、先生の令息たる飯田永夫氏より、聽くがまゝを記したのであるが、なほ聞く所によれば、今回新に世に公にせらるべき「日本書紀通釋」は、廿六歳の時より稿を起されたものだとのこと故、實に四十四年の長日月の苦心になつたもの、不朽の大著述といつてよからう。是に對し、先生は古典に精通されたので、兼て難古文、和歌に巧みて、他人の容易に學び得られざる風骨を存してある。

〔編者補〕日本書紀通釋 七八

中村良顯

生 二四八九、仁孝、文政一二年、
歿 二五六〇、今上、明治三三年九、一二、日七二、

住所 姓名 學統

住地 攝津國伊丹、**國**大阪東區瓦町二丁目、**國**大阪長柄八弘社、
名良顯、**號**蓼舎(蓼生園)

中村良臣
足代弘訓——中村良顯
加納諸平——

十四歳の歌

〔蓼の枯葉〕 翁年十四の時、亡き母の七回忌にあひ始めて三十一文字を詠み出でたり。是こそ明治の詞林に、異彩を放ちたる一歌人の産聲なりしか。

七とせの秋のむかしを、おもひいて、なほいつまでも、悲しかりけり。
翁、少時、伊勢の足代克居(弘訓)許を辭して、梅園、加納諸平の家の藪に、赴きしに、諸平は、良友の子なればとて、翁を視ること、なみくならず。時正に秋なりしかば、茶々亭をもかたりひて、和歌の道に舟遊す。諸平、舟中の行酒美人を指し、翁に向ひ、彼は、おかのとて、歌妓なれど、和歌も少しは詠み習へり。良顯、そこよみ、菘べんこそ、興あらめいざと、促がされ、翁は心中に、彼歌妓、何程の事かあらんと、侮りて、然らばとて、徐に題を請ひぬ。諸平、やがて、「待月」と書きて示しぬ。翁、これを思ひて、いまだ得ざるに、かの子は早くも筆をとりて、さうと、白紙に認めて、さし出したるは、

あはれしる、身かはやさしく、人なみに、待つとはいはじ、秋の夜の月。
翁一見して、歌の心のおくゆかしく、その才の優れたるに驚き、深く自ら愧らひ、是より後憤して、益々歌學に心を勵まし、終に大成を見るに至れりとぞ。(磯野秋清氏)

〔大阪朝日新聞〕 久しく關西歌壇の牛耳を執りたる、蓼舎翁は、一昨十二日午後十一時、其遺せり。享年七十二。翁は赤穂の藩士中村清左衛門の二男にして、出て、叔父良臣の家を嗣げり。良臣は水居大平の高足にして、曾て維新を攝州伊丹に下し、維新に授けられたれば、通常に膝下に侍して、講義せしが、後伊勢の足代弘訓に從ひて、學び、更に肥伊の加納諸平に就きて、歌文を修め、遺稿最も深かりき。良臣、老ゆるに及び、翁伊丹に歸りて、興風社を創め、専ら後進誘致を事とせしが、その風華

經歷

中村良顯

絶詠

に住せしは、明治十五年なりき。是より翁の名聲大に揚り、及門の士益す多く、關西の歌文をいふ者、先づ指を翁に屈す。翁頃日、骸骨上宮齋屋を患へ、往再癒えず、竟に起たざるに至りぬ。新道の爲に痛惜すべし。著す所、蓬生園歌集三卷、その他數種あり。男、其文氏嗣ぐ。翁病中小色紙に歌を書して、一門人に贈りき。思ひきや、この一首の、辭世とならんとは。

こころなく、ただにたれかは、ふみ捨てむ、散りても花は、さくらなりけり。

明後日午前八時、瓦町二町目の自宅より出棺して、長柄の入弘社に葬らんとす。遺上人、平生の交誼を以て、これが導師たらんとす。

しきしまの、道しるべせし、その人を、よそにみちびく、今日ぞ悲しき。

(以上明治三十三年九月十四日の同族所載)

雜載
山田淳子の悼文

〔蓼の枯葉〕 東高津の圓珠庵に、老が閑身を養へる山田淳子刀白は、舊會翁を悼む文一篇をよせられぬ。國文學界の爲めに翁を惜むと共に、當時の漢學文學の博識を、細にのべられたり。その文中村の翁は、我古き友がきにして同じ國の人なり。其朝京都に博覽會創設の時、高松保實親長、當時の歌人として、名聲世に鳴る。然るに保實親長は、國風社なるものを始めて設けられ、即ち、自會長として仙洞御所の御茶亭に、歌會を開かる。淳子、此亭の留守役として、六旬開つとむ、其功を以て、諸國支會の席に於ては、何處にても、其席の會長たるのゆるしを給ふ。後、故郷歸郷にかへる道すがら、浪花に立より、又所々にても、會員募集の事を命ぜらる。よりて大阪に立より、滋岡功長眞鍋豊平有賀長隣加藤祐一の諸君を訪ひ、漢の伊丹に行て、中村眞國君を訪ひ、保實親長の意を傳ふ。こゝに初て交りな結ぶ。而してより君は、終に大阪に出て、國風社の支部長として、月々和歌の會ありしも、保實親長不幸にして、早世し玉ひしより、國風社の名は、傳説者流に傳りて、振ふるはず。支會長たりし老人は、昔々過去て、今は、おのれ一人ぞ残りたる、哀れく、たゞその翁よ。君去りて誰か又、浪花に國風を興さん人やある。

〔蓼の枯葉の言葉のいろは、あせれども、世になき人と、さくぞかなしき。〕

刀白、また我朝日新聞に出したる、翁の傳記を見て、左の如く書きおくられぬ。

さてその行に、興風社とあるは、國風社の誤りなるべし。これは伊丹にておこせしにはあらず。

著書

〔編者補〕 蓬生園歌集三

(明治三十三年九月十七、八日大阪朝日新聞所載)

竹村 鍛

生歿

二五二五、孝、明、慶應元年一一、

總叙

二五六一、今、上、明治三四年二、一、 三三七、

〔松窓餘韻〕 中兄、名を壽三郎というて、鍛は名のりてある。慶應元年十一月、伊豫松山坊主町に

前條にのぶるが如く、高松藩の能しによりて、淳子が中立したるなり。しかして前條の人々、月にも會長のうちなり。右は知る人まれなり。感にうたれて、昔を忍ぶなり。

かの傳略は、實に予がものしたるにて、伊丹における興風社の創立はその社置に興りし野田安貞ぬしよりききて、編次したれば、誤りにほあらぬ筈なり。野田社には、小四葉泰が幹事たりき。かく興風と國風と、國音相近ければ、或は、刀白が思ひ違へられしにあらざるか。結く剛毅とも記しおきつ。

◎翁の病床にありしや、四方より教正を請はん爲に、多くの詠神をおこせられたれば、翁は、神風しな病にさばりやせむ。とて押止めければ、翁はいとわびしげに、くちずさみしは、

わけなれしふみの林を、よそにして、こゝろの遊ぶ、花そのぞなき。

さもありけむいとも悲しくこそ。

◎寂運上人は、古くより翁と交ひ深かり。上人、おのれに語りていふ。翁は、學問において、一方に偏らず、神典を講ずる傍に、佛敎の眞理を極め、又時として、耶穌敎主義の學校に講義する事もありき。その談博、想ふべしと。(磯野秋清氏)

中村良顯 竹村鍛

松窓と號す

大學振科に入る

日本辭書を大成せんとす

生れた。父の後妻の長子であつたので、母方の絶えた家を繼いで、竹村家を起すことになつた。子供の時は、並外れた多辨者であつたといふことであるが、五歳時分から、どういふ原因であつたか、非常な吃りになつた。が、明治十八年の三月、上京して後、其吃りが段々治つて、さまで耳立たぬやうになつたといふことは、親戚故舊の常に一奇とするところである。幼ない時から、手先が器用で、綿密で、文人書を習うたり、字を書くこともすきであつた。父が漢學者であつたから、自然漢書は相應に讀むことが出来た。年長じてからは、松窓といふ雅號を父につけて買つて、詩を作つた。文を書きもした。この遺稿中の詩は、多く當時に出来たものであらう。二十一歳の春、上京して、斯文堂に入學した。それは漢學を専修する意向であつたであらうが、當時は洋學の盛んに流行して居つた際であつたから、直に斯文堂を辭して、青山英和學校に轉學した。學問の方向をかへることに就て、再三、父との往復があつたやうに記憶する。其後、大學選科にはいつて、國文學を研究するやうになつた。兄は前にもいふ通り、綿密な細心な男で、何事をするにも、よく前後左右の關係を考へなければ、若手しなかつたから、其目的の漢學より英學に轉じ、又た國文學に轉ずるまでには、種々焦心苦慮したのであつた。だから晩學にも關らず、幸ひにも年二十七で順當に其業を卒ることが出来た。始めて神戸尋常師範學校に奉職して、其年結婚した。神戸に居ること四年、東京府立尋常中學校に轉じ、後高等女子師範學校に教授となつた。明治三十三年十二月、歸郷して再び起らず、翌三十四年二月一日、享年三十七で永逝した。一女二男の忘れがたみがある。右は兄の履歷を界叙したのであるが、不幸短命に終つたとはいへ、世間の多くの人に較ぶれば、寧ろ幸運な人であつた。それは其性質が然らしめたものであらうけれども、學校を卒業する、直に職を得る、其職も次第に果進する、世間の風波と戦ふといふやうなことの無かつたのは、寧ろ幸運でなければならぬ。

日本に完全な字書のないといふことは、かねて言つて居つた事であつたが、遂に自ら其字書を作るといふことを、終生の目的とするやうになつたが、未だ其緒にも就かないで終つたのは、兄の千古の恨みであらうと思ふ。

兄は細心であつたのみならず、非常な潔癖であつた。食物、日用の用品に限らず、親戚故舊にも、

橋村淳風

生 歿
住 所
姓 名

生 二四九四、仁 孝、天保五年一二、二四、
歿 二五六一、今 上、明治三四年三、二、日六八、
生地 伊勢國山田常磐町醫山田常磐町、
編輯 初天五郎、後彈正、淳風、

すきときらひがあつて、人と交際する上にも、其潔癖を忘れることが出来なかつた。が、權利義務を重んずることは、常人に過ぎて居つて、必ずしも其潔癖に片よらなかつたかとも思はれる。西洋の書物を讀出してから、非常な西洋好きになつて、衣服食物は固より、兼作進退のことまで、常に日本の習慣を厭うて居た。若し兄に巨萬の富を有せしめたり、家設庭園日用の家具まで、悉らく西洋風に換したであらう。

元來脆弱な生れて、子供の時から大人扱つて居たといふことであるが、子供を持つやうになつて後は、尙更老人めいた。それで衛生のことには殊に注意して、家室尤も其方面に嚴しかつたといふことである。子の如きも、いつも兄の家で飯を食ふたび、其飯の殆ど割に類するものに置くほどであつた。

兄の遺稿を編まれるといふこととて、昔を想ひ出し、一二の事をかきつけて見た。

明治三十六年一月四日 末弟 康正

氏の親友、芳賀博士、氏の遺稿、學餘漫吟、ゆめ物語、日本辭書の評論の三編を、集めて「松窓餘韻」と題して刊行せり。

橋村淳風

一六六七

學統

足代弘訓

中島廣足

井上文雄

八田知紀

總叙

橋村淳風——堤盛言

新は、天村靈命の後裔、豐受大神宮權禰宜、度會國正神主橋村氏、七代、正五位下度會正神主五男、從五位下度會正神主、長中別家をなす、其九代の孫なり、實は豐受大神宮、一編宜從三位、度會常呂神主、十七世の孫、正神主、橋村氏の養子となり、彈正と稱し、同宮權禰宜、大物忌父從四位上たり、而して正神主、二男三女を生む、新は長男にして、天保五年十二月廿四日、伊勢山田宮常樂町に生る、幼名を天五郎といひ、後、彈正と改む、四歳の時、父を喪ひ、母岩崎氏に養はる、性實温厚にして、孝心深く、博愛の志厚かりき、天保七年、同宮權禰宜に任ぜられ、正六位上に叙せらる、尋いで從五位下に叙せられ、果進して明治元年八月廿七日、正四位下に叙せらる、同四年七月、神宮御女正によりて、職務を免ぜられ、位記返上す、同年同月、皇大神宮主典に任ぜられ、從八位に叙せらる、同五年二月、職務を免ぜらる、十四歳にして、足代弘訓の門に入る、病足なる故に、進學すること難はす、多くは文通を以て、教授を受たり、其後、中島廣足、井上文雄、八田知紀等を師友として、家書を撰す、皆久しからず、其志す所、皇朝學の遺典を極むるに在りて、日夜勤勵す、二十歳の時、道に學を憂ひ、専ら歌を詠む、これ即素志には非ず、醫師の勤學を榮せし故なり、然れども博愛の心にして、古事記、万葉集を始め、古歌を略讀せり、明治二十三年一月、歌御會始御座、寄國祝の歌、詠進せしが、振歌に預り、御前に於て披講の榮を蒙る、其先、常呂神主は、玉葉集、續後拾遺集の作者にして、新も亦、勅撰に預る、實に名譽といふべし、廿四年五月、上京して、毛判元德公、東久世通暲伯を始め、貴族の殊遇を受け、數月を経て歸郷す、之によりて、新の名聲、大に揚り、門に入る士女、益多く、數百人に及び、近來關西の歌文をいふもの、先づ指を新に屈す、殊に長歌に秀づ、并て木原豐顯、大入評して曰く、方今皇國の歌人中、長歌に最巧妙なるは、新と中村貞顯とのみなりと、新七歳の時、

病歿

詠歌

り、左足に腫物を生じ、全癒せず、折々痛を生ぜしが、昨冬、痲疾大に再發して、大坐となり、漸次衰弱を増し、且つ腫物を發し、藥石効を奏せず、遂に三十四年三月二日、午前十一時死亡せらる、享年六十八、同月五日、神葬を以て山田常樂町の墓所にをさむ、著す所、古登竹岐の屋集、其後數種あり、其二男四女を生む、長男長女早世す、次男を正源といふ、即家を繼ぐ、今年僅に十三歳たり、新の書々おかれたるもの、中に、

正四位下の位記を返上せし時
位山のぼることこそ、かたからめ、かくてわが身は、くだらずもがな。

足さへも、人なみなならぬ、わが身かな、うべおくれけり、しきしまの道。
をさな子の、むなさきすぎむ、八束ひげ、みぬまは我身、此世にもがな。

寄國祝の歌、預撰になりしかば、御歌所長、高時正風禰のものと、よみてつかはしける。

吹風の、さそはざりせば、雲の上に、ふせやのけぶり、たらはのぼらじ。

みれ近く、のほりくし、しての山、たれかこゆるを、ゆるさやりけむ。
ならはれば、行へもしらぬ、しての山、もとの道にぞ、立かへりこし。

右、大八洲雜誌百七十九に掲載せし所、柳原譯あれば、此度、度會氏系圖を以て、家系の條、訂正を圖へたり。

明治三十七年五月三十日

〔編者云〕右の傳記は、宇治山田町長、坂本隆藏氏が、特に堤盛言氏に囑して、調査せしめて、寄送せられしなり。

〔編者補〕古登竹岐の舎集

橋村淳風

高橋千川附清義

生歿

生 二四八七、仁孝、文政一〇年、
歿 二五六二、今上、明治三五年三、一九、
四七六、

住所

出雲國簸川郡國富村

系圖

○義仁——義長——清義——千川——伊岐夫——龍雄

實性
終生の著述

父清義老いて子なきを憂ひ、出雲大社に祈りて千川を生む。この故に幼より敬神の念厚く、かれて家學を興さん事を誓ふ。年十二にして父に別れ、寧ろ其遺書によりて國學す。師事せしは、唯、野々口隆正の來遊せる折に實議せしのみ。長じて大社教の爲めに盡し、國造の寵を得、その社に任官を勤められしかど、母の老いたる故を以て固辭して行かず。家におりて門弟信徒を集め、三神講を創立し、一時、雲州十郡を風靡せり。後、寧ろ郡武自神社に奉仕して、神道のために盡せり。嘗て維新の當初、國守より囑托を受けて、長崎人切支丹宗教の脱離役をなし、盡く之を改心せしめぬ。晩年、郷里の小學校教員等を集めて、和文和歌を講ずることを樂みとす。明治三十五年三月十九日卒す。享年七十六。千川の名は藤原百川に私淑し、敬神愛國の至誠を、發揮せんと力めたるに由る。性磊落、雄辯流るゝが如く、一面には當時の皇學者として、教育ある人に知られ、一面には教職として信徒の間に尊ばれぬ。千川、終生の著作は、古事記と日本書紀との記事の相違せるものを、實事實として、その間に一の連鎖を發見せんとしたるにあり、されど身を教界に置くに至りて、餘暇を得ず、其遺稿、僅に斷簡零墨を残すのみ。その遺稿の世に傳はるもの多し。後、門弟信徒、その徳を追慕して、放伏山下に碑を建つ。撰文は東宮侍讀木居豐顯なり。蓋し千川の父、清義が、後、前門下の高足として、本居の學統を傳へたるによる。子伊岐夫、家に在りて家學を傳ふ。

清義

清義の祖父、義仁、叔父、利馬、父、義長、皆代々醫を業とし、兼ねて國學に志せり。清義も、其家傳に生れ、また、夙に國學を勵めり。されど、寛政六年、即ち二十二歳の時、父に別れ、かつ家費にしてその志を得ず。三十三歳の時、初めて梓葉なる梅舎大人千家俊信に學び、その高弟となる。文化の頃、神學修行と稱して、屢京都伊勢、但馬、大坂、淡路の間を往還し、所々に神代卷、及び、源朝勢、源朝等、其の淡路にある時、洲木なる惠比須屋の一女を娶りて妻とす。その女、頗る和歌三絃に長じ、また、家政に力め、真人をして、貧苦の中に十分讀書に就る餘暇を興へしめぬ。清義、晩年、書に淫し、其書、其れず、寧ろ筆硯を友とし、遂に衰心するに至る。天保九年卒す。年六十七。遺著として、多年著述の草稿を、共に地下に葬らしむ。今、残れるもの、僅に、忠突竹、隨筆なり。俊信翁の遺著多し。源氏物語、源氏物語(少)露卷迄、萬葉註釋、萬葉地名笈、和漢朗詠集註抄、三絃抄等の斷片あるのみ。書寫せし書、萬葉集全部を始め、百餘冊、今なほ家に蔵す。清義の最も得意とせるは、源氏の源氏物語なり。京坂の人、稱して出雲の源氏男といへりとぞ。また、管絃に巧なり。遺子、千川、その遺書によりて家名を傳へ、孫伊岐夫、曾孫、龍雄、皆その家學を繼ぎて今に至る。(以上、全篇、高橋龍雄氏、寄)

中島歌子

生歿

生 二五〇一、仁孝、天保一二年、
歿 二五六三、今上、明治三六年、二三〇、
四六二、

雜載

〔讀賣新聞〕 師の數島の道に到り深く、御國振の物學びに、文の林の奥がを極めたまひ、道に御位さへ得させたまへる御勳は、今取出て、何をこらたくいはむ。
此春の淡雪と共に、はかなく消えさせたまひしを、世の中舉りて、一つ心に惜しみ思へるは、春の花に盛り、少なく、秋の月に霞の隔ある例も、物の數ならじを、老朽ち給へりとしも、あらずして、い

高橋千川附清義 中島歌子

かさまにと計り惑はるる中に、若竹の光そひし、去年の臘撰をしのび、千かぬる神の涙には、いつも笑ましげに、教へさせたまひし御面影をぞ思ひうかぶ。かくて夏さり秋ふけて、昨日十月三十日といふに、星が岡の茶寮に追悼會を開き、たまあへる迷の圖解のいとおごそかに、晴じう、雲散はるけき御方々の御跡をさへ、下したまへる上に、一片の紙に、水ぐきの跡したはせたまへる、島榮子の君教をうけしと、しのびたまへる直大の君、東久世、佐々木伯などの、こはことに當をしのびて、のたまへる御歌ども、いとあはれ深かりき。下田歌子、刀白の、萩の花見て、ともに夜を明し給ひしなどある御歌には、其昔、同じ千派の門にありて、師は姉弟子にて、いと睦まじうせまされたまひきと聞けば、其頃の事や思ひ出たまひけむ。いとゆかしきにつけても、此刀白の、いつしすくやかにましますを、せめて心づよくおほゆ、井上頼四の大人の、母君と睦まじかりければ、母を懐ふに變らじと戀聞えたまへる御歌など、いづれも涙の種ならぬはなし、三田藤光の大人の、今の事を忘るゝ老の身にも、忘れがたきはなごのたまはせたるも、嬉しかりき。小島榮大人の、ちりちりに成し、ゆかりの色みても、散にし萩をしのぶなどの、たまはせたるは、あまりに情なくおほえて、いてや、主なき萩園も、友垣の結び目かたからんには、いかで、ちりちりになど、一人ひそかになつぐむさまや、いかに人の可笑しと見けんよ。かく遂にたまあへるどちの、徒に多きを求めれば、晴じうかたり合せる百人餘りの中にも、師のまことの心さまを知らぬ人も多かりき。晴初年、住谷兄弟の親の敵うちしは、久しう庇護うけし師の力により、本望とげたる千派岡門の、伊東大人の、國家の爲に一命かけて旅立たまひし時、内願の憂なからしめんとして、家裏七人を、女の手に引うけ、年久しう片田舎に世をしのばせて養ひたる、櫻田の孝徳に、夫林忠左衛門の、下関に身をやつして、血しほしたる屍を拾めに行かれしなど、物の背にも驚く十七人の乙女、遊りにて、大方の人のなし得べき事ならんや、などの物語どもに、人々の驚きて、われはたゞ文才盡れ、手跡のめてたく、他に類なくおほえしきをこそしたまひつれ。たゞ女性らしく、つとまじうしとやかに見えしものを、男も及ばぬ、健勇をかれたまひし人さま、成しかなと、舌を巻いて耳新らしう聞たまへるもありき。樓にまつれる大なる肖像の下に、板の袖うつくしう、かしづける乙女子の、しほたれて見ゆるに、けふの時雨も心ありげにて、下座敷には、島直大の君の教への子供は、

へども、御聲聞ぬが悲しかりけり、とうたひ出たまへるを、某の薩摩の國振とて、まねびふしをかしく大聲に、あまたさび、うたひ上げたるに、とゞめもあへず、人々くつがへりわらへるにつけても、げに其御聲の聞てしかな、このさまをも見せてしかな、か計り人に、甚はれたまひし御聲の、嬉しさよ。去るは疎き世のならひをよそに、御教うけし人々の心の嬉しさよ。とおもひつと、なほ、ふと、こぼるゝはあだに過にし身のおこたりを、悔ゆる涙もふりそふなるべし。

いか計り、嬉しがるらん、今日の目を、御年賀の、むしるなりせば。

ありしよを、しのおまどぬの、歌むしる、うれしきものよ、かなしかりけり。

合果て家にかへり、更けたる燈のもとにて、

(参照) 加藤千派條下——一五一三頁。

三宅龍子しるす

吉野義卷

生歿 二五〇四、仁孝、弘化元年
 二五六三、今上、明治三十六年四三〇、**圖六〇**。
 住所 千葉縣夷隅郡上野村名木細殿**圖同上**。
 姓名 通稱 平十郎、**義卷**、千本の屋、樓月。



學統

總叙

國典平田鏡胤
歌 加藤千浪
香 澤雪城
—吉野義卷

後室子孫本家
—源一郎

書法

題經

絶詠

(參照) 加藤千浪傳下—一五一—三頁
翁は千葉縣夷隅郡上野村名木細殿の人、姓は吉野氏、名は鏡胤、千木の屋と號す。其師千浪翁の末くる所なり。又梅月と號す。御木忌部八十二代の裔なり。十八歳にして父を喪ひ、爾來の命によりて、父の職を襲いて、名主となる。世々豪士として扱はれ、給入格を仰る。併せて十二人扶持を給ふ。尋いて江戸に來り、加藤千浪翁に就て、邦和歌を研究し、又平田鏡胤翁に從ひ、國典を學べり。當時知名の歌人、中島歌子、伊東祐命等は、皆其同窓の友たりき。
曾て二十歳の頃、藩主大岡侯、領地の變更を命ぜらるゝや、村民を代表して、屢々幕府に嘆願し、本の如くならんとを請ひ、遂に獄に下さる。當時、千浪翁の慰諭の歌あり。
初め書道を澤雪城に學び、後専ら、千浪の書風に入り、晩に諸家の筆道を融合して、一家の風をなせり。
人と爲り、沈重寡言、苟も動かさず。常に子孫を訓ふるに、息室の尊嚴を以てせり。これ其學風之餘らしむる所なり。晩年、意を政海に經ち、實業の興廢に志し、勝浦商業銀行を設立し、専ら新業に力を効し、が業牛にして没す。實に明治三十六年四月三十日なり。享年六十歳。其別業は、自ら書つべからざるを知り、書止むるをさかず、理髮師を呼びて、鬚髮を剃らしめ、又人をして全身を清拭せしむると、その幾回なるをしらず。没する前一日、男體をして諸豪の遊藝場、瀟湘の上高宗封事を朗誦せしむると、數次、終りて、盛を顧みて曰く、暫らく睡臥せん、静かなれと、又覺めて曰く、和歌を詠ぜん、これ予が志なりと、沈吟數刻、やがて筆を執らしむ。其詠に曰く。

雜載

散りのこる、花をとふより、なかなかに、やまひの床に、臥すぞやすけき。
盛、即、和していふ。

よしの山、花のさかりを、見し人の、ことばは世々の、香に、ほふらむ。
明日、濤焉として、逝く。すなはち、神舞を以て、木郎中先登の次に、舞る。墓標に「御木忌部八十二代、吉野義卷之墓」と刻す。これ生前自ら記し置けるなり。(吉野盛氏談)

○吉野義卷が、もとの領主(大岡侯)のもとにあらんとをねがひ、文にかきて、爲き舞あたりまで、出しけれど、かなはて故郷にかへる。鳥のはなむけすとて、其むしるにて書きつるなり。(千浪)

別れゆく、今のつらさを、うれしさに、かたりあはせむ、時なからめや。
思ふ事、よしならずとも、いへのかぜ、かぐはしき名を、ふきも傳へむ。
ふるさとへ、いそぐ思ひは、嬉しくて、ぬらしてかへる、袖ぞしらぬ。
うき世ぞと、君あきらめて、今よりは、こゝろしづかに、月はなを見よ。
眞ごころの、とほらぬ香も、よしやよし、巻ひめおきて、時をまたなむ。
梓弓、いつかはとけむ、ひとぢすの、矢たけこゝろは、いほもとほせば。
いつまでか、思ひしづまむ、あすか川、やがて嬉しき、瀬にかへる世を。

(以下略す)

國典翁の記

○國典翁記

天が下の愁は、凶穢にますものなし。木の皮、草の根を喰て、命をかけとむるたぐひもあるを、さる事のありとも、心づかぬおろか人も多かるを、そを咎むとも、かひなきわなればとて、さやうの新のたすけにもと、年々に、いつのたなつものを、蓄ひおきて、人々にめぐまんと、この土倉をたてしとぞ、あな、おむかし、人の心や、あな、とよとき人のめぐみやとて、かくなづけたるは、そのもとかたければ、民やすしといひけむ、心ばえなれど、猶、困窮、貧乏など、かたぶく人もあらむか。かくいとなみたてしは、我門にこと問ひする、上つふさの國、夷隅郡、植野の里人、吉野平十郎、義卷、其こと、のよし、かいつくるは、東京の野史、藤原千浪なり。(以上、吉野盛氏談)

吉野義卷

一六七五

著書

〔編者補〕千本のかげ 五

加藤千浪翁全集

内藤恥叟

生歿

生 二四八五、光格 文政八年、

歿 二五六三、今上、明治三六年六、七、 四七七、

生所 水戸、**國**水戸、東京、**國**東京上野谷中、

名 正直、恥叟、**國**碧海、

姓

〔讀賣新聞〕十五歳、弘道館の學生となり、業を會澤正志、藤田東湖、國友魯庵等に受け、特に會澤氏に師事す。

住

弘化三年、百五十石の禄を讓ひて、小十人組となり、先手物頭格、軍用儀、海防物頭等を勤む。

経

同 六年、藩により、隨筆隱居を命ぜらる。

歴

元治元年九月、武田伊賀守等數百人、湊水に屯集し、幕府の之を征伐するや、討を召して其軍事に従はしむ。此月、隨筆隱居を解かれ、賊徒追討の命を受け、湊、太田の諸處に轉戦する事、數回。

授應元年、弘道館教授を兼ね。

同 二年十一月、小石川の藩邸に召され、家老鈴木石見守と議論合はず、捕へられて水戸に送られ、評定所の獄に投ぜらる。

明治元年三月、出獄。四月、更に贅居を命ぜらる。五月、藩を去て、東奥の各地に潜伏すると數年、苦楚に至らざるなし。

同 三年十月、桑折に於て、山形の小桑事として、同地に赴任する知人に會し、其跡によりて、共に

著書

山形に行く。

同 三年、山形縣史生に任ず。

同 十一年、小石川區長に任ぜらる。

同 十四年、群馬縣中學校長に任ぜらる。

同 廿二年十二月、陸軍教授に任ぜられ、新文學會、皇典講究所等の諸學校、學會の校長、教授、顧問となる。

同 卅二年、職を辭し、宮内省の囑托を受け、久遠宮家の御事蹟の取調に従ひ、餘暇を以て、力を著述に致す。

同 卅六年五月三十一日、病革る。後特許を以て正六位に叙せらる。六月七日夜、病歿。同日、葬儀を以て、谷中墓地に葬る。門下生數百名、徒歩會葬す。

論、徳川時代の事情に精通し、法律文學、知らざるなく、特に強混絶倫にして、將軍家入典の年月日は更なり、供奉の人名等、悉く暗誦せり。

論、終生の力を、徳川時代の制度文學に、致し、凡そ徳川氏に關する者にして、眼に觸るゝあらば、新片零墨と雖、必之が收拾に怠ることなく、時に煉瓦の一室を構へて、之を藏し、世の學者にして、斯の文庫に依りて、得る所ありしも、夥からざりき。

〔同上〕安政紀事

江戸文學志略

徳川十五代史

國體發揮徳川政度

徳川氏施政大意

徳川氏貨幣制度

折たく柴の記標註

日本文庫

温知叢書

落合直文

生歿 二五二一、孝明、文久元年一二、五、
因 二五六三、今上、明治三十六年一二、一六、 四三三、

生地 仙臺松岩、邸、居、東京、國赤坂區青山墓地、
本姓 鮎貝氏、**鮎名**龜次郎、盛光、國萩の家、
○鮎貝盛房——盛徳



(以上、莫告、七)

總叙

堀秀成に學ぶ

〔莫告、七〕嗚呼わが萩國家先生、宿願遂に達せずして、客臘十六日午前八時二十分、白玉棺中の
人となり給ひぬ。嗚呼悲しき哉。
先生は、舊仙臺藩主、伊達家の門閥鮎貝盛房の次男。實に文久元年十二月五日、その松岩の邸に
々の聲を擧げ給へり。幼名を龜次郎盛光といひ、後、直文と改め給ひぬ。十四歳にして、國學者落合
直亮先生に養はれて、その薫陶を受け給ひし。これぞ、先生が、後年、この道に名を成し給ふ素因に
ばありける。十七歳の時、養父に従ひて、伊勢神宮本教館に學び給ひ、特に、同館の教授にして、當時、
國語學の大家として、その名高かりし堀秀成翁の門弟となり、最も、翁に寵愛せられ給ひし。先生

大學古典科に
入る

大に國語教育
に盡す

雜載

が國語學上の造詣深かりしは、この時代に終焉せられしに因り。ことに、歌文に於ては、この頃
より、豁然頭角をあらはして、歌合に、百首合に、數讀みに、奇思妙想、いつし、教授の諸大家を驚かし
給ひきと。かくて、十八歳まで、こゝにありて學び給ひしが、この歳、本教館解散せしむるに、東京に
出て給へり。この時の紀行文ありて、「村雨日記」といふ。東京に出て、は、故内藤駒堂翁の門に入り
て、漢籍を修め給ひき。されば、翁が授せらるゝまで、厚く弟子の禮をとり給ひき。明治十五年、東京
大學古典科に入り、僅に、一年にして、徹せられて兵役に服し給ふこと二年。この服役中、その餘暇
を以て、よく苦學奮勵、學、大に進みぬ。
當時、國語國文の學未だ、甚だ、幼稚にして、振はず。世人、皆、これを、無用の閑事視するの觀あり。先生、
いたくこれを憤慨せられ、小中村義象氏等と共に、國語國文の學識にすべからざることを、或は
新聞雜誌に、或は公開の席上に、大に稱道せられしかば、世人の迷夢も、漸く覺醒せらるゝに、遂に
り。今日、國語國文科が、普通教育にありて、有用なる學科となれるは、余く、先生の力多きに在り。
明治廿一年、國學院の設立あり。先生もその議に參し、國文教師を囑託せられ、總て、四十二年
九月、第一高等學校の講師を囑託せられ給ひしより、長く、こゝに教鞭をとりて、専ら、學生の進歩
に盡力し給ひしが、なほ一方には、國語傳習所を創立し、所長として、これを主宰し、又、國學院に、新
見女學校に、帝國教育會に、東京文學院に、外國語學校に、第五臨時教員養成所に、明治大學に、法學
院大學に、講師として、國語教育の爲めに、盡されしこと、枚舉にいとまゐらず。先生は、かく、諸學校
の講師として、國語教育の爲めに、偉功ありしのみならず、更に、一方には、文學、ことに、文章詩歌のた
めに、大に、新趣味の鼓吹を勉め、熱誠なる主張、清新なる作物を、新聞雜誌に發表して、わが美文體
文の革新を計り給ひき。
〔萩の家追悼録〕 落合君を始めて知りましたのは、明治十二年の九月でありました。伊勢
の神宮教院での事でした。其頃は、落合龜次郎といふて、雅名は盛光と申されました。その頃より
大變に歌がすきて、且つ上手であつて、それについて大變に益を得た事があります。十三年の頃
であつたらう、落合君は神宮教の院費を以て、東京へ遊學に來られた事があります。さうして、内
藤耻叟先生の門人になられたとおもひます。夫から凡そ一年計りを経まして、神宮教院は、講院

落合直文

一六七九

神祇官復興の
建議

に爲りました。依つて私も東京へ上つて参りまして、落合君を尋ねて、日比谷の神宮教會所の中
に同宿して居りました。其頃はまあ非常な困難な事でありまして、飯もうま／＼と食へなかつ
たのです。しかし、落合君は相變らず歌を讀んだり、勉強したりして居りました。このころ一つ
面白い事がある。夫は神祇官の復興を政府に建議しようとはないかといふことを思出して、其建
議を致したのであります。之は其前に伊勢に居る時分に、こゝに居らるゝ青戸さんや、其外の道
中と建議書を政府に出したことがあります。其餘編が未だ聞かぬものでもあり、また、もう
一遍道らうといふので、青木陣實と云ふ人と、夫からもう一人は、高田隆と云ふ人があり、また
一編道らうといふので、神祇官復興の建議書を出した。その文は落合君が筆を取られたので、片
假名交りの普通文でありましたが、之を書いた上で、手分けをして、時の大臣方の所へ持つて往
くといふ事に定めまして、そうして宮内卿の所には青木と云ふ人が持つて往き、彼が三條公の
所へ持つて往き、落合君が岩倉公の所へ往かれた。併し一遍往つても、却て書生の事であるから、
面會して呉れられぬから、今度は聯合して落合君と共に、三條公の所へ往つて、遂に拜謁をした。
それから岩倉公の所に往き、また有栖川宮殿下の所にも往きました。其時分は、共に若氣のいた
りて元氣も大層善かつたし、落合君と共に、赤坂御所の御門の前に座つて居たことなどもあ
りました。其後、落合君は三島塾に入り、私は谷先生の邸にゆきました。常に交遊して居つたので
す。さて大學の古典科に這入つて後は、落合君は事情あつて、後から這入つて來られたものであり
ます。さて室も違つて居られるし、從來より懇意であつたにも拘はらず、一緒に飯を食へて、講
する事が出来なかつたのであります。其内に落合君は兵隊に往かれて、遂に卒業も出来なかつ
うになりまして、その後、最も落合君と共に手を携へて讀いたのは、高等學校時代であり、下
度青戸君も述べられた通り、落合君が除隊になつた時分が、大學の古典科の第一期の卒業の時
期でありました。私は宮内省の圖書寮から、第一高等學校に兼勤して居りました。其頃は、久米
幹文先生が一人國文科の擔當であつて、未だ國文など、いふものは一向に教へる者が無かつ
たのであります。後に段々國文科を置かなければならぬといふ相談があつて、夫については、師
は古典科の卒業生もあるけれども、どうも落合君が一新斯の道に通じて居るだらうといふ

高等學校時代

國語傳習所

文學全書

歴史讀本、新
撰日本外史

久米先生との相談で、私が早速落合君を尋ねた。其時には飯田町に居られた。落合君は直に承
せられたから、すぐに決つた。それから程なく國文學科といふものが出来まして、久米先生がそ
の長で私と落合君はその下に、働か、ことに落合君は原料といふものが出来まして、久米先生がそ
引受けてやられて居つた。其勢力は却々盛なもので、先刻の諸君から述べられた通りである。
落合の文藝といつて、爲に世を驚かした位であつたことは、御承知の通り、其時分に官立學校計
りては可くないから、公務の暇に、私立の教授所を設けたいと云ふとて、國語傳習所といふもの
を起しました。是は落合君と高津君とが専ら骨を折られましたので、飯田、杉浦兩君が専ら事務
にあたられた。私は寧ろ創立の際には、餘り骨を折らなかつたといふものは、高等學校の方が餘
り忙しかつたからであつた。さて講義や、なにか始めて見ると、どうも書物が居らないとい
ふ事から、前に御話のあつた通り、文學全書と云ふ物を作らふと云ふことになり、其時分は、
この書物は、岡田朝太郎君が初め落合君の所へ來て何か日本の文學書を蒐集したやうなもの
が無くては、大變に不便であるからといふはなしから成立つたのです。其時分に出た來まして、
世中に國文といふことが、少し宛芽を出して來ました。それに就ては、歌と云ふもの、機關本
へなければならぬといふので、又落合君に相談をして、歌學と云ふ雜誌を出す事に致しました。
それは東京堂で出版して、阪さんに標題を頼ひ、川崎千虎君に買之の種萬葉に因んだ雑誌か
いて貰つた。餘程其頃は美術的の雑誌でありましたが、歌の雑誌として、論議があり、雑誌が
り、全國から會員の分をのせるやうなのは、當時は、あまり外になかつたと同時に、歌の會といふ
ものも起さうといふ事、夫は落合君の發起でありまして、色々の人を集めてこれを組織しま
した。又國學會と云ふのもあつた。是は大八洲學校卒業生等の企てたもので、われわれの時
講することとした。夫から、今の文學全書が界は完結した時分に、何か彼を推へようといふ譯で、
歴史讀本といふものを推へました。是は落合君と半分宛帳を執る事にして、二年ばかりついで
ました。是は今残つて居りますが、小供の讀本であり、夫からつぎが新撰日本外史と云ふの
文學的に二人で書いたのです。それから詰らぬものだけども、日本歴史雙六といふものを、ま

日本文典

文章會

萩の家

日本文學全集
編纂の次第

た二人でこしらへたことがありますが、これは武内桂舟君です。又すつと前に、落合君が日本文典といふものを拵へるから、同著にしようといふ事の話がありました。私は一向日本文典などは研究が行届かぬので、駄目だと申しましたが、そんな事いはずに加勢せいといふわけです。日本文典といふのができました。まあ右が落合君と私と、書物を同じ名で著したものであります。又大鏡詳解といふものも二人でやつたのでした。これは江見清風氏が大分加勢しました。夫から會の方では、文章會と云ふものが出来ました。これは西村茂樹先生、西岡先生などの大家が主唱されたので、國の文章を青かうと云ふので、萩野君なども居られましたし、其外大槻君、藤田君も御出てなられて、大分一時は盛んであつた。これは即席に文章を青き、即席に批評して、夫を離結にして出すといふことなつてした。其時分も落合君が大分盡力に爲つた。それから、國語傳習所の方で、國文と云ふ雑誌を起して、同じく落合君は尤も骨を、うられた。編輯も自分で書つて、澤山に文章が載つて居りました。今ではありませぬが、一時却々勢力のあつた雑誌でありました。夫から高等學校に居る時分に、餘業として、高等學校の内、文章會と云ふものを起して、之は落合君が専ら組織して、重に歌をよむのでした。しか尾上榮舟君などは、この中の會員であつたやうだつた。

萩の家と云ふ號の起つた事は、諸君御承知かも知りませぬが、之は私と相談して附けたことであつた。之は色々後には理屈がついたやうだが、初めはかうなつて了。あの萬葉集に、春歌の優劣の歌がある。あの歌を頼りに讀んで、君は一體春が好きか秋が好きかといふから、僕は此歌には反對で、春の方が好きだといふたら、落合君は私に秋の方が好きだ、君は春が好きならば、春のやうな名を附けたまへ。僕は秋が好きだから、秋のやうな名を附けるといふ話があつて、夫から程なくして、始終、萩の家と書いて來るのてあります。(池邊健泉氏談)

私は日本文學全集の事について、少し申しませう。明治二十三年の二三月頃と覚えて居ります。私に、日本文學全集の大橋佐平君が、私の所へ参りまして、今度小中村さんと落合さんとが、日本文學全集といふやうな書を出版しようといふ計畫で、出版の事を申し込まれたが、どういふものであらうか、自分にはさういふ本の事も分らぬから、貴君は頼りからの頼助のことゆゑ、相談に

來たといふ事でありました。夫には、まづ、日本文學全集の人の得易いやうに、編輯するを急務と考へて居る。私に、日本文學全集の事について、古語拾遺と土佐日記といふものが、重なる試験科目になつて居りました。我々も、漢學の方ばかりやつて居りました。國語はあまり見た事がない。東京へ行つたら、書物も澤山あつて、下讀をすることが出来た。うと思つて居りましたが、東京へ來て見ると、既に應募者が買入れた。東京の書林に、一冊の土佐日記も、古語拾遺もありませぬ。それで友人を頼んで、やつと素木の土佐日記の粗末なものを一部を譲り受けた。試験準備を十分にすることが出来ぬといふやうな事であつた。幸に古典科に入る事が出来て、兩君と親しく交るやうにもなりましたが、當時の應募者は、皆々百數十人位であつたらう。然るに夫等が買つた爲に、書林に本がないなどいふやうな事は、日本文學界の發達は、逆におぼつかない。これを救ふには、是非古書を出版することが必要であるといふ宿論である。それについて、文章全集を兩君がやるといふことが成立つたならば、大層宜しいことである。折角引受けて出版したら宜からうといふことを勧めました。所が佐平君は、兩君とは、始めて違つたので、ちと不安心であるといふ風のことゝを勧めました。所が佐平君は、兩君如何を氣づかうたのでありませうか、それほどよい事業とおもふなら、お前も一緒にやつてくれぬかといふから、それはやつても宜いけれども、兩君が計畫せられたことに、自分が割り込むといふと少し面白くないから、やはり兩君だけでやつたら宜しからう。いや、さう言はずに、三人の分を増加するといふのでありませぬ。そこで、大橋氏と兩君と私と四人で、この書編纂の第一回會議を開いたのが、神田の玉川亭でありました。さて其年の五月か、第一編を出しました。所が案外の賣れて、忽に二版三版といふことになり、書林の喜ぶよりは、寧ろ三人が案外の思はずの位であつた。さて月々種々の本を受持つて、校訂を致して居りました。其時分には、落合君は、飯田町三丁目の住所とは近い所、同じ五丁目でありました。始終相談にも進ましました。自分等は、随分粗雑なこともあつて、中には、人に手傳つて買つた事もありましたけれども、落合

國文科に於ける勢力

君は始終自分で筆を取つて、直して居るから、君がさういふ風にやるのならば、私もさうしなければならぬといふと、自分はやるだけはやらぬと、氣がすまぬから、斯ういふ風にやるといふ事を申されました。其落合君の勉強に感じて、此方も能くやらなければならぬといふ感じを起した事もございました。文學全集は二十四巻續きまして、一通り之で纏つたが、やはり落合君の強くないかといふことと、三人で、駒込の神泉亭で、編輯の計畫を致しました。其時分には、博文館の出版の都合で、其事は見合せる事になりました。けれども、二十四巻の文學全集が、多少難澁もあるが、國文學界に利益を興へた事は、少からぬことと信じます。さて後に聞けば、この金は、落合君の首唱で、君の友人の岡田朝太郎君が、何か文學書を出してはといふ詞から、思ひ立たれたと申す事でした。さすれば、この功績ある全集の出版は、全く落合君が首唱の力で、小中村君が賛成し、余は相繼に過ぎぬのであります。さて各自所持の本は、何々かといふとは、一々、本の始に三人連名であります。一番始めに名が出て居るのが、その受持の人であります。落合君が力を盡された分は、何々であるかは、文學全集を御覽になれば、直ぐ分るだらうと思ひます。二十四編目の跋も、落合君が書かれたやうであります。文學全集のことで、私の知つて居るものは、それ位のことです。(萩野山之氏談)

私が初めて高學學校の囑託を受けて、學校に入つて第一に感じた事は、落合君の國文科に於ける勢力の大きな事でありました。といふのは、高等學校の學科は、種々様々の學科があるのですが、國文といふものは、動もすれば、人に輕んぜらるゝ傾がありが、その物であるに拘らず、それが……勿論落合君ばかりの功勞ではない。久米先生、小中村先生、其他の方々の御助力もあつたのであります。が、其頃落合君の勢力の盛んであつたことは、學生の答案が、落合君の書林までを真似て居た者が、澤山あつたといふことと、分ります。さうして、それが必ずしも、文科の學生のみでない。工科、法科の方に属する學生でも、頼りに落合君の筆法を真似して居つて、文科の方は勿論の事、其他の學生が總べて落合流になつて居りました。それから、作文にしても、文林は、大抵全く落合君の文章を真似て居るのであつて、また文科のみならず、一般の學生間にも、氣を作る

其欠點

大言壯語

ことが大分流行つて居つた。斯ういふことは、落合君がどれ程力を盡されたかといふことを證明するに足ると思ひます。それ等の人々が、今日成業の上で國文學に盡された仕事も多し。それから落合君が高等學校を去られた時まで、四五年間同じに居りました。けれども、充分に分ります。ふことに就いては、御相談いたしました。が、落合君は高等學校では、どういふ風に教授をして居られたかといふことは、今日も教へを受けられた方が、澤山お出になります。さういふ風に、落合君は極めて明瞭な講義であつて、元氣があつて、十分に興味を惹起させる講義であつたと思ひます。それに依つて國文科といふものは、興味のあるものだといふことを、全校學つて居つたことと思ひます。これは、矢張、學校で感じたこととてあります。それから明治二十七年に、私は文部省の檢定試験委員といふものになつて、中學校師範學校教員の檢定試験をいたしました。たが、其時にも同様の感じを持ちました。之は直接に落合君の教授を受けた人々ではないが、落合君の著書を讀んだ人なので、それが矢張高等學校に於けると同じやうな現象を示しました。其文體も、矢張落合君の作る通りの文體であり、文法の答案の如きも、どの人のを見て、悉く落合君の文法に依らぬものはない位でありました。(芳賀矢一氏談)

落合君が國文復興に付ての功績は、昔さんの御話に明かであるのみならず、世間でも早く齊しく認めて居る處であらうと思ひます。夫から落合君の行動性質に付ても、善い方の側に付ては、先刻來屢々御話もある通り、今更私が申すにも及ばぬ事であらうと思ひます。其善くないと私の認めました個に付ていひませう。之は極く無遠慮な事であらうと思ひます。其善くない私共の如く、歴史に關係して居るものから見ますと、人物を評論するに當り、善い事評りをいふて、缺點を一つも載せない傳記と云ふものは、眞正の傳記でない。眞正の傳記、眞正の歴史と云ふものは、善惡交もあらはれて居つて、極く其眞面目を得たものでなければならぬ。今夜の會は、ち褒めるばかりの表面のものを、いふ爲め、證據として無遠慮の評を次いで見ようと思ひます。夫は先刻市村君もいはれた通り、大言壯語といふ事が、落合君の一つの缺點であつたらうと思ひます。併し他方から觀察して見れば、大言壯語と云ふ事があつたが爲めに、之を現實に

落合直文

創業の人

しようといふ決心をば、落合君は定めて起された事であらうと思ふ。即ち短い生命にも拘はらず、比較的其功績の多く舉つたのは、大言壯語に基くと云ふところも少なからぬ事であらうと思ひます。

夫からもう一つ私の認めた事柄は、落合君は文學界に於ける創業の人として、種々な人々のつた。守成の人としては、創業の人ほどでは無かつたらうと思ふ。諸種の事業の仕上り、立派で無いては、守成の時代の立派なより、私は寧ろ其創意の妙なるに感服する事が多かつた。されば落合君の得意の時代には、創意が多きに過ぎて、其一つに専心一意で無かつたといふのが、幾分か同君の業となつて居り、はしなないかと思はれます。それでまた、或る人の語に、落合君にも善くない點もあつた。しかし其悪いといふのは、理的の悪いので、尻尾の出て居る、源の無い、寧ろ可愛らしい悪いのであるといつた事があり、此は落合君の短所にして、的當の言である。然らうと思ひます。大言壯語なども、頗る無邪氣なものが多かつたので、私は是點の外は、全然落合君をば善い人と思ひます。先づ今日は是文にしてやめますが、今一つ追加をします。落合君のへらるゝ人物と思ひます。先づ今日は是文にしてやめますが、今一つ追加をします。落合君の歌の技術は、誰でも認めて居る。それ故、文科大學の歌の講師として、落合君を起へたらばどうであらうかと云ふ譯が、餘程熟して居たこととあります。ところが、先づ本居豐前さんが聘せられた事になつた。現に角落合君が文科大學の側で、餘程評判が善かつたといふ事は、夫て分りませう。(三上俊夫氏談)

門人

- 〔同上〕 十九日、通夜の御つとめ、つかうまつるも、嗚呼今宵一夜とはなりぬ。落合はし、門人、
- | | | | | |
|-------|------|------|------|--------|
| 木村重 | 金子元臣 | 尾上八郎 | 藤江秀雄 | 松村八郎 |
| 藤波常雄 | 田中真弓 | 野野野雄 | 吉川鹿助 | 波多野龍太郎 |
| 藤崎正太郎 | 馬場龍 | 小森甚作 | 野家貞文 | 山本静家 |
| 彌富源雄 | 川俣馨一 | 五味秀藏 | 松尾茂 | 山本喜一郎 |
| 石田平治 | 小島捨市 | 池田末雄 | 船内文雄 | 宮小神助 |

著書

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 伊藤正弘 | 富田道生 | 秋山演子 | 中山静子 | 金井修子 |
| 大淵いれ子 | 市川みち子 | 稻吉貞子 | 山本まら子 | 新武子 |
| 小柳鶴子 | 齋藤玉子 | 小池よし子 | 久保より子 | 藤岡すぶ子 |
| 藤井静子 | 岡分みさ子 | 服部静治 | 毛呂清香 | 内海弘樹 |
| 與謝野寛 | | | | |
- の四十八人、かほるく、御宿の御前に進み出て、各名のりあげて、御別つかうまつりぬ。
- 〔編者補〕 日本文學全書小中村義象 三氏合編 二四 歴史讀本小中村義象 合編 四
 新撰日本外史全上 新撰歌典 一
 日本大文典 國文軌範 一
 女子雅文教範 國書辭典 一
 大鏡詳解合本 高嶺の雪 一
 國文評釋 一
 國語讀本 一〇

追加

氣吹屋門人録

氣吹屋門人録

氣吹屋大人 爾進留野野野
 皇大御國乃上代乃道乎宇斯乃摩伎傳賜布袋已甚久願比斯怒夫爾依豆名源乎通里且其道爾處
 伎教乎受賜波里侍比奴今與利後教賜波流如久重志矣學比豆神乃御道爾習比公乃御給爾遊事
 無久又字斯爾對比豆章耶無久異伎心乎思波自都豆此字氣比爾遊波袋海麻久毛長伎天津神國
 津神知看志爾米賜波率阿那可長

文化元年甲子

板倉家 田河權六 利器(後改源三) 同 青木五郎治 兼房(後改正兵衛) 同 中村中平 一區

追加(氣吹屋門人録)

文化二年乙丑
板倉家 鈴木十兵衛 典常 江戸 若林和泉
文化三年丙寅
秋元家 乘松才右衛門 正名(後宗統) 同 岡友榮助 恒足 江戸 野山又兵衛 隆興
江戸 淺見七兵衛 建具
文化四年丁卯
田安家 吉川五郎次郎 直之 龜井隆雄守殿家中 今井一造 秀清(後名、仲、大國隆正也)
文化五年戊辰
秋元家 津田安太郎 安平(改平一郎) 江戸 江川大和 安豐 同 江川安豐 伊知子
江戸 江川藤次郎 安治(後柏原淡路)
文化六年己巳
遠江 堀尾右膳 房守(後國守) 松平家 葉田十次兵衛 明親
文化七年庚午
江戸 内野近江 常正 同 森川宗嗣 士義 同 内田寛保 寛保
文化八年辛未
江戸 上村勝兵衛 胤直 石川家 大野平馬 均茂 同 不入 廣則(後宗統)
中川家 山野七郎治 義勝 下總 向野壽軒 克後小川祐實) 江戸 山下信勝 義勝
駿河 柴崎十兵衛 直吉 同 新庄仁右衛門 道兼 同 小原東作 義勝
駿河 小原久國次郎 忠友(後改種井田親貞、親助、又後改種北源助) 同 同 俗勝 義勝
駿河 山中安兵衛 弘道 同 山下五郎 正寛 同 同 義勝
文化九年壬申
陸奥 藤原權之進 知雄 木下家 田村甫野 重種 同 同 浦輔 重種

石川家 山下又二 光行 出羽 大友直枝 吉吉 江戸 福田九兵衛 宗政
遠州 近藤玄貞 乘正 九鬼家 森 萬右衛門 萬 江戸 安藤玄流
江戸 元喜直右衛門 直正 同 内田助 都 京橋家 高木玄綱 道善
内藤家 吉田太左衛門 政章(後改鶴松) 江戸 羽栗三圭 同 同 道善
文化十年癸酉
伊豆 藤非妻 藏 昌(後伊藤) 江戸 萩野宗助 宗助 井伊家 北村右衛門 大國(後一學)
駿岐 高 德 郡 榮宗 遠江 樋口林次郎 武雄(後關大和) 駿河 具 德 守 義勝
文化十一年甲戌
江戸 高橋安左衛門 正緒 松平家 球城元吉 葛原(後彦兵衛) 石見 竹内 隆 正茂
安部家 園田貞右衛門 忠義(後七左衛門) 江戸 白井 義安 義安 井伊家 松下 隆左衛門 定年(後忠康)
新野場 小山傳次郎 安貞 同 松永伊勢(亦平松氏) 信濃 鈴木吉兵衛 義貞
信濃 鈴木敬貞妻 登和女 上總 柴田秋之助 義信(後白鳥氏) 備前家 渡邊 玄 義
相模 守屋 忠藏 賴建(後丹下) 日光山 入江所記兵衛 備前家 渡邊 玄 義
文化十二年乙亥
石見 湯淺大早 定憲(後恒山、後改大和) 出羽 佐藤百助 信忠(後忠康)
阿波 坂東莊次郎 政年 近江 德永如心 茂彦 大坂 安藤 一 郎 克
京都 藤田吉兵衛 有成(初春相) 同 江戶 丹後 爲之(初丹下) 江戸 島屋 清次郎 清次
遠江 櫻井 順助 信影 阿波 山莊伊三郎 春里 江戸 林 凱之助 義勝(後宗統)
江戸 百川 松藏 篤則(因懇願與一字)
文化十三年丙子
伊勢 小川地平八郎 克家(後藤、喜治) 下總 富 上總介 直利 同 同 有 就 直利
下總 土屋 藏人 清道 同 神崎 播磨守 光武 同 同 山口 豐 守 忠康
同 山口 因幡守 忠榮 同 信太 郎 忠英 同 同 多田 庄兵衛 義勝(後宗統)

追加氣吹屋門人錄

下總	高橋治右衛門 正雄	同	五十嵐左京 光通(後對馬)	同	向後勳次 重正
同	宮内主水 嘉長	同	石上海太郎 豐稔	同	豐井水 豐隆
同	野口新左衛門 音春	同	石上重助 豐賢	同	石上仁兵衛 重忠
同	櫻井茂兵衛 豐延	同	野口大郎右衛門 正雄	同	同 七郎 豐隆
同	關戸茂齊 茂清	下總	宮内長次郎 典正	同	石上久太郎 豐隆
常陸	櫻井吉太郎 豐開	同	給水新吉 有賴	同	三浦義興 定國
同	佐々木喜七 金克	同	三浦長七 重朝	同	三浦義興 英實
同	清水彌七郎 公年	同	大森嘉助 文慶	同	土佐基次兵衛 忠隆
同	池田文吉 王朝	同	三浦長助 定長	同	山本善次郎 重隆
同	飯島安兵衛 真命	同	片野右近 德隆(後主水)	同	向後佐右衛門 清春
同	山口式部 正包	同	都筑芳七 重雄(後主水)	同	高橋實家 重隆(後光政)
下總	三浦實大 健雄	秋元家	新井善兵衛 政意	同	福川平源治 正信
同	野口忠兵衛 忠守	秋元家	野山多四郎 種嗣	同	村山守刀 實方
江戶	藤田厚齊 信親	同	中川源右衛門 定雅	同	給水勳七 經有
同	森左近 義貞	同	河島貞吉 重朝	同	川崎馬次郎 重隆(後源三)
同	岡田佐兵衛 孝貞	同	小松嘉善右衛門 茂利	同	種村文之進 季孝
土佐	吉田楠藏 正準	同	白石伊助 爲衛	同	各件 豐隆
同	四原多門 晃樹(後庄右衛門)立花家	同	平島伊助 爲衛	同	今井勘解由 季經
同	加賀 石川親貞 義實(後大學)	同	白石綾江 爲衛	同	青木大夫 正次
同	編原家 渡邊源太左衛門 綱	同	駒込 爲衛	同	岩波之助 義隆(後廣吉)
同	松平家 大野列解 尚芳(後半兵衛、又、兎在下文)	同	田島助 明徳	同	引田伊右衛門 貞隆
同	同 目真半藏 親芳	同	里見六郎 宗徳	同	矢部兵馬 義隆
同	同	同	同	同	桂、東平 光英
同	同	同	同	同	吉岡茂吉 吉綱

下總	小島彦八 元吉(後彦右衛門)同	下總	山崎長右衛門 萬利(因懸顯興一字)	江戶	林 新吉 吉壽(後内監)
湯島	龜井次郎兵衛 志篤	同	香取宇内 利香	同	同
土佐	柴田左門 勝顯	同	同	同	同
文化十四年丁丑					
下總	中尾玄仲 玄仲	伊勢	玉木良藏 吉延	下谷	松田 觀山 隆平
江戶	井征 總入 地	下總	岡田右近 忠利	江戶	藤原 亮平 亮平
武蔵	小泉市右衛門 安輝	伊勢	太田牧太 氏數	同	中瀬英右衛門 良水
下總	小鹽半藏 忠信	武蔵	町山善兵衛 正理	行徳	市中 實隆 徳吉
江戶	太田作兵衛 康海	同	同	同	同
文化十五年戊寅五月四日					
相模	大賀兵部介 忠肥(亦稱江氏) 越後	同	猪俣 祖馬 由則(木名主殿)	下總	杉山 奉太郎 義隆
下總	海上治兵衛 安平	同	小山 要八 光命	江戶	竹内 保市 徳隆
上總	鈴木登岐 義述	武州	松田市右衛門 信一	伊勢	甲賀 彌太夫 義隆
伊勢	芝田仙藏 忠治	同	赤松須賀彦 實彦(後常樂居)	同	同
文化二年己卯					
下總	吉野中務 重泰	同	香取 淡路 武慶	同	小川 火辨 壽隆(後土佐)
同	塚本 縫殿 吉治	同	寺島文右衛門 文衛	同	永井 甚左衛門 年孝
同	宮内 佐五兵衛 定賢	同	塚本 清兵衛 勝元	同	宇井 出守 包教(後上總)
同	常世田三郎左衛門長世	同	千木 松常右衛門 義隆	同	千木 松常 義隆
同	向後 長吉 長吉	同	平山伊右衛門 滿晴	同	岡 辰五郎 光長(後源三)
同	大高善兵衛 秀明	同	弓削 周防 春彦	同	同 出 誠 是隆
同	狩野 主膳 保官(後播磨)	同	齋藤 宮内 勝之	同	同
江戶	多田 峰治郎 重滿(後岩井中務、又、伊豫下文、正興)	同	同	同	小林 元次郎 義隆(後三右衛門)

下總	多田正兵衛 米野	江戸	根岸新兵衛 延良	下總	上代 備後 光水
備中	島越新介 常成				
文政三年庚辰					
遠江	中村 帶刀 眞幸	下總	中 藩 丹 後		
越後	上杉 六郎 眞興(後八郎)因恩願與一字				
備前	常麻次郎兵衛 尙文	近江	國友 藤兵衛 隆常		
江戸	高山 寅吉 篤任(後石井嘉津岡)因恩願與一字				
下野	戸田 半七 國武	伊勢	益谷 大學 末壽		
下總	平塚貞次郎 爲親	板倉家	吉良 清次 克寛(後圭助)		
文政四年辛巳					
近藤家	石川 瀧兵衛 克忠(後十大夫、篤忠)因恩願與一字				
下總	眞 庄 助 眞幸(後左衛門)	同	大坂 東榮 貞恒		
松前	明石 寅次郎	越後	木 岡 源 太		
出羽	佐藤 月 滋	本所	根木 庄 巖(後香取中將)		
加賀	岸本友之助 愛之(後門兵衛)	備中	細家 健 殿 介 政富(後從五位下能流守)		
備中	藤井 完治 貞徳		細尾 橋 三郎 實重		
文政五年壬午					
上總	黒須 玄蕃 眞壽雄	同	岡 澤 謙 部 定 政		
尾張	川村 作右衛門 眞行	下總	石川 源 太郎 大忠		
備中	藤井 嘉内	江戸	金杉 龍 藏 常長		
上總	山口 半人 忠直		小島 祐 助 惟良		
文政六年癸未					
下總	飯田 丹次郎 胤苗	備前	志賀 宇右衛門 純盛		
		上野	荒井 半次郎 眞清		

備中	板倉 織部 佑 勝喜主	武藏	矢澤 佐 伸 善賢	上野	増田 秀 次郎 成則
越後	細貝 邦太郎 篤實(因恩願與一字)	一宮	石川 大 和 光徳	備前	栗合 右 伸 大枝
美作	太田 豊太郎 朝泰	山城	六人部 健 殿 忠香(後從五位下美濃守)		
備前	小谷 眞 藏 長秋				
山城	鴨脚 伊勢守 秀名				
文政六年癸未					
	松村 眞 船	秋元家	平岡 佐 助 邦勝		
文政七年甲申					
越後	佐藤 興 藤 太 道成(後盛治)	阿波	松浦 源 盛 道輔	上野	生田 小 勝 道清(後國秀)
遠江	中川 貞 助 長益	小田家	石川 吉 十郎 克隆	備前	小 神 信 康 富春
上總	田中 石 見 保種	同	白鳥 善 宮 義教	常陸	竹 來 大 和 元貞(後道彦)
文政八年乙酉					
備前	坪田 美 織 中枝	同	杉山 此 面 水枝	同	玉 中 玄 真 春樹
下總	平野 縫 右衛門 芳寛	和泉	井 原 出 雲 正孝	上總	高 師 山 城 信住
安房	石 井 伊 織 謙則	常陸	竹 來 大 隅 政勝	武藏	小 行 田 勝 五郎
上總	平田 出 雲 常任				
文政九年丙戌					
上總	八 劍 伊 勢 興壽	下總	宮 眞 佐 平 定雄	秩父	金 井 太 郎 藤藏
備前	松末 齋 宮 越彦				
文政十年丁亥					
越後	澁谷 人 來 丸 保	近江	大野 九 郎 治 美守	攝津	小 門 藤 右衛門 眞好
三河	羽田 野 常 陸 敬雄(後榮樹)	同	鈴木 隆 典 守 重野	上總	風 袋 道 酒 元則
三河	竹尾 東 一 郎 高柄	下總	高木 庄 兵衛 治好	江戸	河 野 秋 三 郎 通隆

追加(氣吹屋門人録)

越後	宮島貞吉 老安	尾州	平野鈴太郎 勝雄	同	湯木又四郎 守持
下總	塚本多右衛門 盛房	同	塚本伴助 定則		
文政十一年戊子					
下總	宮瓦助 入真	同	伊東助左衛門 定能	同	石毛伊織 正勝
伊豫	宮永市衛 友昌	上野	島橋又左衛門 信雄	同	八木秋輔 直實
越後	宮島儀左衛門 老通 (後嗣五兵衛、則盛)	同		同	藤崎左衛門 義興
越後	關谷彌兵衛 義卓	同		同	平山春助 義隆
下總	君塚萬藏 茂	同		同	藤波清兵衛 貞隆
長門	有田右衛門 盛伸	同		同	越川久米藏 定基
下總	赤澤八市 文雄	同		同	堀久兵衛 定通
近江	村井三次郎 嘉古	同		同	
伊豆	金指民助 義道	同		同	
醍醐家	井上主税 親國	同		同	
文政十二年己丑					
下總	宮瓦茂兵衛 利之	同	高木仙藏 勝正	同	鈴木主膳 重時
藤原	木村休右衛門 給滿 (後春秋滿)	下總	飯田宮之介 胤寬	同	山口權衛 包隆
松平家	大橋喜十郎 昌尚	下總	宮瓦和助 定友	同	鈴木林藏 義隆
肥前	市丸藤十郎 藤齋	加藤家	鈴木量輔 高保	伊豫	青木一造 重武 (後重壽)
三河	岩崎典勝 浪波 (後浪刀) 後免藏	伊勢	鈴木長門 信房	越後	海津祐美 義隆
小田	伴助 成美	伊勢		同	
文政十三年庚寅六月二十日					
銀座	藤田保太郎 勝誠	下總	比留岡貞實 元良	同	草野重隆 守代
土佐	逢谷次兵衛 萬輝	同	牧野道太郎 實昌	同	高玉尺藏 安見

陸奥	田代參河 尊信	下總	石橋春雄 勝仲	上野	宮澤平人 正治
美濃屋	吉田清七郎 秀之 (後鈴木武幸) 伊豫	同	中山與一 宗靜	常陸	宮本 義隆
阿波	岩雲花香	陸奥	鈴木石見 明慶	下總	豐山 義平
松平家	古橋輪吉 宗弘	上野	中澤源藏 瑞隆	河越藩	根村 義隆
陸奥	菊地宜見 正興 (後良吉、正古)				
天保二年辛卯					
松平家	面川文三郎 正業	下總	島田次郎兵衛 定守	淡路	土井友藏 忠隆
薩摩	法元六左衛門 御備	陸奥	西山辰之進 政友	三河	森田 敬光
三河	石田式部 秀堅	大和	西村 准藏 知氏	陸奥	佐藤 大和 政清
下總	木内文藏 茂久	豐後	中橋 達治 正義	下總	藤 權 光信
下總	飯塚筑後 正海	同	都築雅樂助 胤文	同	鈴木 玄慶 正信
阿州	山陸修造 英	薩州	肥後殿之允 環音	同	池田 左衛門 誠見
下總	山本傳兵衛 保信				
天保三年壬辰					
伊勢	前川久太郎 勝彦	上總	小林統次郎 元廣 (後深川清盛) 出羽	安藝	安藝道 誠 德知 (又名順三)
伊勢	介谷長左衛門 重員	越後	今井 貞 繁興	同	田代 大炊 繁實
淡路	鈴木雄三郎 重胤 (後府生、勝右衛門)	同		三州	守部 主殿 實光
丹波	池畑太郎兵衛 原茂	三河	筒井吉太郎 孝風	同	伊藤 左衛門 清海
三河	竹尾大和守 茂樹	上總	小林又玄 元貞	道州	松平 大炊 勝平
費後	小串仙助 重威				
天保四年癸巳					
野州	野澤金吾 信元	三州	松平源七郎 親道	信州	小山丹次 清隆
和泉	上條柳居 良材	薩州	和田喜兵衛 秋福	同	古後才助 秋隆

追加(氣吹屋門人録)

奥州	石山 元司 廣治	同	佐原莊三郎 義洋	奥州	矢野 左衛門 道正
信濃	松澤四郎右衛門 義孝	下野	中山 松兵衛 義信		
天保五年甲午					
川越藩	鹿子山 亮 尾 清國	佐波	早川 為四郎 直道	三州	菅原 勘助 山 定隆
三州	水多 山 雲 光臣	同	加藤 長門 喜茂	同	上島 左門 貞興
薩州	增田 武右衛門 矩高	武州	安藤 源藏 直彦	加州	河内 勘助 正隆
武州	稻垣 新右衛門 正雄	三州	松平 帶刀 親年		
天保六年乙未					
伊勢	小川 地結城 喜廣	松平家	内山 平左衛門 景三	三州	鈴木 兵部 重實
伊豫	和泉 善平 利愛	下總	東 六太郎 天風	武前	行弘 伊守 正貞
筑前	美和 難登 尹文	同	宮崎 加賀 大門	江戶	堀 小市郎 晴雄
伯耆	竹 子				
天保七年丙申					
播州	平尾 直助 可寬	駿州	中村 興兵衛 繁綱	近江	萩野 伯耆 光隆
水所	釋 便 妙	評定役	向島 武兵衛 廣明	川越藩	今村 白鶴 貞良
石見	田中 貞 廣道	江戶	田村 太助 照博	越後	岡澤 九郎右衛門 許隆
江戶	河野 欣三郎 通澄				
天保八年丁酉					
丹波	大西 重助 真壽	武藏	榎田 直助 直助(通稱玄常、後改直助)	同	藤本 正次郎
越後	樋口 殿岐 英典	丹波	長谷 直右衛門		
武藏	安藤 直次 直道		平山 敬輔 重熙		
天保九年戊戌					

下總	山崎 友藏 素成	上野	小暮 文左衛門 照勝	出雲	佐草 實 美清
同	佐草 民部 文清	三州	大林 三助 進彦	播州	曾根 隆典 守 貞隆
出雲	森山 和三郎 辰喜	越前	中根 頼 貞 頼實(七郎右衛門、後遷江)		
江戶	張替 新八郎 耕年	大隅	竹内 彌次郎 經成(後稱右衛門、又五百兩、後、萬兩一)	秋田	宮澤 三益 隆
土佐	岡 左次兵衛 直幹	同	金子 嘉治 爲 守 貞		
越後	目黒 庄助	越前	藤原 具次郎 教行		
天保十年己亥					
上總	高橋 吉太郎 吉富	薩州	大河 平彦次郎 隆風(後稱國院、貞住)	薩州	佐倉 又太郎 則光
播州	松井 直太郎 長世(改岩崎太郎)野州		村上 甲斐正 重義		
甲斐	内藤 筑後 正臣				
天保十一年庚子					
紀州	寺澤 立 敬明	筑前	松木 大貳 俊章	秋田	小野 剛 太夫 義隆
江戶	八木 主計 氏重		通藤 萬吉		
天保十二年辛丑					
甲州	田中 貞吉 久方(後貞治、年風)下野	信濃	曾 實 進	同	野口 彌八郎 今宜
同	馬場 藤吉 安信	秋田	小林 三郎 宣秀	同	渡邊 善 助 隆
同	石川 榮之進 義正	越前	久世 愚五郎 美則	秋田	菅原 喜代輔 則吉(後稱道)
秋田	梅津 主馬 忠周	同	梅津 藤十郎 忠洋	同	大和 正治 隆風
同	土崎 千里介 宗直	同	熊谷 周 廣 直勝	同	堀 彌 利 義清
越前	杉浦 金太郎 致正	秋田	大山 幸人 好古	同	堀 彌 利 義清
同	太田 嘉右衛門 乾亨	同	駒木 根文左衛門 隆晴	同	小笠原 見龍 以忠
同	守屋 左源司 勝貞	同	坂口 登 豊年	同	菅原 善兵衛 隆秋
同	羽石 文之助 道規	同	深谷 直 基治	同	久保 高 隆 隆見

追加(氣吹屋門人録)

天保十三年壬寅

三州 木村猪左衛門 正徳
 秋田 澁川東市郎 盛業(後盛信)
 同 和田孫右衛門 勝作
 同 石川元長 康泰
 同 小西兵助 長種

天保十四年癸卯

羽州 清水坊清山 道徳
 奥州 齊藤御司 元住
 同 丹石五郎 重資
 同 熊谷政治 直清
 同 川村多一郎 長賜
 同 石古川政吉 忠重
 同 妹尾玄養 兼秀
 同 熊谷常藏 直養
 同 福原千九郎

歿後門人録

歿後門人録抄出

(白弘化元年十二月十九日)

伊豫 矢野茂太郎 玄道
 信濃 飯田守人 武藏
 石見 石河金左衛門 正養

秋田 佐々木佐兵衛 弘綱
 下總 伊藤三造 國綱
 水戸 久米孝三郎 幹文
 相模 平田喜太夫 胤美
 同 松野重太夫 胤志

同 三輪利綱 一 元綱
 同 飯田守人 武藏
 同 飯田守人 武藏
 同 飯田守人 武藏

加州藩 石原左門 千尋
 三州 津田新十郎 長徳
 同 平澤三郎右衛門 常信
 同 岡田升順 政法
 同 櫻井東雄

同 木島半左衛門 伊藤
 同 大山角太郎 綱雄
 同 津江庄司 光徳
 同 布川三善 隆秀

江戶 井上肥後 頼綱
 伊豆 萩原莊兵衛 直胤(後正平)
 三河 羽田野兵部 茂雄
 江戶 小川織部 忠吉
 越後 小川清七郎
 遠江 岡部御楯 政隆
 近江 文屋大内藏 安貞(後大塚、重貞)
 藤原 黒田彦左衛門 清兼
 京都 眞鍋藥齋 豐平
 美濃 中山彌助 繁樹
 伊豆 石波儀三郎 延美
 肥前 杉岡勇馬 越夫(改名眞隆)
 信濃 内藤若狭守 正直
 武藏 岩田大學 吉隆
 常陸 宮木大和 眞幸
 山城 瀧水嘉壽丸 兼親
 武藏 柴崎準人 宜弘
 武藏 久保長良 徳郎
 上野 正木昇之助 光慶
 羽後 千葉眞胤 眞胤
 武藏 荒井首令 幸周
 鹿兒島 奥野牛左衛門 補安(後玄牛)
 同 林 聖臣
 伊豆 飯田恭雄

江戶 神田明 貞胤
 三河 加藤監物 千秋
 相模 内海利部太夫 政雄
 江戶 諸井圓吉 勝忠
 美濃 青山佐次郎 武道
 遠江 長谷川權太夫 貞雄
 同 文屋 攝津 安平(後太郎、重平)
 同 榊山休兵衛 資丈
 三河 大宮司五位 藤原守高
 伊豆 小川親貞 信邦
 伊豆 千鳥近江守 祐順
 播磨 中田圓會 廣信
 常陸 小野野信藏 廣光
 陸奥 大原近江介 廣治
 武藏 東角井五位 彌臣
 忍路 水村茂左衛門 物綱
 下野 東宮 兼成 高則
 越前 井手佳太郎 今滋
 同 北村智五郎 久政
 同 千葉眞胤 眞胤
 同 海野美津記 幸英
 同 津田 北 長貞
 同 竹葉藩 物高 世

同 野津七左衛門 頼綱
 同 名取善十郎 清隆
 同 宮内卿 藤原 實高
 同 松岡義孝 實高
 同 吉野平十郎 義孝
 同 芳賀貞之助 義孝
 同 渡井安太郎 義孝
 同 手島左衛門 義孝
 同 川村津平 義孝
 同 中島平太 義孝
 同 田中七右衛門 義孝
 同 大槻重隆 義孝
 同 香取義隆 義孝
 同 瀨田主善 義孝
 同 四角井五位 義孝
 同 鹿島井下 義孝
 同 渡邊上野介 義孝
 同 鈴樹信三郎 義孝
 同 大和田左太郎 義孝
 同 秋山小次郎 義孝
 同 横井善一 義孝
 同 小迫玄直 義孝
 同 物原善太郎 義孝
 同 小川信正 義孝

追加(氣吹屋門人録)

國學者傳記集成

同	竹村真幸	仙臺	遠藤實	日野西園寺
同	竹內從五位	伊豆	橋本正五位	河津正五位
武藏	權田一作	尾崎大郎	藤波從四位	岡平左衛門
堀江	大澤從四位	鹿兒島	西島文太郎	神岡五世
中村守城	守城	鹿兒島	尾崎大郎	實吉實之丞
			鹿兒島	實吉實之丞
			鹿兒島	實吉實之丞

國學者傳記集成終

國學者年表

姓名	皇紀		天皇	將軍	年	月	日	享年
	年	號						
中院通勝	二二七〇	後陽成	同	同	同	三、二五	五三	
細川幽齋	同	同	同	同	同	八、二	七七	
飛鳥井雅庸	二二七五	後水尾	同	同	同	二、	四七	
冷泉為滿	二二七九	同	同	同	同	二、	六一	
冷泉為村	二二九〇	明正	家光	寬永	七	三、二一	八〇	
松井幸隆	二二九二	明正	家光	寬永	九	六、二二	六二	
中院通朝	二二九八	同	同	同	同	七、一三	六〇	
吉田玄之	二二九二	明正	家光	寬永	九	六、二二	六二	
鳥丸光廣	二二九八	同	同	同	同	七、一三	六〇	
友益春之	二二九二	明正	家光	寬永	九	六、二二	六二	
鳥丸廣賢	二二九八	同	同	同	同	七、一三	六〇	
鳥丸資慶	二二九二	明正	家光	寬永	九	六、二二	六二	
佐河田昌俊	二三〇三	明正	家光	寬永	二〇	八、三	六五	
木下勝俊	二三〇九	後光明	同	慶安	二	六、一五	八一	
冷泉為景	二三一二	同	家綱	承應	元	三、一五	八一	
中原職忠	二三二〇	後西院	同	萬治	三	六、一六	八一	
荒木盛微	二三二三	同	同	寬文	三	二、一五	六八	
附元政	二三二八	同	同	同	八	二、一八	四六	
山田龜子	二三二八	同	同	同	同	二、一八	四六	
石出吉深	二三二八	同	同	同	同	二、一八	四六	
關矢凌雲	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
加藤善室	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
望月長好	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
和田以悅	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
山本春正	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
波邊雙	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
井上通子	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
西村其安	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
下河邊長流	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
荒木田雄且	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
河邊信長	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
淺香久敬	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
南都草器	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
吉川安右衛門	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
度會延佳	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
釜原正舒	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
山本廣足	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
黒川道祐	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
岡田惟中	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
龍野照近	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	
山名義豐	二三三三	同	同	同	同	二、一八	四六	

國學者年表

松井	片岡	平尾	鈴木	生田	一柳	村田	中山	山本	新村	狩谷	金谷	長瀬	山田	小野	天野	大石	菅沼	大原	堀原	堤原	小野	柏崎
重元	具元	朝風	景海	德引	雄文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文	幸文
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四	二四九四
仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝
家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶
天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四	一、一四
五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九	五九
近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近	近
二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八	二四九八
仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝
家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶
天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二	八、二二
五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇

城若	澤林	竹田	榎村	中村	正木	吉田	僧田	村田	山崎	藤田	六人	平田	松岡	妙玄	千家	山本	若松	新納	山本	香川	稻村	
千正	旭垂	名雄	茂雄	隆香	千幹	令世	玄如	了阿	利中	惟香	是香	篤胤	辰方	寺門	尊孫	清樹	則文	常有	資雄	茂樹	三羽	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
二五〇五	二五〇五	二五〇四	二五〇四	二五〇四	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	二五〇三	
仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	
家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	
天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	
一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	
三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	三、二七	
七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六	七六
大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關	大關
二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五	二五〇五
仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝	仁孝
家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶	家慶
天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保	天保
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二	三、二
六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四	六四

名號索引 (五十音順)

例言

一、通稱、名、字、號、異稱、法名、監等によりて、本姓名を抽出する用に供へ、且つ著名の文學事項をも附載せり。
 一、簡便を主として、字畫索引の代りに、字音索引を採らざり。故に訓のわかり難きときは、字音によりて抽出すべし。而して音は姓名索引の如く文部省新定の字音假名遣に據る。されば「シ」の部に「澗」を収めたりと雖も、その實際の呼び方が「シ」なりと誤解すべからず。正確なる訓は、大抵、本書中に配し置きたれば就きて見らるべし。
 一、訓は多く假字を用ひ、音は漢字を用ふ、且同形の文字は之を一所に並べあけたり。

愛松軒(兄山紀成)	一〇九	わはち(竹内季義)	一〇二	わらふ(津田春樹)	一〇二
桂園(藤住正兄)	一〇二	阿波介(山田以文)	一〇〇		
あがたの(賀茂重隆)	一〇三	阿波屋敷	一〇〇		
赤穂屋(若林正雄)	一〇三	わふり屋(大黒隆正)	一〇二		
秋津(木居内道)	一〇三	あふひ合(六人藤澤書)	一〇二		
秋津彦(桑田徳六人(木居宣長)	一〇三	源子(寺町三知)	一〇二		
秋成(上田)	一〇三	源田合(加藤行成)	一〇二		
秋の屋(青木永年)	一〇三	天石齋	一〇二		
あきふ(橋本寛)	一〇三	園遊(森山孝雄)	一〇二		
あけみ(橋本寛)	一〇三	安野(寺野良士)	一〇二		
安元	一〇三	安守(長村)	一〇二		
安草庵(黒川春村)	一〇三	安海(丸山作樂)	一〇二		
あしのかりほ(菅原虎彦)	一〇三	安宅(丸山作樂)	一〇二		
あしの屋(麻績)	一〇三	安民(秋元)	一〇二		
あつ子(税所)	一〇三	安真(藤野清真)	一〇二		
あつさね(平田鉄胤)	一〇三	安山子合(津田清胤)	一〇二		
あつたれ(平田篤胤)	一〇三	あや子(上原真良)	一〇二		
あつとし(山崎寛利)	一〇三	あやな(菅原重隆)	一〇二		
あつとも(飯野厚比)	一〇三	ありこ(千原有効)	一〇二		
		有樹(津田春樹)	一〇二		

名號索引 (ア—イ)

いさむ(小川洋流)	七九八	一枝家(村田丁阿)	二六六	いばの屋丸山作樂)	一六四六	歌子(山田一)	一六九六
いさむ(兒山紀成)	一〇四四	一條の今四行(香川幾武)	三七三	いぶきの舎(平田高隆)	一一二二	歌子(中島一)	一六七一
いさむ(松野勇雄)	一六一四	一平(鈴木雅之)	一四六五	以文(山田一)	一六九六	歌子(木村清隆)	一七〇〇
惟孝(山本一)	一〇五八	一平(落合直澄)	一五九二	今四行(香川幾武)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
惟足(吉川一)	九三	一保(鈴木一)	七八一	今四行(似雲)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
惟中(岡四一)	八九	一有(岡西惟中)	八八	今歌(日下高直)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
惟中(藤田一)	一八六	一遊亭	九〇八	今式部(山田龜子)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
惟徳(羽倉一)	八七八	一邸(河村殿根)	二二二	今人丸(島丸光榮)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
惟新(細田方憲)	五二七	一邸(丸山作樂)	二二二	爲(その部を見上)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
維章(鎌崎一)	三〇〇	市右衛門(城戸千楯)	二〇九	風流(平一)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
倚松庵(伊藤松軒)	四九三	市左衛門(齋藤幸雄)	二一〇	隱家(月田高隆)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
瀧之助(山本明晴)	一〇二	市左衛門(齋藤幸成)	二一九	歌(河村一)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
いすけ(久松祐之)	三九五	市右衛門(大塚嘉樹)	二六九	實朝(加藤行成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
いそたり(加藤彌足)	六五五	市六(内山真龍)	八〇八	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
いそみ(岡田正利)	三〇六	つゞき(荷田春滿)	二二九	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
いほだ(鈴木正英)	二九四	いづきの園(荒木田久老)	六六七	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
いそ丸(糟谷磯丸)	一三〇七	いづし居(藤原廣道)	一〇〇七	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
一庵(安田朝経)	七七八	逸亭(今尾清香)	一四八五	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
一學(柳原長俊)	四九七	出雲(島重老)	一四〇〇	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
一月樓(香川幾樹)	一〇七五	逸樂齋(加藤千隆)	七〇一	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
一也(河邊一)	一四三三	稻太(高田禮彦)	一三三七	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
一枝軒(野村尙房)	二二五	稻舍(日下田足穂)	一五九二	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
一時軒(岡西惟中)	八九	因幡(喜早清在)	二九五	うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇
一室(梅井一)	五二八			うららの舎(上田秋成)	一一二二	うららの舎(上田秋成)	一七〇〇

永好(青木一)	二四七	えみか(加納踏平)	一三三九	押屋男國之御權令(越川光國)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
永好(岡宮一)	一四八一	延胤(平田一)	一四八二	おとわし(石金音主)	九八七	境(谷新守)	一四〇〇
永樹(山本昌隆)	一七八七	延住(度會一)	七九	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
永草(青木一)	九八九	延經(度會一)	二四三	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
永年(春田一)	五二三	延良(度會延住)	八〇	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
永平(本居一)	九六六	燕齋(中村守臣)	一一二	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
翌翁(上田及湖)	一五三六	徑風亭(今井似閑)	一八九	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
英明(色川三中)	一一九六	縁信(平一)	二四六	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
衛士(賀茂武淵)	三九九	垣守(谷一)	三三三	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
榮順法子(細井貞雄)	八二二	圓珠庵(契沖)	一七三	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
榮貞(本居宣長)	五三七	淵臥(古田一)	七八〇	おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
榮木(羽田野敬雄)	一五四八			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
顯則(伊能一)	一五二〇			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
顯栗(清宮秀堅)	一五三七			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
詠知院(萩原宗固)	四六三			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
益庵(松井羅月)	一〇三七			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
益根(河村一)	八〇一			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
破齋(狩谷一)	一〇〇六			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
悅可(稻垣棟隆)	五二一			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
鶴中(竹内享齋)	一四七七			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
えなほ(橋枝直)	四七六			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
荏野翁(田中大秀)	一四四五			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
江幡五郎(那珂通高)	一五三三			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇
蛭子屋市右衛門(城戸千楯)	一四〇八			おほくら(千葉富野)	一一二	境(津島廣隆)	一四〇〇

名號索引 (ウーカ)

鶴峰(水野忠夫) 一三三八	花月齋(石野廣通) 三二二	荷澤(細中盛雄) 三三八	か(八)の園(藤井高樹) 一〇七九
鶴林院琴歌城居士(小林歌城) 一三九四	花庇隆(竹村茂枝) 二二六	か(子)子(紙園操子) 二二二	藤原院(木村内造) 一〇七九
高齋(藤原芳野) 一三九五	花園(澤田名垂) 二九六	勝三郎(高林方期) 二二二	上清院 一〇七九
かくれがの茂助(同) 二二八	かげの(千葉葛野) 二二八	勝次(青柳種直) 一〇七九	神樂院(佐佐木) 一〇七九
かげあつ(梶原秋博) 九九〇	霞谷(元政) 二二八	勝之進(見山紀成) 一〇七九	かひならび屋(丸山作樂) 一〇七九
かげき(香川景樹) 一〇七五	雅庭(尾崎一) 八七九	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(平田高直) 一〇七九
かげしげ(香川景樹) 一〇七五	雅之(鈴木一) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(長谷川一) 一〇七九
かげちか(香川景周) 一〇七五	雅澄(鹿持一) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげつぐ(香川景恒) 一〇七五	雅庭(飛鳥井雅庭) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげつれ(香川景恒) 一〇七五	雅庭(香川景欽) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげとし(香川景敏) 一〇七五	瓦齋(小林一) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげのり(加藤景範) 一〇七五	かしが本(石川依平) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげひら(香川景平) 一〇七五	かし園(中島廣足) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげひら(胡倉景術) 一〇七五	かし園(吉岡信之) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげひろ(長尾景寛) 一〇七五	かし園(市岡盛彦) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげもと(香川景朝) 一〇七五	かし園(木村定真) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげよし(香川景欽) 一〇七五	かしの舍(鈴木重胤) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげよし(榊取魚彦) 一〇七五	歌人三平 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
かげを(三島景雄) 一〇七五	歌城(小林一) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
花月院好山游齋居士(海野幸典) 一三三三	歌津女(花安松江子) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
花月齋(關岡野洲良) 一三三三	歌室(井上文雄) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
	歌衛齋(石川雅望) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九
	霞谷(藤原廣道) 一〇七五	か(よし)安佐勝郎 一〇七九	菅原(高橋一) 一〇七九

完齋(齋藤幸雄) 一三二〇	儀大夫(寒川辰清) 二七九	季任(北村一) 二七九	北野(鈴木一) 一〇七九
荳齋(丸岡一) 一三二七	儀平(梅本敏雄) 二七九	季春(北村一) 二七九	結城(藤井高樹) 一〇七九
甘井(鈴木一保) 一三二七	儀登(吉野一) 二七九	季尼(藤原皮申) 二七九	宮原(藤井高樹) 一〇七九
關亭(關岡野洲良) 九三三	儀兄(小林一) 一〇七五	季文(北村一) 二七九	宮原(藤井高樹) 一〇七九
幹文(久米一) 一六一	儀言(長野一) 一〇七五	寄居子(近藤芳樹) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
龜子(山田一) 六二	儀公(徳川光圀) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
龜次郎(落合直文) 一六七八	儀賢(木下等文) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
龜之助(太田全齋) 九三〇	儀俊(多田一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
龜園(山本清樹) 一〇七五	儀正(宮部一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
かめか(中村守手) 一〇七五	儀知(登井一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
龜岡(幸大人)(中村守手) 一〇七五	儀知(中尾一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
かゆ屋敷 一〇七五	儀内(服部中庸) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
臥輪(佐河田昌俊) 一〇七五	儀山(山名一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
かふる(深澤齋) 七三三	儀本(平尾一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	儀門(山口一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	儀園(亞元) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	儀園(大岡隆正) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	儀舍(六人部是香) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	儀園(山本清樹) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	儀園(入道)(林其木) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	龜丘(中村守手) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	季慶(加茂一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九
	季茲(久保一) 一〇七五	駒場(佐原一) 一〇七五	宮原(藤井高樹) 一〇七九

名號索引(キ)

琴香(久保季茂)	一五五〇	九藏(福住正兄)	一六二〇	藤野(吉見季和)	一五九六	九右衛門(大橋長廣)	一五八六
銀若(栗田寛)	一六二九	九之助(淺香久敬)	七八	藤光(戸田茂隆)	二二八	九二兵衛(村田春門)	一〇一六
銀太郎(草野清氏)	一六三四	休四(上田秋成)	七二七	鶴真(香川)	二七一	九郎右衛門(天香廣)	一〇一六
銀之助(香川景樹)	一〇七五	きよあき(田代清秋)	二四二	享壽(竹内)	二二七	空子(藤光秋)	一〇一六
叶夏長(流居士)(下河邊長流)	七三	喬木(志賀巽軒)	一五三三	况齋(岡本保孝)	一三〇	空子(藤光秋)	一〇一六
欽英(渡邊重春)	一五九六	きよか(今尾清香)	一四九五	杏仙(加納謙平)	一五九六	空子(藤光秋)	一〇一六
欽若(山本正臣)	八五三	きよしま(木居清島)	九九六	杏林堂(寺島真安)	二四四	空子(藤光秋)	一〇一六
錦所(山田以文)	九九九	きよ蔵(大石千秋)	一四四〇	魚貫(神山)	一四四二	空子(藤光秋)	一〇一六
錦織齋(村田春海)	七三八	きよつね(朝山清常)	一四四〇	魚庄(橋取)	一四四〇	空子(藤光秋)	一〇一六
近嶺(澤)	一〇三七	きよのり(小中村清矩)	一三三六	玉風道人(久保季茂)	一五五四	空子(藤光秋)	一〇一六
久嵐(原)	七三三	きよやす(山田清安)	一六二〇	玉山(山名義豐)	九八	空子(藤光秋)	一〇一六
久右衛門(伊庭秀賢)	一四八八	きよよし(高橋清隆)	一六七〇	玉蘭(岡)	二五五	空子(藤光秋)	一〇一六
久廻(山崎英成)	二〇〇二	深畑舎(村田泰足)	八五三	旭峰(松平定信)	八九八	空子(藤光秋)	一〇一六
久敬(淺香)	七九	櫻園(木村定良)	二二〇	御園(橋)	二二六	空子(藤光秋)	一〇一六
久左衛門(奈佐勝翠)	九三五	櫻園(中島廣足)	二一〇	御杖(富士谷)	八四八	空子(藤光秋)	一〇一六
久作(山崎英成)	一四〇二	櫻園(吉岡信之)	二五〇二	御風(香田)	八四八	空子(藤光秋)	一〇一六
久助(北村季吟)	二二一	教空(津村深庵)	六九六	御野(小鏡敏)	六四四	空子(藤光秋)	一〇一六
久棟(近藤芳介)	一六二九	教守(岡村教邦)	一〇六六	御津(谷流洞)	六四九	空子(藤光秋)	一〇一六
久老(荒木田)	六六七	教授館	三〇三	御白(木下勝俊)	二二	空子(藤光秋)	一〇一六
及淵(上田)	一五三六	教婦の辭	六七八	きよなが(河邊精長)	六八	空子(藤光秋)	一〇一六
紀文(田中大秀)	一三四五	教邦(岡村)	一〇六六	刑部(飯田忠彦)	一四八	空子(藤光秋)	一〇一六
司絃(岸本)	一三一	きよか(橋村清風)	一六六七				
明絃(安田)	七九七	匡衡(橋澤)	七四五				
九江(木間清治)	一三六九	行誠(福田)	一五七八				

熊彦(高橋)	一五五二	桂滿(丹阿彌光)	一〇三六	契沖	一七四	元政	一六六
雲井の曲	八五五	桂林院湖山義忠(野中禎羽)	九五〇	鶴頭樹園(藤井高尙)	一〇六六	元成(吉川惟起)	一六六
君親(村田春郷)	三三四	經雅(荒木田)	六七四	惠風(橋南路)	六九三	元淡(谷口)	一六六
君采(朝倉景衡)	二七五	經平(土肥)	四四五	兄親(加納謙平)	一五九六	元長(香田)	一六六
君山(深澤蕭)	七三三	經茂(橋本)	六九三	逆旅主人(石川精忠)	六二八	元長(清水源)	一六六
君平(蒲生)	五二四	瓊華(飯田花子)	五二六	月齋(清水源)	八五七	元時(山岡)	一六六
内藏介(平田統胤)	一五五九	瓊實(衣川長秋)	八二六	月峯(齋藤幸成)	一五二九	元時(山本權平)	一六六
		瓊真(長尾)	七九六	月舍(松井藤月)	一〇六六	元時(小野武進)	一六六
		景欽(香川)	六九〇	教宗(河村益根)	一〇一	實光(松平定信)	一六六
		景繼(香川實綱)	二七一	教圓(岡)	一〇一	見光(松平)	一六六
		景衡(朝倉)	二七五	鼓(岸木山豆流)	二二二	見光(松平)	一六六
		景新(香川)	五〇五	支邊(黒川道祐)	八六	見光(松平)	一六六
		景樹(香川)	一〇七五	支實(佐河田昌俊)	四六	見光(松平)	一六六
		景傳(堀原)	九九〇	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		景龍(加藤)	四九六	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		景平(香川)	八〇八	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		景教(香川)	一五七五	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		景雄(三島)	七八二	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		景真(橋取魚彦)	四六〇	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		敬儀(羽山)	七八四	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		敬雄(羽田野)	一四四八	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		積古樓(石橋武國)	一三三七	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		積三郎(竹村銀)	一六五五	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六
		啓山(橋澤孝)	七三五	支實(佐河田昌俊)	二	見光(松平)	一六六

源吉(富士谷御杖)	八五三	光輔(近藤)	五七六	源三郎(大末等)	一四七
源五郎(瀨名貞雄)	一三〇九	光勝(清水)	六六六	源三郎(大末等)	一四七
源五郎(山本惟季)	四九二	江崎(加藤千雄)	一〇〇一	源三郎(大末等)	一四七
源五郎(森山學盛)	一〇二八	廣田(貞島)	一〇〇二	源三郎(大末等)	一四七
源光院殿(栗木祐爲)	六六三	廣田(大江)	九九三	源三郎(大末等)	一四七
源之助(關矢凌雲)	二一九	廣田(鳥丸)	一〇〇三	源三郎(大末等)	一四七
源天齋(海野幸典)	六七	廣田(大野)	一〇〇四	源三郎(大末等)	一四七
健助(前田夏庭)	一三三三	廣田(内藤)	一〇〇五	源三郎(大末等)	一四七
健藏(本居宜長)	一四三三	廣田(山本)	一〇〇六	源三郎(大末等)	一四七
健藏(本居春庭)	五三六	廣田(石野)	一〇〇七	源三郎(大末等)	一四七
建季(同)	八八一	廣田(鳥丸)	一〇〇八	源三郎(大末等)	一四七
辰水(中山)	八八一	行儀(石野)	一〇〇九	源三郎(大末等)	一四七
辰住(辰根彦(石河正實))	九三三	行儀(加藤)	一〇一〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二六〇八	行儀(加藤)	一〇一一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	九八五	行儀(加藤)	一〇一二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇二九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇三九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇四九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇五九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇六九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇七九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇八九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九〇	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九一	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九二	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九三	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九四	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九五	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九六	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九七	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九八	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇九九	源三郎(大末等)	一四七
建正(本居)	二五七	行儀(加藤)	一〇一〇〇	源三郎(大末等)	一四七

公輔(河本)	九五一	古今傳授	五三	湖元(同)	五〇六	樺太夫(足代)	一四一
黃中(生川正香)	一五八九	古今傳授箱	五三二	湖春(水村)	一〇	樺太夫(大野)	一〇六
黃中(香川)	八〇八	古松軒(古川辰)	五二六	湖澤(佐河田具俊)	八八一	樺太夫(大野)	一〇六
紅町(垣本重臣)	一〇〇〇	古林秋の祖	五二五	徒論(木居内膳)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
甲文正(中村守手)	一五五七	古道(小野)	五二四	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
厚比(飯野)	一三三七	古登音岐の舎(橋村淳風)	一六六七	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
降臨時人(伊能顯則)	二二一〇	こぎつれの刀	五二七	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
岡陵(伴林光平)	一四三三	小七郎(眞野安通)	五二七	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
五架園(澤田名垂)	一四三三	小次郎(德川宗武)	五二七	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
五十機園(荒木田久老)	六六七	小太郎(加納晴平)	一五二九	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
五十崎翁(玉水正英)	二九四	小太郎(齋藤彦麻呂)	一三三六	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
五郎右衛門(服部教友)	七七一	小兵衛(村田了阿)	一三八六	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
五郎齋(石川雅望)	九二八	國安(逢谷)	一五八五	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
五郎左衛門(吉川惟足)	九三	國學校創立啓文	二八五	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
くぐれの翁(澤田名垂)	九三	國家入論	七六六	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古學宗匠	一〇二六	國秀(生田)	一〇二九	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古學道統の教	一〇二〇	國柱(白尾)	一〇二九	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古學の祖	六〇七	國風社	一〇二九	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古學の祖	三三三	國柱(林)	一〇二九	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古學の祖	二二八	寄居子庭(近藤芳樹)	一五四〇	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古學の博士	三九九	梅園(市岡彦彦)	八七九	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古齋堂(鹿持雅澄)	一三三三	極秘神林勸請	二九四	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古今傳授	九	谷崎(矢野玄道)	一五七六	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六
古今傳授	五八	湖源(北村湖元)	五〇九	徒論(同)	一八一	樺太夫(大野)	一〇六

名號索引(コーサ)

九

國學者傳記集成

Table of biographical entries for scholars, including names like 左京(赤尾可吉), 左近(岡田正利), and 左次右衛門(山岡俊明), with associated page numbers and titles.

Table of biographical entries for scholars, including names like 子奇(荒木田藤子), 子馨(羽倉惟徳), and 子謙(多田義俊), with associated page numbers and titles.

名號索引(シ)

實事求是書室(狩谷敏齋)	1006	事賀(伴信友)	1129	武尊(長瀬)	1099	心算(大木)	1174
實所庵(村山素行)	1007	治部(天野信景)	1131	武國(石橋)	1100	心算(藤田)	1175
しづ子(油谷傑文子)	1008	しづ子(丸山作樂)	1132	武田(和泉)	1101	心算(光一)	1176
日新堂(徳川光圀)	1009	辰(古川)	1133	武田(藤田)	1102	心算(光一)	1177
日章堂(平胤清)	1010	辰方(松岡)	1134	武田(香川景徳)	1103	心算(光一)	1178
日政(元政)	1011	菅阿(藤田行成)	1135	武田(香川)	1104	心算(光一)	1179
日養(山名義豊)	1012	菅一(近藤芳樹)	1136	武田(香川)	1105	心算(光一)	1180
日峰(妙子(元政))	1013	信愛(羽倉)	1137	武田(香川)	1106	心算(光一)	1181
日蘭(黄金谷(橋本寛))	1014	信阿(彌陀佛(天野信景))	1138	武田(香川)	1107	心算(光一)	1182
しづの舎(加藤美樹)	1015	信安(北村湖元)	1139	武田(香川)	1108	心算(光一)	1183
四天王(縣門)	1016	信景(天野)	1140	武田(香川)	1109	心算(光一)	1184
四天王(平安和歌)	1017	信那(羽倉)	1141	武田(香川)	1110	心算(光一)	1185
四天王(置門)	1018	信賢(熊谷直好)	1142	武田(香川)	1111	心算(光一)	1186
四大家(天保)	1019	信光(栗原)	1143	武田(香川)	1112	心算(光一)	1187
四當(書屋(北慎言))	1020	信盛(荷田春滿)	1144	武田(香川)	1113	心算(光一)	1188
四郎右衛門(吉田元長)	1021	信之助(吉田敏成)	1145	武田(香川)	1114	心算(光一)	1189
四郎左衛門(新納常有)	1022	信美(羽倉)	1146	武田(香川)	1115	心算(光一)	1190
四郎左衛門(伴仲輔)	1023	信名(中山)	1147	武田(香川)	1116	心算(光一)	1191
しづの舎(橋本寛)	1024	信友(伴)	1148	武田(香川)	1117	心算(光一)	1192
忍岡(藤土(河邊一也))	1025	真一(河喜多真彦)	1149	武田(香川)	1118	心算(光一)	1193
鎌倉(西田直養)	1026	汎湖(賀茂)	1150	武田(香川)	1119	心算(光一)	1194
推垣内(市岡猛彦)	1027	汎琴(近藤)	1151	武田(香川)	1120	心算(光一)	1195
しひの舎(餘輝道人)	1028	汎弓(内山)	1152	武田(香川)	1121	心算(光一)	1196
		汎環(大國隆正)	1153	武田(香川)	1122	心算(光一)	1197

集(大竹)	785	重賢(小野)	898	藤原(春田永平)	1035	藤原(水原)	1198
周永(伴林光平)	786	重春(渡邊)	899	種信(青柳)	1036	藤原(水原)	1199
周榕(融拙)	787	重野(藤部真顯)	900	主水(黒川春村)	1037	藤原(水原)	1200
朱櫻園(中村守手)	788	重明(徳田柳軒)	901	主水(徳田柳軒)	1038	藤原(水原)	1201
秀頌(河村)	789	重名(渡邊)	902	主水(樋口宗武)	1039	藤原(水原)	1202
秀堅(清宮)	790	重禮(黒澤清滿)	903	主税(林國雄)	1040	藤原(水原)	1203
秀賢(伊庭)	791	州五郎(伴信友)	904	主税(荒木田久老)	1041	藤原(水原)	1204
秀興(河村秀頌)	792	從時(吉川雅足)	905	主税(長野義言)	1042	藤原(水原)	1205
秀根(河村)	793	收時(高屋近文)	906	主税(瀧名貞雄)	1043	藤原(水原)	1206
秀作(飯野厚比)	794	習之助(佐々木弘綱)	907	出石(橋平彦)	1044	藤原(水原)	1207
秀樹(多田義俊)	795	琴芳園(内山真弓)	908	荒園(岡)	1045	藤原(水原)	1208
秀成(堀)	796	舟木軒(山本春正)	909	十右衛門(打佐光軌)	1046	藤原(水原)	1209
秀倉(高橋)	797	藤明(和田宗淳)	910	十九郎(前田宗徳)	1047	藤原(水原)	1210
秀名(松下見林)	798	淑彦(井上)	911	十哲(桂園)	1048	藤原(水原)	1211
秀和(小野寺)	799	叔藏(藤井貞幹)	912	十哲(藤田)	1049	藤原(水原)	1212
秋圃(山田清安)	800	叔梁(栗田真)	913	十二月の消息文	1050	藤原(水原)	1213
秋齋(多田義俊)	801	守剛(荒木田)	914	十二大家(藤田)	1051	藤原(水原)	1214
秋成(上田)	802	守人(飯田武郷)	915	十平(中山義水)	1052	藤原(水原)	1215
秋長(玄如)	803	守年(飯田)	916	十郎左衛門(井澤長芳)	1053	藤原(水原)	1216
萩家(落合直文)	804	守臣(飯田)	917	十郎左衛門(井澤長芳)	1054	藤原(水原)	1217
萩盛(林良水)	805	守手(中村)	918	十郎左衛門(井澤長芳)	1055	藤原(水原)	1218
重隆(渡邊)	806	守節(中村)	919	順吉(田山教徳)	1056	藤原(水原)	1219
重遠(谷)	807	壽山(長谷川保樹)	920	順水郎(中村守節)	1057	藤原(水原)	1220

Table with 4 columns: Name (e.g., 春野(村田)), Page Number, Name (e.g., 庄助(賀茂武胤)), Page Number, Name (e.g., 尙願(寺島)), Page Number, Name (e.g., 正吉(平岡)), Page Number.

入

Table with 4 columns: Name (e.g., 瑞賢(橋)), Page Number, Name (e.g., 権内(市岡)), Page Number, Name (e.g., 誠(大田)), Page Number, Name (e.g., 静庵(最川)), Page Number.

正辰(古川)	五二八	政藤(夏茂武酒)	五二八	千引(大石)	九六五	長文(周)	一〇〇九
正臣(山本)	八三三	政藤(天野)	六九七	千陸(加藤)	七〇一	長石田舎(藤原行成)	一〇〇九
正珠(平田爲胤)	一一二	精長(河邊)	七八	千益(正田)	一〇五〇	泉介(山水爲隆)	一〇〇九
正澄(高橋爲夢)	一一七	青藍(藤取魚彦)	四六〇	千幹(正木)	一一九	泉慶(小野)	六〇〇
正直(内藤駒兜)	一六七	世襲(鶴峰茂申)	一三六七	千古(一柳)	九五二	運慶(金谷與時)	一〇〇九
正重(荒木田久老)	六六七	星成(大石千引)	九九五	千古の二人	二八五	全慶(太田)	一〇〇九
正敦(堀田)	九三三	是翁(武野安通)	四九七	千波の節	五八七	川泉(藤田大華)	一〇〇九
正風林	七五九	是香(六人部)	一八五	千秋(横井)	五三〇	川々光生(清原爲隆)	一〇〇九
正平(萩原)	一五九	寂庵(椿仲輔)	一三〇	千種(横井)	五三〇		
正明(石原)	八〇一	寂照院月江(藤原居士)(小澤成慶)	三三〇	千大郎(田中大秀)	八六五		
正養(石河)	一六〇	石園(飯田年平)	一五五六	千川(高橋)	一六七〇		
正利(岡田)	三〇六	赤子(岡西惟中)	八八	千竹園(藤爲泰)	一〇〇九		
正立(北村)	一九八	關亨(關野洲瓦)	九九五	千植(城戸)	一一八		
正路(丸山作樂)	一六四六	關の湖	九〇八	千文(山岡俊明)	四四七		
西通(中村守手)	一五九七	鶴崎舎(小原君雄)	九〇七	千彌(堀保己)	八二九		
西山(徳川光胤)	五二二	鶴屋(香川景敏)	九〇〇	千右衛門(富士谷成幸)	四四七		
西山(徳川同)	五二	雲江(中根)	一一二	千右衛門(富士谷御杖)	八八四		
西山(加藤行成)	一三三	雲臣(垣本)	一〇〇〇	善後院(藤原之)	一〇〇九		
四峰山人(松下見林)	二〇三	節齋(富田禮彦)	一四三七	善受院(藤原之)	一〇〇九		
菅菰堂(多田敏包)	八六三	節信(喜多村)	一五三七	善兵衛(野田忠康)	三〇七		
正香(生川)	一五八九	宜阿(香川)	二七一	善兵衛(香川興真)	三〇七		
晴勝(大館)	一四六六	宜阿彌(香川)	二七一	善慶(藤原代弘)	一〇〇九		
政仲(多田雅俊)	三〇九	宜長(本居)	五二六				

宗泰(前田)	二九	疏儀莊	二二七	大枝(兼合)	一〇五	たかたけ(後醍醐天皇)	一〇〇九
宗固(萩原)	四六三	則澄(鹿島鶴翁)	一五〇	大秀(田中)	一〇〇九	たかてら(後醍醐天皇)	一〇〇九
宗實(加藤行成)	一三八四	則文(若林)	一〇〇	大次郎(大草公繁)	七八九	たかとよ(日下高直)	一〇〇九
宗恒(高橋)	三三五	足穂(日下田)	一五九二	大突(村田春野)	七九九	たかなは(小野高直)	一〇〇九
宗淳(和田)	七〇〇	率然子(徳川光胤)	一一二	大輔(村田泰足)	八五二	たかなは(藤原高直)	一〇〇九
宗十郎(三井高隆)	六五五	袖子(菊地)	一〇三九	大介(同)	八五二	たかひこ(千原重隆)	一〇〇九
宗太郎(増田)	一五一一	巽軒(志賀)	一五三三	大助(加藤英樹)	四四二	たかひこ(木下幸文)	一〇〇九
宗直(高橋)	四七六	露孫(千家)	一〇〇	大藏(立桐)	九四四	たかま(大國隆正)	一〇〇九
宗武(徳川)	二四六	露朝(千家)	一〇三三	大藏(木下勝俊)	七九二	たかま(三井高直)	一〇〇九
宗武(橋口)	一九二	露澄(千家)	一三三	太平(本居)	九四四	たかま(三井高直)	一〇〇九
宗庭(津村)	六九六			太平(紀原)(中山信名)	一〇一	たかひ(物部高直)	一〇〇九
桑園(久米幹文)	一六一五			泰宗(元政)	五	たかひ(羽田野敏雄)	一〇〇九
撒園(飯野厚比)	一一八七			泰山(谷重直)	二五五	たけさ(飯田武雄)	一〇〇九
若梧(大塚嘉樹)	六五九			泰洲(富山)	二五五	たけの庵(藤井高直)	一〇〇九
増業(大關)	一一九			泰勝院(宗玄)(細川隆賢)	五	たけの庵(藤井高直)	一〇〇九
總三郎(清宮秀堅)	一五三七			泰足(村田)	八五二	たけひ(市岡隆正)	一〇〇九
雙松軒(松岡辰方)	一一二			台麓(村田了阿)	一一八	たけ丸(松木智彦)	一〇〇九
草々舎(大石千引)	九九五			たかか(三井高直)	六五五	たせ(村田多勢子)	一〇〇九
層城(富士谷成幸)	四四四			たかか(後醍醐天皇)	一五五	たそがれの小野(松平定信)	一〇〇九
若生子(荷田)	四八四			たかか(村田高直)	一一八	多慶(神山魚貫)	一〇〇九
惣大夫(石川依平)	一三八〇			たかく(本居内遠)	一〇〇	多聞次(鈴木春隆)	一〇〇九
藤島庵(打它光軌)	一七三			たかすみ(千家重澄)	一五五	多門(佐田隆秀)	一〇〇九
崇蓮社(天學保徳樂翁)(松平定信)	八九八					多門(若下貞隆)	一〇〇九
						ただか(波多氏)	一〇〇九

名號索引 (ソータ)

ただおき(村田春道)	三三七	たれまろ(平胤藩)	三三三	丹子(小野寺)	一六八	海原(海原守)	一三六
ただし(小山儀)	四八八	たのも(菅沼斐雄)	九三二	丹三郎(谷重遠)	二二五	ちかけ(橋平)	一〇一
ただとみ(堀忠實)	一四〇二	たびのや(中村守臣)	二八三	丹次(今村虎成)	六六六	ちかま(白鳥隆雄)	一〇三
ただとも(藤原忠朝)	一六一	たよせ(長瀬真幸)	九一九	丹四郎(谷垣守)	三三三	ちかは(高橋千川)	一六〇
ただとも(種井田忠友)	二二三	た(の)尼	八六八	丹内(谷武湖)	四八八	ちから(林隆雄)	九二
ただなか(水野忠央)	一三三八	田兵衛(小林歌城)	三三九	ためあき(安藤為宗)	二四八	ちから(荒木因久)	六六七
ただなり(村田春郷)	三三三	太平(畑中盛雄)	四九八	ためおき(大山為起)	二二	ちから(荒木因久)	六六七
ただひこ(飯田忠彦)	一三八五	太郎(丸山作樂)	一六四六	ためかけ(冷泉為景)	五三	竹庭(藤田隆雄)	九六
ただまさ(森為泰)	一五〇三	太郎(中島廣足)	一四一〇	ためざい(安藤為實)	二四三	竹庭(藤田隆雄)	九六
ただまさ(野田忠勝)	二〇七	太郎(屋代弘賢)	一〇五八	ためなほ(橋枝直)	一六〇	竹庭(小野海舟)	一〇二
たつかた(松岡辰方)	一一一	太郎兵衛(小西春村)	六五三	ためなほ(橋枝直)	一六〇	竹庭(藤田隆雄)	九六
辰之助(堀保己)	八二七	玉河守(小山田與清)	一三二七	ためよき(冷泉為房)	二四	竹庭(藤田隆雄)	九六
たつの舎(村田春門)	一〇一六	玉の舎(後醍醐天皇)	一五三三	ためみつ(冷泉為滿)	二四	竹庭(藤田隆雄)	九六
多頭の舎(石河正業)	一六〇八	玉藤	三三八	ためむら(冷泉為村)	二四	竹庭(藤田隆雄)	九六
たつまる(石塚龍慶)	八五五	たみ子(荷田若生子)	四八四	ためもと(竹村茂雄)	二四	竹庭(藤田隆雄)	九六
たてぞの(野矢常方)	一四三九	民藏(栗田土滿)	七九一	ためやす(森為泰)	一〇五	竹庭(藤田隆雄)	九六
たての舎(中村貞顯)	一六六二	民藏(木下幸文)	八一〇	たりほ(日下田)	一三三	知今(尾崎隆雄)	一〇九
帯刀(石出吉深)	六六	殿(竹村)	一六三六			知今(尾崎隆雄)	一〇九
帯刀(小澤廣庵)	五三〇	輝翁(狩谷徹齋)	一〇〇			知明(藤田隆雄)	一〇五
帯刀(度會延經)	二四二	淡齋(谷川士清)	四三三			知明(藤田隆雄)	一〇五
帯刀(松井幸隆)	三三	彈正(島重老)	一四六〇			知明(藤田隆雄)	一〇五
たてまさ(垣本雪臣)	一〇四〇	彈正(橋村淳風)	一六六七			知明(藤田隆雄)	一〇五
谷邊(矢野玄道)	一五七六	誕生梅	一一二			知明(藤田隆雄)	一〇五
種次郎(佐久間果園)	一六〇八	丹鶴(水野忠央)	一四三八			知明(藤田隆雄)	一〇五

ちとせ(加藤千年)	一四〇四	忠興(村田春道)	三三七	長藤(青木永弘)	二四七	直樹(伴實規)	一〇六
ちなみ(加藤千派)	一五二二	忠左衛門(小川高尙)	五二	長左衛門(山崎萬利)	一六六	直樹(伴實規)	一〇六
ちびき(大石)	九九五	忠秋(渡)	二三四	長枝(林)	一〇〇	直樹(伴實規)	一〇六
ちひろ(伊達千廣)	一五〇八	忠順(村上)	二五二	長樹(加納晴平)	一五九	直樹(伴實規)	一〇六
ちよ庭(伊能魚彦)	四六〇	忠朝(藤原)	一六一	長秋(衣川)	一六	直樹(伴實規)	一〇六
ちよつか	四六二	忠次郎(清原雄風)	七三	長秋(有賀)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
ちよみ(山岡俊明)	四四三	忠之丞(藤井高尙)	一〇六	長俊(藤原)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
ちふる(一柳千古)	九三	忠入郎(宮部從正)	四九	長淳(四方田)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
ちもの(舎)吉野義登)	一六七三	忠兵衛(植松有信)	七八	長嘯子(木下勝俊)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
椿園(氷室長翁)	一四〇六	忠邦(水野)	一七〇	長輔(入江昌喜)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
椿舎(山本昌隆)	一八七	忠實(堀)	一〇二	長藏(村田春郷)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
鎮吉(久保季拉)	一五五	忠友(種井田)	一三二	長伯(有賀)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
茶屋七助(石橋武國)	一三三七	神廻(畑中盛雄)	四九	長壽(伊勢貞丈)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
中(大國隆正)	一四六六	虫雄(吉本)	六七	長流(下河邊)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
中衛(木居宜長)	三三六	萬(ツタの部)見上)	六七	長雨庭(川島茂樹)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
仲衛(大國隆正)	一四六六	微(多田義俊)	三〇	細根院(武者小路實隆)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
中山道(藤居士)色川三中)	一三九五	長因(有賀)	一〇	朝三(水)木下幸文)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
中齋(橋本稻彦)	七二六	長員(中川自休)	四八	朝風(堀)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
中務(村田春野)	七二六	長右衛門(關野洲真)	一〇六	直庭(度會延經)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
中齋(服部)	七二六	長翁(氷室)	九三	直風(藤原正平)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
中齋(大竹集)	七二六	長雅(平岡)	一〇	直見(松田)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
仲達(富士谷成章)	四四四	長好(望月)	二二〇	直見(須賀)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
忠何(村田春郷)	三三三	長孝(望月長好)	六八	直好(須賀)	一〇	直樹(伴實規)	一〇六
忠興(細川)	一四					直樹(伴實規)	一〇六

つたのや(岡村教邦)	1066	貞寄(佐藤)	1059	傳左衛門(山本昌隆)	1087	道安(山中道隆)	1088
つたのや(千葉葛野)	1067	貞福(松平定信)	888	傳兵衛(大石千引)	995	道尾(菅原)	1089
つれかた(野矢常方)	1068	貞見(大石千引)	995	天眞院性善(津野重文)	1090	道貞(菅原)	1090
つれき(橋常樹)	1069	貞治(保田光則)	1061	天放山人(矢野玄道)	1091	道貞(菅原)	1091
常助(鈴木版)	1070	貞辰(萩原宗國)	1062	興清)	1092	道貞(菅原)	1092
常介(山田常興)	1071	貞春(伊勢)	1063	天目庵(伊達千廣)	1093	道貞(菅原)	1093
つれすけ(橋本經亮)	1072	貞順(吉田玄之)	1064	興勝(土肥經平)	1094	道貞(菅原)	1094
つれひら(土肥經平)	1073	貞丈(伊勢)	1065	興明(根岸)	1095	道貞(菅原)	1095
つれまさ(荒木田經雅)	1074	貞領(依田)	1066	田邊(長瀬武尊)	1096	道貞(菅原)	1096
つばき園(氷室長翁)	1075	貞融(岩下)	1067	てるまさ(藤原顯昌)	1097	道貞(菅原)	1097
つばきの舎(山本昌隆)	1076	貞雄(細井)	1068	てるみ(藤原顯昌)	1098	道貞(菅原)	1098
定為(安藤朴翁)	1077	貞真(細井)	1069	傳左衛門(山本昌隆)	1099	道貞(菅原)	1099
定基(野宮)	1078	貞真(藤原顯丸)	1070	傳兵衛(大石千引)	1100	道貞(菅原)	1100
定顯(田中)	1079	貞山(中村守手)	1071	天眞院性善(津野重文)	1101	道貞(菅原)	1101
定信(松平)	1080	棟堂(岸木山豆流)	1072	興清)	1102	道貞(菅原)	1102
定明(安藤朴翁父)	1081	萩岡(加藤千汎)	1073	天放山人(矢野玄道)	1103	道貞(菅原)	1103
定長(木村)	1082	萩葉(齋藤幸成)	1074	興勝(土肥經平)	1104	道貞(菅原)	1104
貞幹(藤井)	1083	銭胤(平田)	1075	興明(根岸)	1105	道貞(菅原)	1105
貞閑尼(久田捨子)	1084	鐵之助(辨玉)	1076	田邊(長瀬武尊)	1106	道貞(菅原)	1106
		哲太郎(千坂葛野)	1077	てるまさ(藤原顯昌)	1107	道貞(菅原)	1107
		てには秘傳	1078	てるみ(藤原顯昌)	1108	道貞(菅原)	1108
		てには秘傳	1079	傳左衛門(山本昌隆)	1109	道貞(菅原)	1109
		傳右衛門(龍野照近)	1080	傳兵衛(大石千引)	1110	道貞(菅原)	1110
		傳古(尾崎雅喜)	1081	天眞院性善(津野重文)	1111	道貞(菅原)	1111

藤園(松田直兄)	1033	徳左衛門(若林正旭)	1038	とみ(高品式部)	1043	長崎(山崎)	1048
藤垣内(本居大平)	1034	徳之(村山深行)	1039	富之助(木居實長)	1044	ながさた(木村實長)	1049
藤孝(細川備前)	1035	徳亮(徳川光圀)	1040	ともき(齋藤彦隆)	1045	ながすけ(橋本)	1050
藤三郎(伊達千廣)	1036	徳夫(大草公弼)	1041	ともきよ(小山田興清)	1046	ながとし(春田永年)	1051
藤十郎(市岡猛彦)	1037	徳兵衛(萩原元克)	1042	友助(加藤景範)	1047	ながひら(本橋永平)	1052
藤十郎(細井貞雄)	1038	徳市(山岡元隆)	1043	ともの宿願(山岡俊明)	1048	ながひろ(青木永弘)	1053
藤助(上田百樹)	1039	徳明(吉岡)	1044	ともりの(八田知紀)	1049	ながい(大橋長廣)	1054
桃溪(山本吉利)	1040	徳興(麻呂加藤千隆)	1045	ともを(山崎知雄)	1050	ながやぶ(大野)	1055
桃岡(八田知紀)	1041	吐月庵(慈延)	1046	豊宮時文庫	1051	ながとし(岡宮永軒)	1056
桃舎(長野義吉)	1042	ときほの舎(橋本輔)	1047	豊宮時文庫	1052	ながさの舎(保田光則)	1057
等空(加藤)	1043	ときほの原(林國雄)	1048	とよみ(水室真吉)	1053	ながぞの(松々木社)	1058
稻彦(橋本)	1044	ときほの原(千家俊信)	1049	寅平(藤原忠朝)	1054	ながし(山田以文)	1059
稻舎(日下田足穂)	1045	としざら(飯田年平)	1050	寅之助(橋本己二)	1055	ながし(山田以文)	1060
冬木(加藤等空)	1046	としな(吉田敏成)	1051	寅之助(橋本己二)	1056	ながし(山田以文)	1061
冬滿(荷田御風)	1047	としな(飯田年平)	1052	寅之助(橋本己二)	1057	ながし(山田以文)	1062
とがま(梅水敏雄)	1048	としな(飯田年平)	1053	寅之助(橋本己二)	1058	ながし(山田以文)	1063
ときちか(北條時隣)	1049	としな(飯田年平)	1054	寅之助(橋本己二)	1059	ながし(山田以文)	1064
ときつな(佐々木弘綱)	1050	としな(飯田年平)	1055	寅之助(橋本己二)	1060	ながし(山田以文)	1065
ときつな(藤波時綱)	1051	としな(飯田年平)	1056	寅之助(橋本己二)	1061	ながし(山田以文)	1066
ときつな(喜多村簡信)	1052	としな(飯田年平)	1057	寅之助(橋本己二)	1062	ながし(山田以文)	1067
萬胤(平田)	1053	としな(飯田年平)	1058	寅之助(橋本己二)	1063	ながし(山田以文)	1068
萬穂(平田)	1054	としな(飯田年平)	1059	寅之助(橋本己二)	1064	ながし(山田以文)	1069
萬真(平田鏡胤)	1055	としな(飯田年平)	1060	寅之助(橋本己二)	1065	ながし(山田以文)	1070
萬利(山崎)	1056	としな(飯田年平)	1061	寅之助(橋本己二)	1066	ながし(山田以文)	1071

名號索引 (テーナ)

なほすけ(若林正旭)	1108						
なほすけ(権田直助)	1159						
なほたけ(萩原正平)	1190						
直太郎(竹村茂枝)	1191	二階先生(飯田忠彦)	1185	のかり(安藤野藤)	1186	のよし(羽倉信俊)	1181
なほみ(比田尚監)	1192	二階辰仁右衛門(新庄道雄)	1190	の後(水原春隆)	1187	のよし(成會隆俊)	1184
なほよし(熊谷直好)	1193	三幸樓(渡邊重名)	1191	のよかけ(天野信景)	1188	のぼる(香川土清)	1185
なみき(村田春門)	1194	にこや(丸岡亮爾)	1192	のよひく(羽倉信俊)	1189	のぼる(橋本春)	1186
なみすけ(石津亮近)	1195	にし(りのあるじ)(村田春海)	1193	のよまろ(平田延風)	1190	のりか(村田春海)	1187
並藏(北村季任)	1196	日(ウツ水見上)	1194	のよもつ(栗原信光)	1191	のりな(水原實成)	1188
瀧淵(加藤等空)	1197	にはまろ(橋守部)	1195	のよもり(村田東清)	1192	のりよ(吉田今世)	1189
南邦(服部一)	1198	忍野(大野廣城)	1196	のよゆき(吉岡信之)	1193		
南翁(橋一)	1199	忍岡(河邊一也)	1197				
南翁院(湯原明)(同)	1200	任有亭(玄如)	1198				
南公(深澤篤)	1201	如意園(大國隆正)	1199				
南山(朝倉景術)	1202	葵園(萩原勝道)	1200				
南塘(椿仲輔)	1203	入門野崎	1201				
南嶺子(多田隆俊)	1204						
ならぞの(古川松根)	1205						
ならぞの(小寺清先)	1206						
ならぞの(竹村茂正)	1207						
奈良傳授	1208						
なりあきら(富士谷成章)	1209						
なるたき(清水谷實業)	1210						

梅竹堂連阿彌持居士(香川景平)	1191	伯任(栗原信光)	1191	牛兵衛(平田篤胤)	1191	英勝(小林實書)	1191
梅里(徳川光圀)	1192	伯風(小山儀)	1192	咲雄(伴林光平)	1192	英勝(加藤一)	1192
梅柳軒(徳川柳軒)	1193	泊酒舎(清水源臣)	1193	俊賢(岡田正利)	1193	英慶(山崎一)	1193
梅龍閣(中神守節)	1194	薄齋(黒川春村)	1194	俊賢(加藤等空)	1194	英石(中山一)	1194
梅嶺(大石千秋)	1195	箱傳授	1195	飯山(小野高尙)	1195	英仲(橋本一)	1195
培次郎(河村秀根)	1196	範次(城戸千鶴)	1196	機水齋(田中道隆)	1196	英一(橋本茂中)	1196
貝子(深尾一)	1197	入右衛門(彌秀成)	1197	機水園(本居内隆)	1197	英八(橋本茂成)	1197
準人(佐藤貞奇)	1198	八月滿(田中大秀)	1198	はりの木の齋(田中道隆)	1198	英八(橋本茂成)	1198
はぎその(加藤千隆)	1199	入左衛門(墨澤清滿)	1199	播磨(春日水年)	1199	英六(下河津長隆)	1199
萩齋(林長木)	1200	入建(高井一)	1200	はるあき(生川正吉)	1200	英六(下河津長隆)	1200
はぎのや(落合直文)	1201	八箇	1201	はるか(鈴木春隆)	1201	英六(下河津長隆)	1201
破鏡尼	1202	八士の俊才	1202	はるか(大崎晴勝)	1202	英六(下河津長隆)	1202
栢岡(赤尾可官)	1203	八郎(太田全齋)	1203	はるか(大崎晴勝)	1203	英六(下河津長隆)	1203
栢岡(新庄道雄)	1204	入郎左衛門(小原君雄)	1204	はるか(大崎晴勝)	1204	英六(下河津長隆)	1204
白亥齋(中村守臣)	1205	はな子(織田花子)	1205	はるか(大崎晴勝)	1205	英六(下河津長隆)	1205
白華坊(天野信景)	1206	花田文庫	1206	はるか(大崎晴勝)	1206	英六(下河津長隆)	1206
白敬(前田宗恭)	1207	花鹿陰(竹村茂枝)	1207	はるか(大崎晴勝)	1207	英六(下河津長隆)	1207
白石(新井一)	1208	はなれや(鈴木康)	1208	はるか(大崎晴勝)	1208	英六(下河津長隆)	1208
白濁老人(入江昌喜)	1209	ははかの岡(中村守臣)	1209	はるか(大崎晴勝)	1209	英六(下河津長隆)	1209
白鶴園(千葉葛野)	1210	はまむ(清水源臣)	1210	はるか(大崎晴勝)	1210	英六(下河津長隆)	1210
白斐童子(権田直助)	1211	濱五郎(加藤等空)	1211	はるか(大崎晴勝)	1211	英六(下河津長隆)	1211
伯高(清原雄風)	1212	菴(清田名垂)	1212	はるか(大崎晴勝)	1212	英六(下河津長隆)	1212
伯震(木岡游清)	1213	牛齋(鈴木一保)	1213	はるか(大崎晴勝)	1213	英六(下河津長隆)	1213
		牛次郎(入江昌喜)	1214	はるか(大崎晴勝)	1214	英六(下河津長隆)	1214

常陸介(小寺清先)	七九八	兵部(多山義俊)	三〇九	武右衛門(伴部安隆)	二〇七	小幡(藤野平比)	二〇七
ひらまる(栗田土滿)	七八一	福巻(山崎知雄)	一三九二	武輝(飯田一)	一六六一	小幡(飯田直見)	二〇八
ひてか(天野英茂)	二六三	櫻助(津井田忠友)	一三〇二	武家の三歌人	一一二	小幡(木原大平)	二〇九
ひてか(伊庭秀賢)	一四八四	淨流(小川一)	七九八	武左衛門(津山資雄)	二〇五	藤太(藤持清澄)	二一〇
ひてか(清宮秀盛)	一三三七	響龍(小鏡敏)	六五〇	武平(伴香竹)	二〇六	ふびと(小山田實清)	二一〇
ひてか(河村秀頼)	二六九	ひろか(鬼島廣隆)	一四八五	武義(山崎知雄)	一四九二	淨水	二一〇
ひてき(多田義俊)	三〇九	ひろか(島丸勝賢)	六六	亮翁(關一)	一四九二	淨水(淨水)	二一〇
ひてき(大國隆正)	一四六六	ひろし(栗田寛)	一六二九	不可思議(元政)	三六	文清(石時一)	二一〇
ひてなり(堀秀成)	一五六四	ひろさき(内藤廣前)	一四三〇	不米橋(月田茂隆)	二一八	文清(高橋正盛)	二一〇
ひてのり(伊能頼則)	一五二〇	ひろたり(中島廣足)	一四一〇	不占(堀綱風)	九九〇	文敬先生(田中康成)	二一〇
ひてぶみ(大國隆正)	一四六六	ひろとき(横井千秋)	三三三	不知慶(平頼信)	三三三	文鏡大英(村中春樹)	二一〇
ひてを(飯田秀雄)	一三八三	ひろつな(佐々木弘綱)	一四九七	不比(大關智業)	一三〇六	文三郎(和泉義隆)	二一〇
敏(小鏡一)	六五四	ひろのり(足代弘綱)	一三〇一	不忘(戸田茂隆)	二二八	文鏡(小山田實清)	二一〇
敏夏(服部一)	七九一	ひろみ(大江廣海)	九八二	不味(長尾島丸光榮)	五〇七	文鏡(飯山栄)	二一〇
敏彌(大塚嘉樹)	六九八	ひろみち(石野廣通)	二二二	復初(梶原景時)	九九〇	文太(中村守平)	二一〇
敏鏡(梅木一)	一五二一	ひろみち(萩原廣道)	一四〇七	復太郎(河村秀儀)	二二〇	文鏡(甘酒義隆)	二一〇
敏成(吉田一)	一四三八	ひろみつ(片岡寛光)	一〇三六	富山(土肥經平)	四九八	文鏡(野矢常方)	二一〇
敏包(多田一)	八六三	ひろむ(足代弘綱)	一三〇二	富草(石津亮澄)	一〇四四	文鏡(野矢常方)	二一〇
備後(竹内享壽)	一四二二	風火翁(吉見寺和)	三三九	富南(秋山幸)	五五五	文鏡(井上一)	二一〇
百庵(寺町三知)	三三三			府生(鈴木重胤)	一四〇五	文鏡(光妙(道隆七)開)	二一〇
百樹(上田一)	六五五			府生(吉岡信之)	一四〇二	浄海翁(野矢常方)	二一〇
百里(木間游清)	一三六九			布楚(沼沢義隆)	九九八	ふらふら(小野古道)	二一〇
斐雄(菅沼一)	九九二			ふさ(水原一)	五五五		
兵庫(水宮長翁)	一四〇六			布淑(小川淨流)	七九八		

平右衛門(竹村茂雄)	二一九四	平吉(萩原元克)	七九一	平九郎(竹村茂枝)	六五八	平大兵衛(古川辰)	一四一八	平十郎(吉野義卷)	一六七三	平四郎(村田春海)	七三三	平四郎(中山信名)	一〇一三	平治郎(松岡辰方)	一一二一	平蔵(石野廣通)	九四九	平蔵(佐原鞠場)	四六六	平蔵(伊勢貞丈)	一一九二	平太郎(吉田合世)	一一九二	平之丞(田中定顯)	二二九	平八(佐原鞠場)	九四九	平兵衛(同)	九四九	米居(石津亮澄)	一〇三三	並樹(村田春門)	一〇一六	碧海(内藤聡叟)	一六七六	兵衛(木居建正)	九八五
平右衛門(林樹雄)	七九一	平吉(萩原元克)	七九一	平九郎(竹村茂枝)	六五八	平大兵衛(古川辰)	一四一八	平十郎(吉野義卷)	一六七三	平四郎(村田春海)	七三三	平四郎(中山信名)	一〇一三	平治郎(松岡辰方)	一一二一	平蔵(石野廣通)	九四九	平蔵(佐原鞠場)	四六六	平蔵(伊勢貞丈)	一一九二	平太郎(吉田合世)	一一九二	平之丞(田中定顯)	二二九	平八(佐原鞠場)	九四九	平兵衛(同)	九四九	米居(石津亮澄)	一〇三三	並樹(村田春門)	一〇一六	碧海(内藤聡叟)	一六七六	兵衛(木居建正)	九八五
平右衛門(竹村茂雄)	二一九四	平吉(萩原元克)	七九一	平九郎(竹村茂枝)	六五八	平大兵衛(古川辰)	一四一八	平十郎(吉野義卷)	一六七三	平四郎(村田春海)	七三三	平四郎(中山信名)	一〇一三	平治郎(松岡辰方)	一一二一	平蔵(石野廣通)	九四九	平蔵(佐原鞠場)	四六六	平蔵(伊勢貞丈)	一一九二	平太郎(吉田合世)	一一九二	平之丞(田中定顯)	二二九	平八(佐原鞠場)	九四九	平兵衛(同)	九四九	米居(石津亮澄)	一〇三三	並樹(村田春門)	一〇一六	碧海(内藤聡叟)	一六七六	兵衛(木居建正)	九八五
平右衛門(林樹雄)	七九一	平吉(萩原元克)	七九一	平九郎(竹村茂枝)	六五八	平大兵衛(古川辰)	一四一八	平十郎(吉野義卷)	一六七三	平四郎(村田春海)	七三三	平四郎(中山信名)	一〇一三	平治郎(松岡辰方)	一一二一	平蔵(石野廣通)	九四九	平蔵(佐原鞠場)	四六六	平蔵(伊勢貞丈)	一一九二	平太郎(吉田合世)	一一九二	平之丞(田中定顯)	二二九	平八(佐原鞠場)	九四九	平兵衛(同)	九四九	米居(石津亮澄)	一〇三三	並樹(村田春門)	一〇一六	碧海(内藤聡叟)	一六七六	兵衛(木居建正)	九八五
平右衛門(竹村茂雄)	二一九四	平吉(萩原元克)	七九一	平九郎(竹村茂枝)	六五八	平大兵衛(古川辰)	一四一八	平十郎(吉野義卷)	一六七三	平四郎(村田春海)	七三三	平四郎(中山信名)	一〇一三	平治郎(松岡辰方)	一一二一	平蔵(石野廣通)	九四九	平蔵(佐原鞠場)	四六六	平蔵(伊勢貞丈)	一一九二	平太郎(吉田合世)	一一九二	平之丞(田中定顯)	二二九	平八(佐原鞠場)	九四九	平兵衛(同)	九四九	米居(石津亮澄)	一〇三三	並樹(村田春門)	一〇一六	碧海(内藤聡叟)	一六七六	兵衛(木居建正)	九八五

まさ子(矢部正子)	五三〇	まつあき(山岡俊明)	四九四	かつら(安國朝枝)	六九六
政藏(賀茂汎湖)	三三九	まつふた(花安松江子)	四九四	かつら(富士特朝枝)	六九六
正藏(須賀直兄)	三三三	まつれ(古川松根)	四九四	かぬ(小波敷)	六九六
まさたか(奥平昌高)	九四八	まつのや(間宮永好)	一〇四六	巴之助(瀬名貞雄)	七〇〇
まさとき(古川辰)	五二八	まつのや(藤井高尙)	一〇四六	みはし(後藤隆實住)	七〇〇
まさつね(飛鳥井雅廣)	三三三	まつのや(小山田興治)	一〇四六	みはる(奥野秀治)	七〇〇
政之酒(菅沼斐雄)	九九三	まどの村竹(多田敏包)	八六三	真朝山人(加藤千雄)	七〇〇
まさひろ(桃澤夢宅)	七三三	まひ(河野多真彦)	一〇四六	民部卿(尾花)	七〇〇
まさふち(賀茂汎湖)	三三三	まひ(丸山作樂)	一〇四六	みち(尾花(岡田良波))	七〇〇
まさもち(石川雅忠)	九二八	まよ(賀茂汎湖)	一〇四六	宮川合(重藤光廣)	七〇〇
まさゆき(鈴木雅之)	一〇四五	萬(一柳千古)	一〇四六	宮崎文雄	七〇〇
まさよし(入竹昌喜)	五二二	萬(生田國秀)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
まさよし(尾崎雅彦)	八七九	萬吉(細川幽齋)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
ましての屋(岡本保孝)	五三〇	萬治郎(城戸千橋)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
増五郎(稻村三羽)	一〇四五	萬水樓(香川景樹)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
ますなり(大關増榮)	二〇九	萬助(伊勢貞春)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
ますれ(河村益根)	八〇一	萬藏(殿村常久)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
ますみ(岡田眞澄)	七二二	萬非(石河正實)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
又左衛門(加藤枝直)	七〇一	萬葉以後の四人	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
又左衛門(加藤千雄)	七〇一	緒泰(多田雅俊)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
又左衛門(間宮永好)	一〇四六	まゆ(内山武時)	一〇四六	妙道守(龍門)	七〇〇
又左衛門(加藤千年)	一〇四六			妙道守(龍門)	七〇〇
復太郎(河村秀根)	二〇〇			妙道守(龍門)	七〇〇
まさ子(祇園町子)	二三〇			妙道守(龍門)	七〇〇

むぐりのや(物集高世)	二五九	明阿(山岡俊明)	四九四	茂太郎(矢野玄道)	一〇四六
むぐら(黒澤翁新)	二五九	明曉(松岡)	一五八	茂兵衛(桃澤夢宅)	二〇九
夢山(池袋清風)	一六〇	明如(田中定順)	四九四	茂雄(竹村)	二〇九
夢宅(桃澤)	七三三	明亭(山本)	一〇四六	水船州(木村内造)	一〇四六
夢野(金谷興詩)	一〇四六	明倫堂	一〇四六	歌(前橋)	七〇〇
無相(僧文雄)	三三三	名垂(澤山)	一〇四六	歌(前橋)	七〇〇
無助居士(上田秋成)	七二七	綿衣先生(大曾集)	七六六	歌(前橋)	七〇〇
無佛齋(藤井貞幹)	九〇〇			歌(前橋)	七〇〇
無用道人(誠拙)	六九六			歌(前橋)	七〇〇
無量(福田太華)	一〇四六			歌(前橋)	七〇〇
無六翁(橋常樹)	三三三			歌(前橋)	七〇〇
むつなしの翁(同)	三三三			歌(前橋)	七〇〇
むれあつ(和田宗淨)	七〇〇			歌(前橋)	七〇〇
むれしげ(島重老)	一〇四六			歌(前橋)	七〇〇
むれたけ(徳川宗武)	二〇九			歌(前橋)	七〇〇
むれたけ(樋口宗武)	一〇四六			歌(前橋)	七〇〇
むれひろ(伊達千廣)	一〇四六			歌(前橋)	七〇〇
むれやす(前田宗泰)	一〇四六			歌(前橋)	七〇〇
むんぞの(村田春門)	一〇四六			歌(前橋)	七〇〇
むんぞの(片岡寛光)	一〇四六			歌(前橋)	七〇〇
務康(福田)	七九			歌(前橋)	七〇〇

やすたか(岡本保孝)	一四三〇	雄(主田四秀)	一〇一八	廣道(入江昌喜)	二二四	○上(木村實雄)	一〇三六
やすたみ(秋元安民)	一四三五	雄三郎(鈴木重胤)	一〇〇五	廣重(久松松之)	二二五	○中(金谷興幹)	一〇〇五
やすみち(眞野安通)	四九七	雄風(清原一)	七三二	廣善(細川一)	二二六	○下(金谷興幹)	一〇〇五
やすむろ(小中村清矩)	一六三〇	雄(小川淳流)	七九二	廣海(玉松操)	二二七	○千(醍醐可合子)	一〇〇五
やすもり(殿村安守)	六五七	男(兒山紀成)	一〇〇〇	廣隆(平野國臣)	二二八		
やすら(關野洲長)	九三二	男太郎(丸山作樂)	九六一	有和(北條實)	二二九		
やすは(高井八雄)	七三三	男雄(松野一)	一六一	悠然(徳川宗武)	二三〇		
八十吉(栗川寛)	一三二九	男(兒山紀成)	七九二	瀧源	二三一		
八十子(岡宮一)	一五九〇	男太郎(川崎重勝)	九六一	右平(安藤爲章)	二三二		
八十百(木居六平)	九三〇	男(兒山紀成)	一〇〇〇	○のり(海野幸典)	二三三		
八十八(熊谷直好)	一三九七	男太郎(丸山作樂)	九六一	○のり(松岡行義)	二三四		
也足軒(中院通勝)	一	男雄(松野一)	一六一	○げひ(大江廣海)	二三五		
宿屋の飯盛(石川雅彦)	九八	男(兒山紀成)	七九二	○げひ(中根雪江)	二三六		
○なき園(石川依平)	一三八〇	男(兒山紀成)	七九二	○げひ(藤井田忠友)	二三七		
○なき園(海野幸典)	一三三三	男(兒山紀成)	七九二	山清(橋山一)	二三八		
○なき園(伊東祐命)	一五八三	男(兒山紀成)	七九二	○の香木園(川中大秀)	二三九		
○なき園(渡千秋)	一四四四	男(兒山紀成)	七九二	○つる(岸木山豆流)	二四〇		
○がき(伴部安樂)	二四七	男(兒山紀成)	七九二				
野木瓜(大草公弼)	七八九	男(兒山紀成)	七九二				
大和(鹿島鶴翁)	一四〇二	男(兒山紀成)	七九二				
○まの(浅香久敬)	七八	男(兒山紀成)	七九二				
○まぶさ(竹内京彦)	一四二七	男(兒山紀成)	七九二				
○まぶさ(岸木山豆流)	一三二一	男(兒山紀成)	七九二				
○まむろ山	六〇五	男(兒山紀成)	七九二				

擁齋(小山田與清)	一三三七	○の(村上忠順)	一五一一	理平(長谷川健輔)	一五八六
橋伯(清原雄風)	七三三	○りの(吉川惟足)	九五	○月(尾崎雅彦)	一〇三六
朔之(大菅榮)	七九五	○りの(平縁信)	四二六	○松(松井一)	一〇三七
浴恩園	九〇八	○りひら(石川依平)	一三〇〇	密集(梶原景淳)	九九〇
餘馨(上田秋成)	七二七				
○の子(船越餘野子)	四八六				
環山(一柳千古)	九三二				
環八郎(飯野厚比)	一三二七				
○しあき(野中誠明)	九三〇				
○しあき(中村良顯)	一六六二				
○しおみ(中村良臣)	一三六九				
○しか(六人部是香)	一八五				
○しかげ(井上淑隆)	一四二二				
○しき(近藤芳樹)	一四〇〇				
○しき(大塚嘉樹)	六九九				
○しき(横山由清)	一五三九				
○し(と)(長野義言)	一三九六				
○しなほ(木下幸文)	八〇				
○しすけ(近藤芳介)	一六三九				
○しの(柳原芳野)	一五四九				
○しひら(吉川榮平)	一五五〇				
○しまき(吉野義彦)	一六七三				
○しもと(平尾義本)	一〇三六				
○しゆき(山本嘉之)	一〇三六				

瓦野(野田忠友)	三九	瓦子(荒木田)	六七四	六克(野田忠友)	三〇	小(海軍)	一〇一
瓦野(同)	三五九	今世(吉田)	二九二	六友(平橋信)	三〇六	小川(海軍)	一〇二
瓦野(中村)	二九九	冷泉	三三	六藤右衛門(小山田典清)	三〇七	小川(海軍)	一〇三
瓦野(中村)	二六八	櫻園(河野多良)	二五二	鹿住里人(久保季直)	三〇八	小川(海軍)	一〇四
瓦野(林)	二六八	源(備原芳野)	二五三	鹿鳴神會(藤原廣道)	三〇九	小川(海軍)	一〇五
俊賢(關矢)	六七	源阿(川島茂樹)	九三			小川(海軍)	一〇六
藤園(野矢常方)	一三九	蓮月(大田垣)	一五〇	和學院總校心明光原士(橋本)	一〇七	小川(海軍)	一〇七
藤園(種井田忠友)	一四一	蓮社(僧文雄)	三〇	一)		小川(海軍)	一〇八
藤生(中村瓦野)	一六二			和學所	一〇七	小川(海軍)	一〇九
藤舍(同)	一六二			和藤(宮田健彦)	一〇八	小川(海軍)	一〇一〇
涼賢(野矢常方)	一三九			和助(林隆島)	一〇九	小川(海軍)	一〇一一
亮瑞(亞元)	一〇七三			和藤(千葉富野)	一一〇	小川(海軍)	一〇一二
亮澄(石津)	一〇三三			渡邊(和泉廣國)	一一一	小川(海軍)	一〇一三
亮々(木下幸文)	八〇			わたる(天壽度)	一一二	小川(海軍)	一〇一四
了蓮寺(文雄)	三三六			櫻文字(油谷)	一一三	小川(海軍)	一〇一五
令の目錄	三三					小川(海軍)	一〇一六
後雄(菅沼聖雄)	九九三					小川(海軍)	一〇一七
						小川(海軍)	一〇一八
鈴屋(本居宜長)	五三六・六〇一					小川(海軍)	一〇一九
禮彦(富田)	一三三七					小川(海軍)	一〇二〇
						小川(海軍)	一〇二一
						小川(海軍)	一〇二二
						小川(海軍)	一〇二三
						小川(海軍)	一〇二四
						小川(海軍)	一〇二五
						小川(海軍)	一〇二六
						小川(海軍)	一〇二七
						小川(海軍)	一〇二八
						小川(海軍)	一〇二九
						小川(海軍)	一〇三〇
						小川(海軍)	一〇三一
						小川(海軍)	一〇三二
						小川(海軍)	一〇三三
						小川(海軍)	一〇三四
						小川(海軍)	一〇三五
						小川(海軍)	一〇三六
						小川(海軍)	一〇三七
						小川(海軍)	一〇三八
						小川(海軍)	一〇三九
						小川(海軍)	一〇四〇
						小川(海軍)	一〇四一
						小川(海軍)	一〇四二
						小川(海軍)	一〇四三
						小川(海軍)	一〇四四
						小川(海軍)	一〇四五
						小川(海軍)	一〇四六
						小川(海軍)	一〇四七
						小川(海軍)	一〇四八
						小川(海軍)	一〇四九
						小川(海軍)	一〇五〇
						小川(海軍)	一〇五一
						小川(海軍)	一〇五二
						小川(海軍)	一〇五三
						小川(海軍)	一〇五四
						小川(海軍)	一〇五五
						小川(海軍)	一〇五六
						小川(海軍)	一〇五七
						小川(海軍)	一〇五八
						小川(海軍)	一〇五九
						小川(海軍)	一〇六〇
						小川(海軍)	一〇六一
						小川(海軍)	一〇六二
						小川(海軍)	一〇六三
						小川(海軍)	一〇六四
						小川(海軍)	一〇六五
						小川(海軍)	一〇六六
						小川(海軍)	一〇六七
						小川(海軍)	一〇六八
						小川(海軍)	一〇六九
						小川(海軍)	一〇七〇
						小川(海軍)	一〇七一
						小川(海軍)	一〇七二
						小川(海軍)	一〇七三
						小川(海軍)	一〇七四
						小川(海軍)	一〇七五
						小川(海軍)	一〇七六
						小川(海軍)	一〇七七
						小川(海軍)	一〇七八
						小川(海軍)	一〇七九
						小川(海軍)	一〇八〇
						小川(海軍)	一〇八一
						小川(海軍)	一〇八二
						小川(海軍)	一〇八三
						小川(海軍)	一〇八四
						小川(海軍)	一〇八五
						小川(海軍)	一〇八六
						小川(海軍)	一〇八七
						小川(海軍)	一〇八八
						小川(海軍)	一〇八九
						小川(海軍)	一〇九〇
						小川(海軍)	一〇九一
						小川(海軍)	一〇九二
						小川(海軍)	一〇九三
						小川(海軍)	一〇九四
						小川(海軍)	一〇九五
						小川(海軍)	一〇九六
						小川(海軍)	一〇九七
						小川(海軍)	一〇九八
						小川(海軍)	一〇九九
						小川(海軍)	一〇一〇〇

明治三十七年八月二十日印刷
 明治三十七年八月廿五日發行

定價金四圓

大川 茂 雄
 南 茂 樹

著 者
 作 者
 者 乘

東京市京橋區銀座丁目廿二番地
 大日本圖書株式會社

東京市京橋區銀座丁目廿二番地
 大日本圖書株式會社

右代表者
 專務取締役 宮川 保 全

大阪市東區北久太郎町四丁目十七番地
 大日本圖書株式會社支社

各府縣下特約販賣所

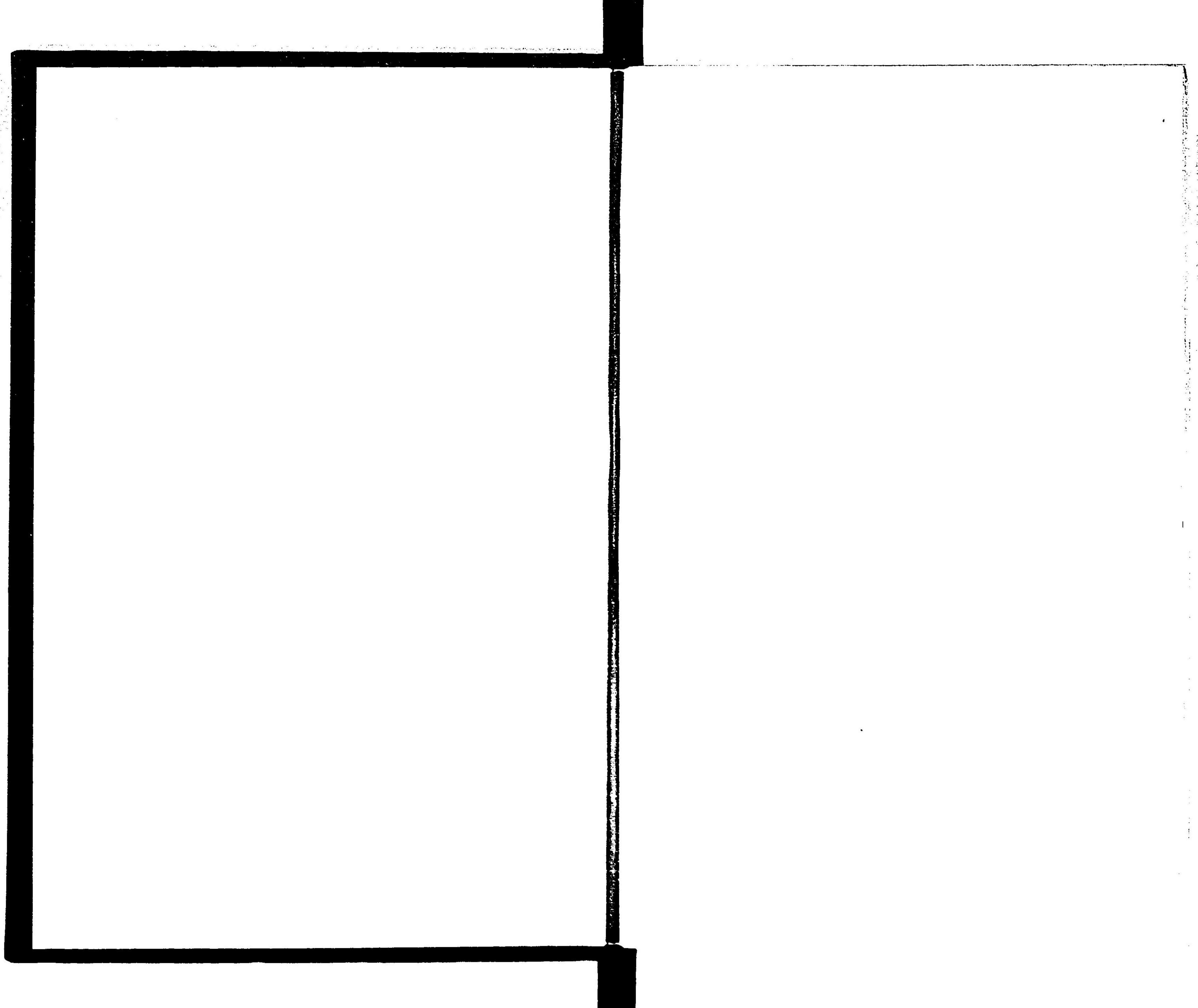
發 賣 所

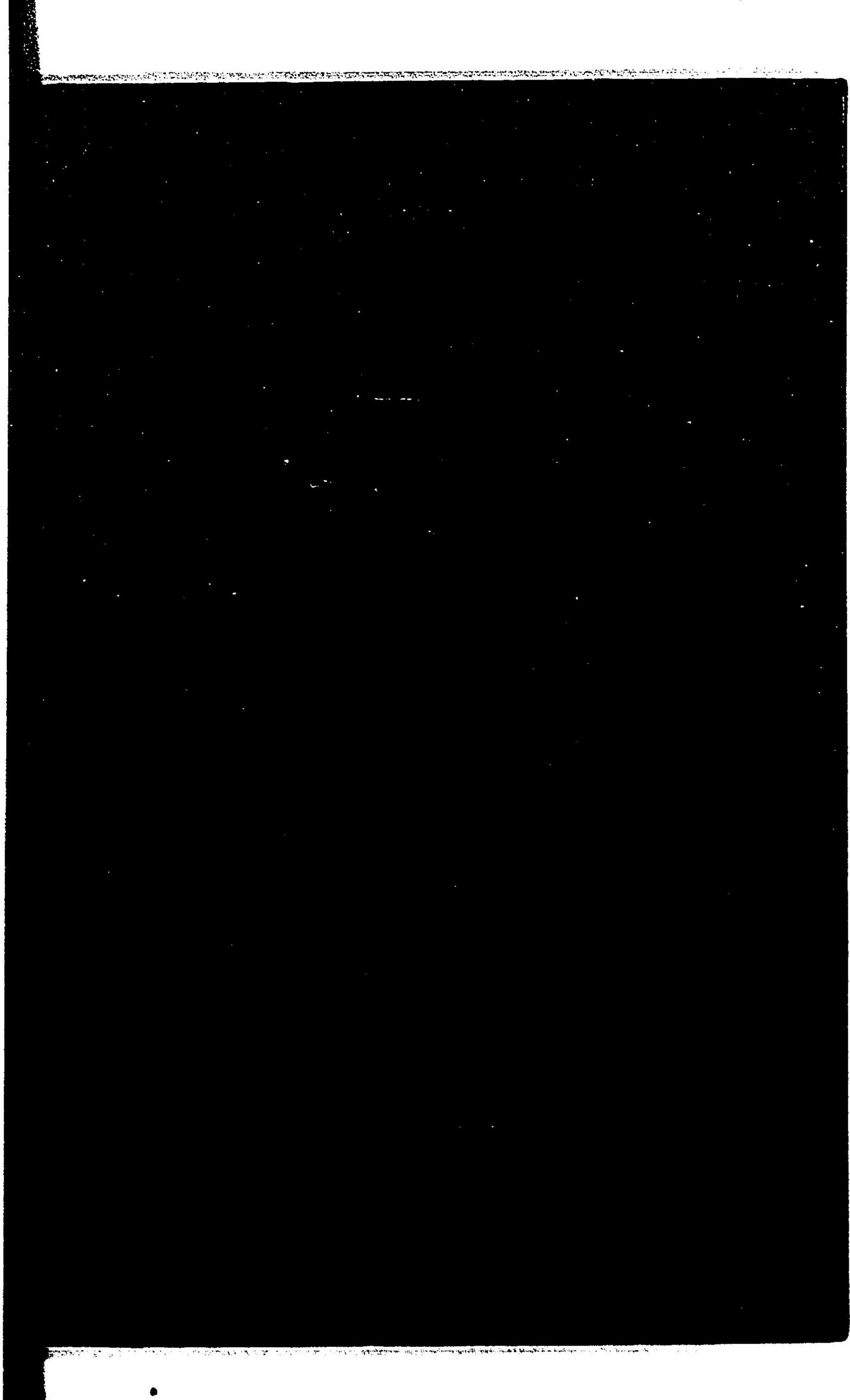
不 許 複 製

所賣販約特書圖版出社會式株書圖本日大

北海 小園。萱岡。白鳥。川南。池田。野文會。一二。山本。最上。村上。文林堂。水野。東京。六六
 館。丸善。仙鶴堂。中野。青野。中西。杉村。大山。中央。松島。森江。大倉。金剛。北原。三友。海潮。内田。
 東洋堂。文會堂。嵩山房。榮進館。夏明堂。青年堂。柏屋。五葉堂。田沼。丸屋。高島。高橋。豐原。
 野島書店。四村。中山。萬松堂支店。北光社。松田。目野。山本。榎村。水野。いんじや。盛化堂。南古堂。
 煥平堂。文江堂。淨觀堂。木田。多田屋。伊瀨。明文堂。川又。大塚屋。寺田。南無堂。高
 木。宮田。内山。水樂屋。平石。青木。安藤。水東書店。川瀬。吉見。谷崎屋。
 古澤。菅沼。大石。柳正堂。都文堂。日新堂。水手堂。小林。朝陽館。西海。盛文堂。丸山。
 藤崎。虎屋。陽文堂。丁子屋。上野屋。文洋堂。佐藤。近藤。藤田。河山。今泉本店。
 今泉支店。伊吉。盛文堂。日向。牧野。五十嵐。相原。晴堂。東洋林。藤崎。藤澤堂。中田。
 學海堂。柳田。若林。中井。河合。松田。村上。南波。中村。岡島。金川。中川。柳原。小谷。
 松村。三木。藤原。吉岡。前川。丸善。田中。三宅。石田。北村。金尾。石井。木田。中井。竹内。熊谷。石川。
 福浦。竹内。木村。藥師寺。虎興號。集英堂。木原。木原支店。高橋。寶田。三川。
 四村。宇都宮。近田。古香堂。藤岡。今井。藤谷。安達。大塚。關山。川岡。坂倉。前
 武内。鈴木。兒玉。原田。藤川。村田。白根。小原。宮井。宮崎。宮崎。宮崎。宮崎。
 井。入江。島友。向井。土肥。澤本。石田。森岡。高竹。梅津。中野。佐野。甲斐。野
 依。牧川。河内。長崎。松井。津野。野崎。谷。吉田。久米。豐見橋。有馬。

製本局





12
9531k
11

005423-000-8

121.2-0531k

国学者伝記集成

大川 茂雄
南 茂樹 / 共編

M37

ACF-0663



